

北海学園大学  
教職課程年報

第18号

2026年3月

北海学園大学教職課程

# 北海学園大学教職課程年報

## 第 18 号

### 〈巻頭言〉

教員の「聴く」力	北海学園大学法学部教授（教職課程委員長）	後藤 聡	1
----------	----------------------	------	---

### 〈研究報告〉

教職課程履修者の4年間の取組の実態と意識に関する調査（報告） — 教職課程履修4年生へのアンケート結果から —	北海学園大学人文学部講師 北海学園大学工学部講師 北海学園大学経営学部講師 北海学園大学人文学部講師	上野 直幸 小形 秀雄 元紺谷尊広 田中弥栄子	3
高等学校数学科における仮説検定の授業研究 — 高等学校で初めて指導する「仮説検定」をどのように教材研究し、 授業を構成するか —	北海道立教育研究所主査	城戸 和彦	25
教科「理科」における気象教育に関する一考察	北海道立教育研究所主査 北海学園大学工学部講師	城戸 和彦 小形 秀雄	39
デジタル学習基盤を活用した「個別最適な学び」における教師の支援と生徒の学び — 中学校の社会科の事例から —	北海学園大学法学部教授 和歌山大学教育学部講師	五十嵐素子 布川 由利	49

### 〈教職課程研究会報告〉

1周目を終えて 教師になって — 大学生の自分に伝えたいこと —	市立札幌藻岩高等学校教諭	福田さとみ	69
教師のやりがい	北海道稚内高等学校教諭	三浦 静也	74
あなたの「想い」が未来を創る	帯広市立西陵中学校教諭 市立札幌みなみの杜高等支援学校長	山崎 風也 小山 学	79 83

### 〈教育実習体験記〉

4年間の教職課程と教育実習	北海学園大学工学部生命工学科4年	梶田 宙	90
---------------	------------------	------	----

## 〈合格体験記〉

北海道高等学校公民科政治経済を受験して

	北海学園大学法学部政治学科 4年	奥山 結衣	92
教員を目指した4年間	北海学園大学工学部電子情報工学科 4年	高木 幸大	95
遠回りしながら進んだ、教員への四年間			
	北海学園大学経営学部経営情報学科 4年	渡会 絢音	98
教員採用試験と大学4年間	北海学園大学工学部生命工学科 4年	安藤 凜音	101
教員採用試験について	北海学園大学人文学部日本文化学科 4年	五井 彩桜	104
なんとかなるのが人生、なんとかするのが自分、なんとかできるのが自分			
	北海学園大学人文学部日本文化学科 4年	西村 結衣	107

## 〈退職に寄せて〉

振り返り見る連山に思う事	北海学園大学人文学部講師	上野 直幸	109
教職に想う	専門学校北海道リハビリテーション大学校講師	板東 眞一	111

## 〈業務報告〉

2025年度 教職準備研修会(学外研修)報告			
	北海学園大学経営学部講師	元紺谷尊広	113
2025年度 教職準備研修会(学内研修)・教職課程研究会報告			
	北海学園大学工学部講師	小形 秀雄	139
2025年度 教職課程インターンシップ報告	北海学園大学経営学部講師	元紺谷尊広	146
2025年度 一般社団法人全国私立大学教職課程協会・北海道私立大学・短期大学教職課程研究連絡協議会に関する活動報告			
	北海学園大学法学部教授	後藤 聡	147

## 〈資料〉

2025年度 ガイダンス等			150
2025年度 会議実施状況			151
2025年度 実習実施状況			152
2025年度 教育実習校訪問指導者一覧			153

編集後記			155
------	--	--	-----

## 教員の「聴く」力

後 藤 聡

北海学園大学法学部教授（教職課程委員長）

言語には四つの技能がある。読む、書く、話す、聴くである。教員の業務でこれらの技能は全て必要であるが、学生には大学生活の中でそれをどの程度学ぶ機会があるだろうか。

読む、書くについては、学業の基本として学部を問わず大学生活全般の中で経験しながら技能を高めていく可能性がある。子どもたちに直接影響を与えるのは話すと聴くであろう。話すについては、ゼミナール、教職課程に特化すれば教科教育法での模擬授業などで経験する機会がある。では「聴く」はどうだろうか。講義を聴くことは学業の中心であり、他の技能に比べて活用頻度は高いかもしれない。しかし、それは学生という立場で情報を一方的に受け取るという働きにすぎない。本稿での「聴く」というのは、単に語彙や文を聴きとったり理解したりすることの可能性を指すのではない。相手の話を聴いて何に関心を持つのか、それによってどんな質問をして深く聴こうとするのかという質を問題とすることである。

教員という立場で「聴く」となると最も重要な相手は子どもたちであり、聴き方の質が問われることになるため傾聴が必要と考える。カール・ロジャーズが active listening という考えを示しているように、相手がどうしてそんな話し方をするのか、どんな気持ちで話しているのかなど、相手が語り切れていない心にも関心を向けて質問しながら積極的な聴き方をして相手を理解しようとし、大切にしようとする心構えが必要ではないだろうか（カウンセリング辞典、心理学大辞典より）。残念ながら大学の教職課程にはそれを実践的に学ぶための科目がない。

かつて学生の協力を得て高校までの学校生活の一端について調査したことがある。その中には「本音で何でも話せる信頼できる先生がどの位いたか。」という質問がある。回答を集計したところ、0人22.6%、1人21.3%、2人26.4%、3人16.6%、4人6.0%、5人以上7.2%で、平均1.87人であった。小・中併置校などの小規模校に例外はあるかもしれないが、クラス担任、教科担任を合わせると直接関わった教員は20人以上いたはずである。それにも関わらずこのような結果になったのをどう解釈すればよいであろうか。一つ考えられることとして、児童、生徒のときに教員の「聴く」姿勢に満足していなかったことを表しているのではないだろうか。自分の価値観で考えを話すのではなく、前記のような心構えで子どもの話を傾聴できる教員が少なかったのではないかと憂いを感じてしまう。

筆者は、教員がはじめを受けた子どもから聴き取った情報を読むことがある。「何をされたか」、「どこでされたか」、「誰にされたか」、「いつされたか」などの事実は必ず尋ねている（当たり前であり必要でもあるが）。しかし、「それをされてどんな思いをしたのか」、「いじめられているのにどんな気持ちで学校に通っていたのか」、「いじめた子どもにどんな感情があるのか」、「いじめた子どもとどんな思いでつき合っていたのか」など、子どもの心に関心を持って質問した結果はあまり見当たらない。いじめ防止対策推進法におけるいじめの定義は、「いじめとは…当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。（一部抜粋）」であり、「心身の苦痛を

感じる」と明示されているにも関わらず、聴く立場の心構えとして、被害を受けた人に対して気持ちを聴いて理解したことを示すことが必要ではないだろうか。

人の話には、事実だけではなく、自ら語らないとしても考えや感情などの心が潜んでいる。人は自然と自分が関心のあることを尋ねるものであろう。例えば、誰かが外食したことを聴くと、何を食べたのか、どこの店に行ったのか、味はどうだったのかを質問する人は当たり前のようにいるだろう。しかし、楽しい思いをできたのか、満足したのか、食べながらどんな気持ちになったのか、どれだけ充実した気持ちで過ごせたのかなどに関心を持つ人がどのくらいいるのだろうか。事実に関心を持つことは簡単であるが、気持ちなどの心に関心を持って対話（単なる会話ではなく）するのは難しいものである。

不登校、いじめなどの教育問題が増加傾向にあるのは統計上周知のことである。いじめは手段や方法が多様化、陰湿化していることが指摘されている。厚生労働省のデータによると、自殺死亡率（10万人あたり的人数）は、自殺対策基本法の施行以来大人が約20年間減少傾向にあるにも関わらず、10代のみ直近の約10年間は徐々に増加している。その動機が家庭、健康、経済・生活、勤務、交際、学校、その他に分類されている中で、中学・高校生では学校問題（特に学業と進路の問題が多い。）がトップで半数近いことをどれだけの教員が知っているのであろうか。（「自らを殺す」という言葉を使用するのは酷なので自死と修正したいが、正式用語を勝手に変えられないもどかしさを付記したい。）

中学・高校生は自我の目覚めといわれる発達段階であり、それとともに小学生と比べると自己嫌悪感の上昇、自尊心の低下、心身の不安定感の上昇が研究上示されている。前記のような深刻で危機的な問題に携わる場合はいうまでもなく、このような発達の特性を持つ子どもに教員が関わる上での要件の一つは、相手の気持ちに深く関心を傾ける意識と、気持ちを引き出すことができる能力が備わった「聴く」力であると考えられる。

カウンセリングを実践している機関の運営に携わって相談事例の内容を分析すると、相談者が悩みや問題の解決を求めることは別に、とにかく話を聴いてほしい、さらに自分の気持ちを理解してほしいという願いが目立っているように感じる。これは大人のみではなく、同じ人間として子どもも同様ではないだろうか。

いうまでもなく、子どもたちにとって教員は最も身近で一番味方になるべき他人の大人である。そのためには、子どもを大切にすの一助として、前記のように子どもの心に関心を持って理解しようとして話を「聴く」力を身につけてほしいと願っている。

「聴く」力の向上は、個人のセンスの違いもあるが、知識だけですぐに実践につながることは困難であり経験が必須である。カウンセラーの養成にも携わっていると、その資格取得を目指す人でさえも、話を聴きながら心に深く関心を向けることの難しさに直面することから学習が始まる。その方々と触れ合う中で、経験を重ねていくうちに聴き方に変化が生じていくのを目の当たりにしてきた。

筆者も教員の一人として益々研鑽を積み重ねればと決意する一方で、子どもの気持ちを「聴く」力が備わった教員が巣立ってくれることを願っている。そのためには教職課程の科目にそれを育む科目を含めることが必要と考えるものの、教育職員免許法には定められておらず、重要視されていないことにもどかしさを感じている。今後の改正を願ってやまない心境である。

〈研究報告〉

# 教職課程履修者の4年間の取組の実態と意識に関する調査（報告）

— 教職課程履修4年生へのアンケート結果から —

上野直幸 北海学園大学人文学部講師・小形秀雄 北海学園大学工学部講師・  
元紺谷尊広 北海学園大学経営学部講師・田中弥栄子 北海学園大学人文学部講師  
(北海学園大学教職課程)

## I 調査目的と概要

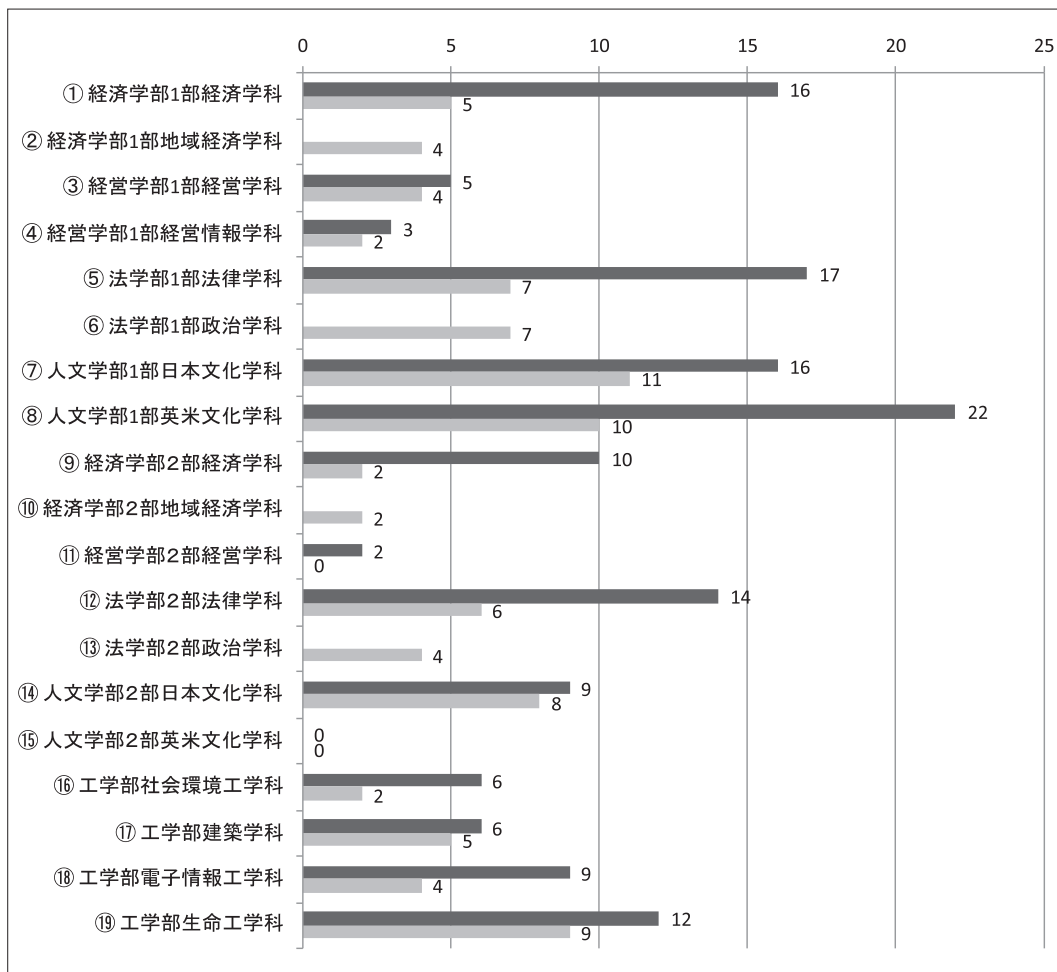
教職課程履修者が4年次生で履修する「教職実践演習」の授業の一環として、2025年11月29日(土)に実施した「教職課程研究会」においてアンケート調査を実施した。この調査は、2015年度から継続して実施しているもので、今回で11回目となる。

この調査は、教職課程を履修した学生各人が自らの4年間の取組について省察するとともに、今後の教職課程の指導改善に役立てることを目的としている。今回は特別な理由で欠席した学生を除く81名から回答を得ることができた。学生たちの回答から、彼らがどのように教職課程を履修してきたのか、また、多くの学生が目標としてきた教員採用検査への取組とその結果、卒業後の進路動向等の実態を知るとともに、学生たちの教職への思いを感じていただければ幸いである。

## II 調査結果の分析と考察

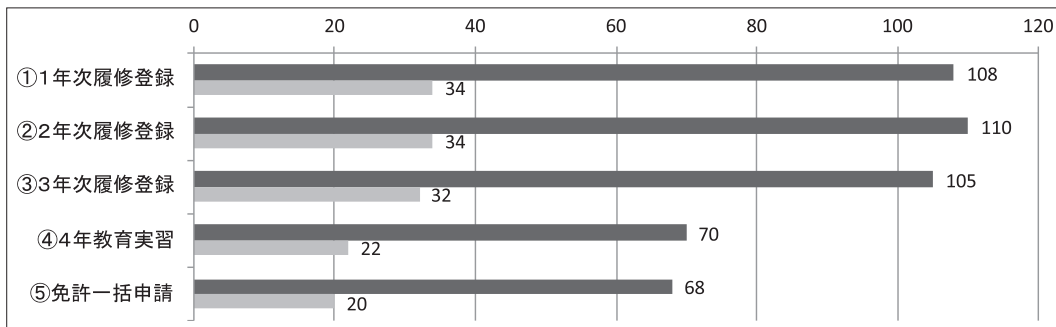
### 1 学部学科等について

4年次生が1年次の時の教職課程履修者数を上段に、現在の4年次生の教職課程履修者数を下段に、学部学科別の人数を併記した。ただし、経済学部と法学部の1年次は学科に分かれていないため、それぞれ経済学科、法律学科に一括して表示した。



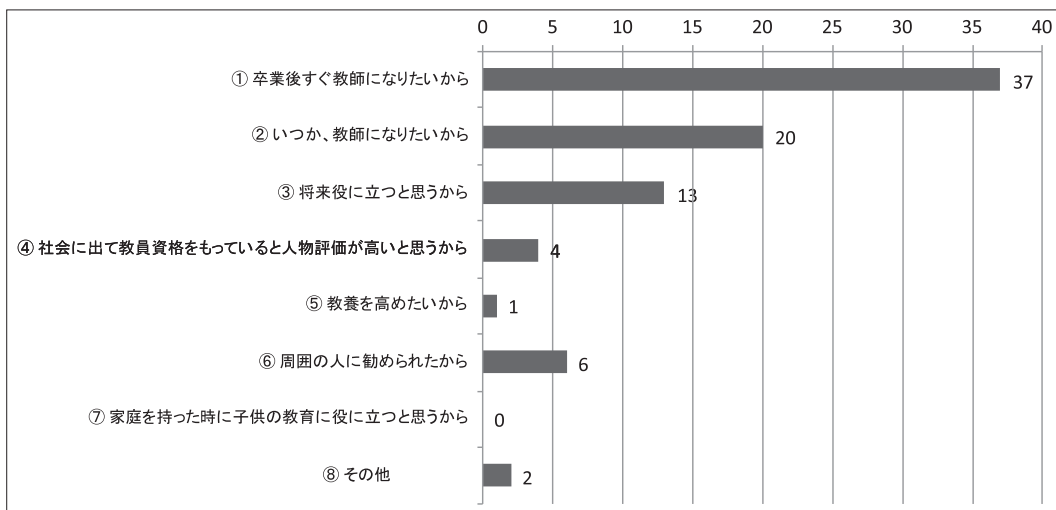
1年次に教職課程を履修した者が4年次まで継続している割合は、1部、2部ともに6割程度となっている。

※参考 年次進行による履修登録者等の変化（上段：1部生・下段：2部生）



年次別登録者数の比較においては、3年次までは1部では100名以上、2部でも30名以上の登録者数であったものが、4年次には1部生・2部生ともに3分2と大幅に減少している。最終的に免許を一括申請した人数をピーク時の人数と比較すると、1部生で61.8%、2部生で58.8%となっている。3年次において教職を断念する傾向がある。

## 2 教職課程を履修した理由について（該当するもの1つ）



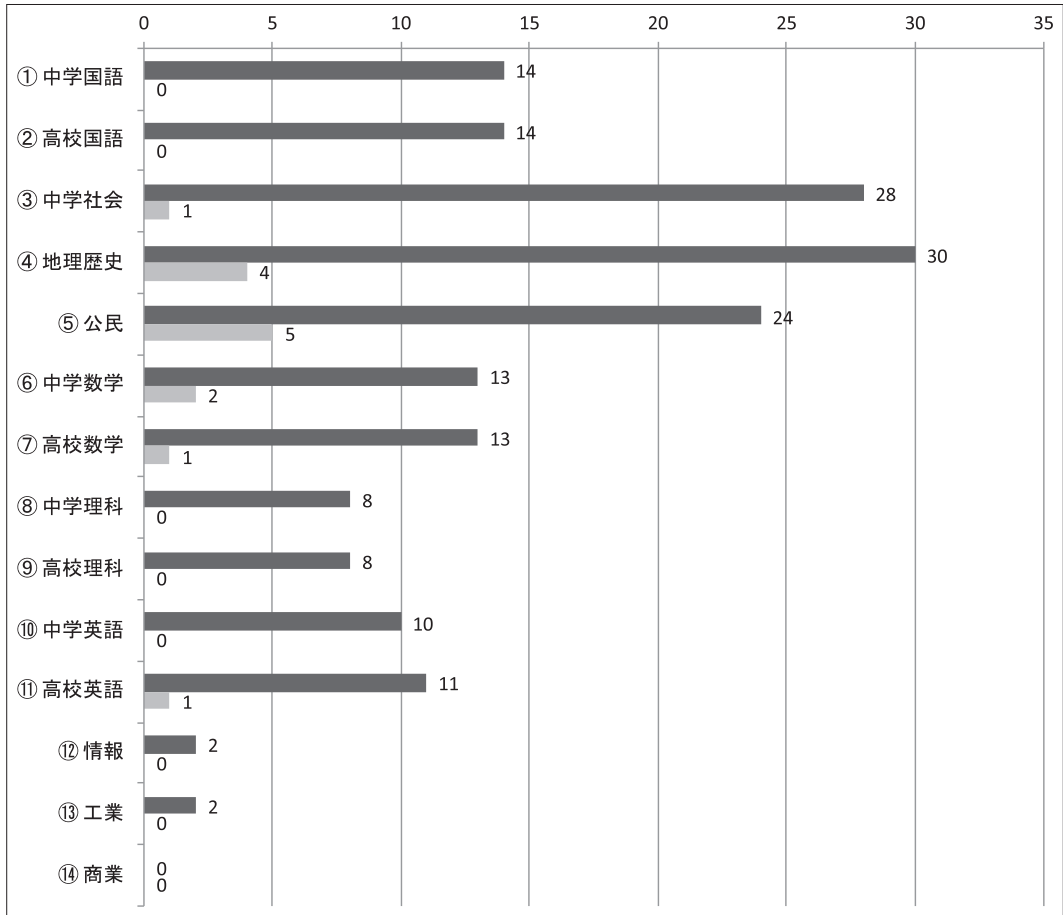
### ⑧その他の理由

- ・ 将来考えが変わり、教員になるという選択肢を残しておきたいと思ったから。
- ・ 高校生時代に教師になりたいと思っていたから。

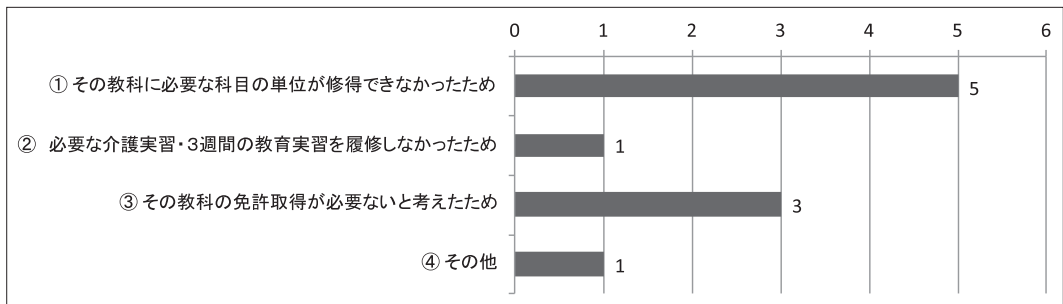
「卒業後すぐに教師になりたいから」「いつか教師になりたいから」と回答した学生が全体の68.7%を占め、教師を将来の職業選択として教職課程を履修していることがわかる。しかしながら、上記「年次進行による履修登録者等の変化」から分かるとおり、教育実習を経て免許申請に至る学生数は、3年次履修登録者に比べかなり減少しており、1部学生・2部学生ともに4割弱が減少しており、決意をもって履修した思いが、3年次まで大きく揺らいでいるのが分かる。教職に対するモチベーションを保つための対策が必要である。

3 教職課程の履修を始めた時点で取得を目指した教科について

- (1) 履修を開始したときの免許取得希望教科は何でしたか (該当するものすべて) 上段  
 (2) 希望したが卒業時に取得できなかった教科は何ですか (該当するものすべて) 下段



- (3) 取得できなかった理由は何ですか (該当するものすべて)

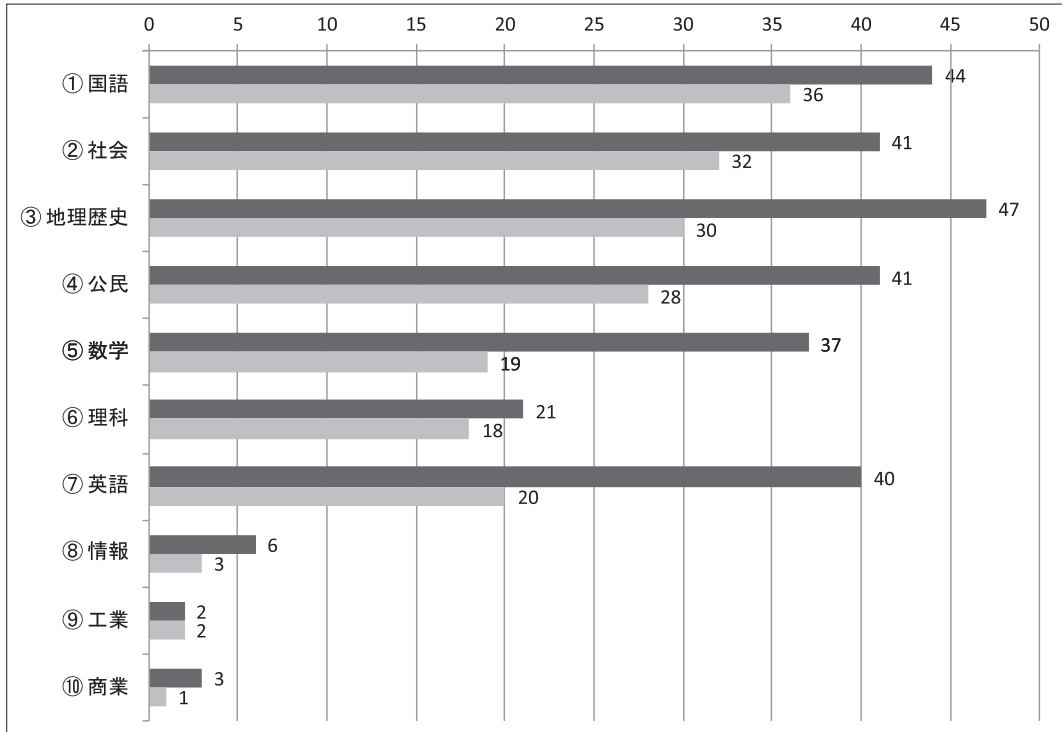


④その他の理由

- ・生命工学科で数学を取ることができなかったため。

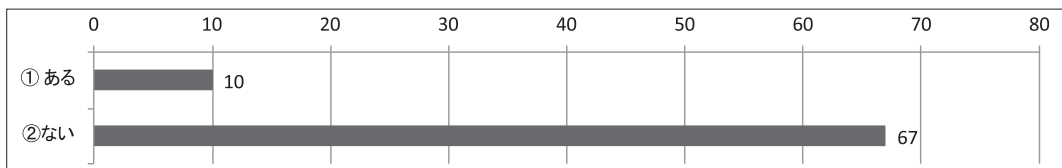
当初取得を目指した教科については、社会科系で未取得者が多く見られる。その理由については、多岐にわたっている。国語、数学、理科、英語においては、中学と高校の両方の免許取得を目指す学生がほとんどである。

※参考 各教科別の人数 上段：1年次の履修登録数。下段：最終的な免許取得数（一括申請した数）。免許は国語・数学・理科・英語は高校の数。



1年次の履修登録者数は、地歴が多く、国語、社会、公民、英語、数学がそれに続いている。最終的な免許取得率は、工業、理科、国語が比較的高く、商業、英語、情報、数学が低い結果となっている。

#### 4 卒業後、科目等履修や通信教育などで新たな免許を取る予定について



##### ① あるの内訳・理由

- ・高校地歴、高校公民、中学数学、高校数学、情報、特別支援、図書館学課程
- ・1つ単位を落としたので来年科目履修生として免許を取りたい。

上記4で教科に必要な科目の単位を修得できなかった学生の中には、本学での科目等履修生や

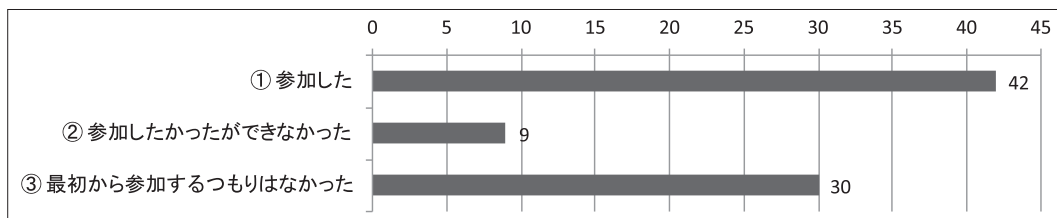
他大学の通信教育を活用して免許取得を目指す者がいる。

また、将来的には、小学校教諭、特別支援学校教諭の免許取得を科目等履修や通信教育などで免許取得することを考えている学生もいる。

### 5 3年次の学外研修について

毎年1泊2日で開催している研修である。今年度は北海道岩見沢農業高等学校と旭川市立緑が丘中学校のそれぞれの学校において、学校概要の説明、授業参観、施設見学等が行われた。

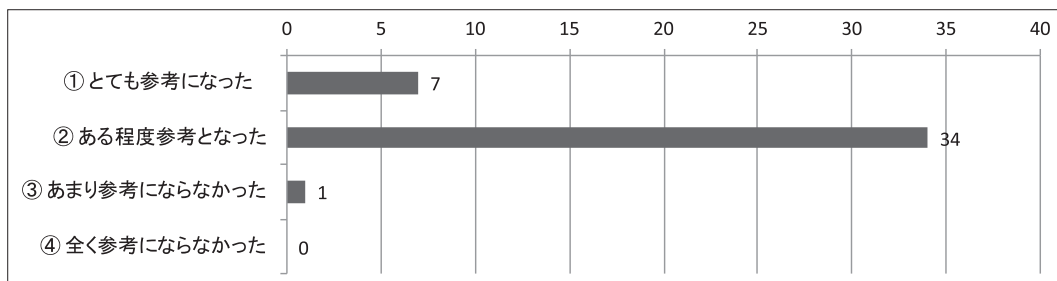
#### (1) 参加について



#### ② 参加したかったができなかった（主な理由）

- ・民間の就職活動の面接と被っていたから。
- ・民間就職のインターンシップと被っていたから。
- ・野球部の活動があったから。
- ・留学中のため。
- ・予定があったため。
- ・体調不良のため。

#### (2) 参加した場合の感想について



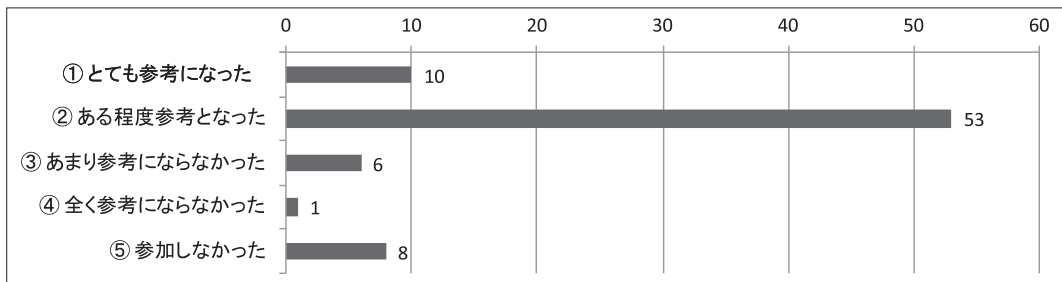
#### ① とても参考になった（主な理由）

- ・知識でしか知らなかった ICT の活用を実際の学校現場でどのように使われているか知ることができたから。
- ・面白い取り組みなどもあって、新たな発見に繋がったから。
- ・委員長をやらせていただいたことで、人を率いるということを学んだ。そして、2つの学校を訪問し、道内にも様々な高校、そしてそれぞれのカリキュラムや色があることを知れた。
- ・いくつかの学校の授業を見学させていただき、学校ごとの教育理念の違いを感じることができたから。
- ・自分が経験していない ICT の実践の形を学習することができたから、自分が通ったことのない農業高等学校について学習を深めることができたから。

- ・現場をみる機会が得られたことで、実際に授業されている先生の動きや指導について学ぶことができたため。

参加した学生の97.6%が「とても参考になった」、「ある程度参考になった」と回答している。岩見沢農業高校では、DX推進校としてドローンを活用した農法をはじめ最先端技術を導入した研究が行われており、従来の農業教育にとどまらず、デジタル技術を積極的に導入することで、生徒が未来の農業を担う人材として日々学んでいること実感できた。また、旭川市立緑が丘中学校では、ICTを効果的に活用した授業を参観した。宿泊先では実行委員会主催の交流会が実施され、同じ志を持つ者同士で充実した時間を過ごし、「教職を目指す仲間ができる」機会となった。

### 6 3年次の学内研修（教職準備研修会）について



#### ① とても参考になった（主な理由）

- ・教育実習先の先生と出会うことができたから。
- ・今後の流れやするべきことが理解できたから。
- ・面接で何がでたかまとめた冊子をいただくことができ、それを参考に解答を考えることができたから。
- ・勉強のやる気が出たから。
- ・先輩方の説明が丁寧で、自分の試験対策に安心して取り組むことができたから。
- ・教員採用試験に向けてどのような対策をして良いのか、まったくわからない状態でしたが、先輩方の話を聞いて学内研修をきっかけに勉強をスタートすることができたから。
- ・実際に現場で働いている人の生の喜びや苦しみを聞くことができたから。
- ・採用試験に対しての焦りが得られたから。
- ・前倒し試験や実習前ということもあり、試験勉強のやり方や教育実習への流れを先輩たちの体験談を基に確認することができたから。

#### ④ まったく参考にならなかった（主な理由）

- ・民間就職を決めていて、教員採用試験を受ける予定がなかったから。

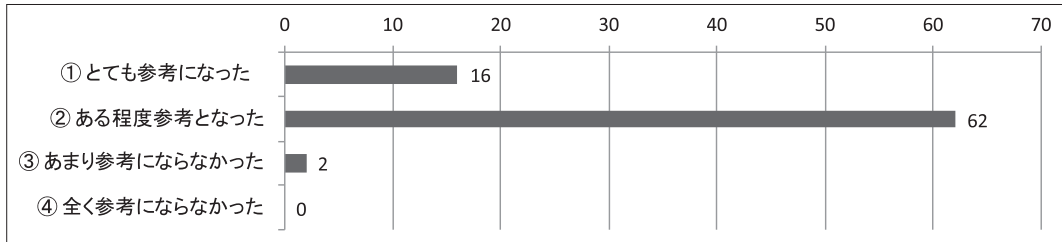
#### ⑤ 参加しなかった（主な理由）

- ・仕事の都合

例年、参加した学生の9割が「とても参考になった」「ある程度参考になった」と回答している。特に先輩からの話は非常に参考になっているようで、準備を始めるきっかけや心構えができたようである。これは有意義な研修なので、教職課程掲示板による周知のみならず、第1学期履修の「教職総合演習」や「教科教育法」のネットワーク等を駆使して連絡を徹底させ、参加者を増やす

取組を強化していく必要がある。

#### 7 4年次の学内研修（本日の教職課程研究会）について



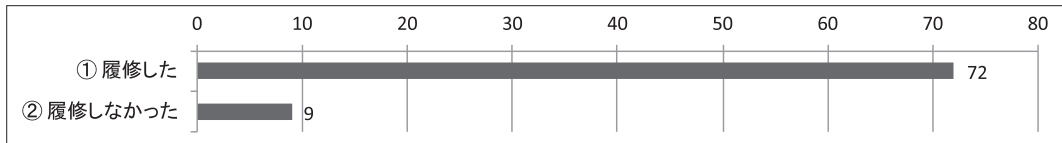
##### ① とても参考になった（主な理由）

- ・小山先生の話がとても面白かったから。こんな教員になりたいと憧れの教員が1人増えたから。
- ・実体験や教職に着いた際の悩みを解決できるものだったから。
- ・実際の教育現場の状況をきけてとても参考になりました。
- ・教員の実態が知れて、今何をすべきかがわかった。
- ・現職の教員の方の話を聞ける機会はとても貴重だから。
- ・現職の教員として働いている方の意見を聞くことで、より今後の自分のすべきことややりたい自分をイメージすることができたから。
- ・実際に先輩方の話を聞けるのでより具体的なイメージができる為、今のうちに意識すべき事が明確になった。
- ・現職の方の話を聞けるのは、ありがたい。また、伴奏者という言葉が自分にはかなり響いた。
- ・先輩方のお話を聞いて、教員として働く自分を少しだけイメージすることができたから。また教員という仕事の魅力を改めて感じることができました。
- ・教育実習を経て、学校教育の現状や、教師として求められているものをなんとなく理解した上で話を聞いたため。自分自身の課題や努力すべきことを改めて確認できたからです。
- ・実際の現場の先生の生の喜びや苦しみ、アドバイスやリフレッシュのしかたを学ぶことができたから。
- ・4つの先生方の話が退屈せず、とても面白かったため。
- ・現職の先生方のお話を聞けて、来年から現場に出る身として大変参考になったからです。
- ・現場に立っている先生方がどんな思いで生徒と関わっているか参考になりました。
- ・特別支援の生徒、また、その保護者との関わり方や、教員の人間関係の大切さ、やりがいなど、とても学ぶものが多い講義でした。先生と実際にお話しできたのもとても光栄でした。
- ・現場に立っている先生方がどんな思いで生徒と関わっているか参考になりました。

参加した学生の97.5%が「とても参考になった」「ある程度参考になった」と回答している。現職として道内各地で活躍している先輩の経験談は非常に興味深いものだったようである。しかも、「教員としての心構えを学べた」との記載のとおり、教職を目指すものとしての心構えやモチベーションもたかまったようである。

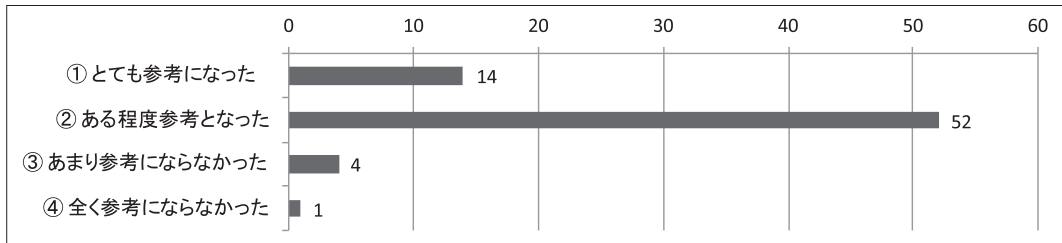
## 8 介護体験実習について

### (1) 介護体験実習について



### (2) 履修した場合の感想について

#### 社会福祉施設



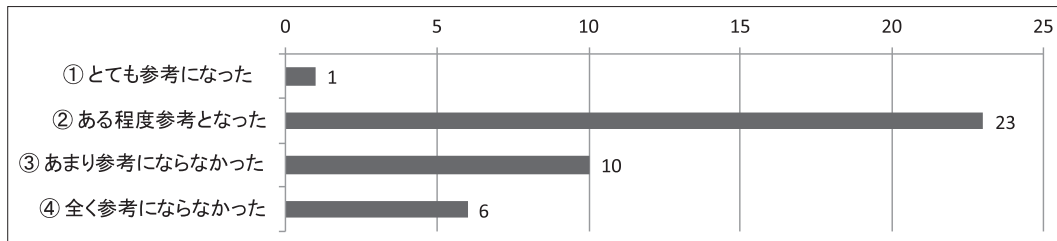
#### ① とても参考になった（主な理由）

- ・自分はB型就労施設で実習を行った。自分の人生では経験したことのないハンディキャップを持った方に合った仕事を提供する場所であることを理解し、自分の視野を広げることができたから。
- ・デイサービスでの実習をさせていただき、利用者さんとお話をしたり、一緒に体験したりと貴重な体験ができたから。
- ・初めての現場や辛い現場でも慣れで楽しくなれたり、効率よく仕事を進めたり、利用者さんとコミュニケーションを取ることができたため。
- ・介護の大変さを学べたから。
- ・教師よりデイサービスの介護士になりたくなった。
- ・普段経験することのない貴重な体験ができたから。
- ・普段体験することのできないことを体験できたから。また、その中で車いすを操作するとき周りをみることの大切さなど学ぶことができた。
- ・こういった機会がなければ、社会福祉施設に関わることは少ないと思うし、実習の中で実態や人との関わりについて学ぶことができたから。
- ・就職先が介護業界への外国人人材の紹介などをする会社だから。
- ・社会的に弱い立場にある人たちが社会にどのように参画し、社会とどのように関わりあっているのかを知ることができ、福祉の分野に興味関心が強まった。
- ・高齢者の方との会話をし、介護士の方々から介護の仕事について知れたから。
- ・コミュニケーション力を発展させることができた。
- ・障害者に対しての接し方や、介護に対して気をつけていること。
- ・障害者の就労施設でイメージとの違いが埋まったように考えるから。

#### ④ 全く参考にならなかった（主な理由）

- ・労働力のひとつとして数えられており、支援どうこうを指導いただくのではなく、ただ共に働いただけだったので。

### 特別支援学校



#### ① とても参考になった (主な理由)

・自分は視聴覚障がいについて学習を行ったが、大学側で視覚障がいそのものについての資料や、補助器具などの資料を用意して頂いたおかげで、効果的な学習を行うことができたから。

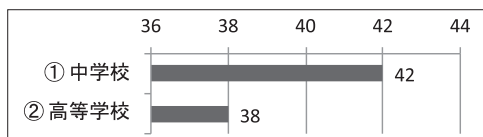
#### ④ 全く参考にならなかった (主な理由)

・履修の関係上レポートだったので、学びになるようなことはあまりなかった。  
 ・特別支援学校に実習に行かず、レポート対応だったため。

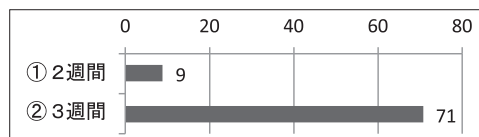
社会福祉施設での実習に参加した学生の93.0%、特別支援学校では60.0%が「とても参考になった」「ある程度参考になった」と回答している。老人福祉施設や様々な障がいを抱えた児童生徒との交流を通して福祉や教育への認識を深めたようである。中学校教諭免許の取得条件である介護体験実習の趣旨が正しく活かされていると考えられる。

## 9 教育実習について

### (1) 学校種について

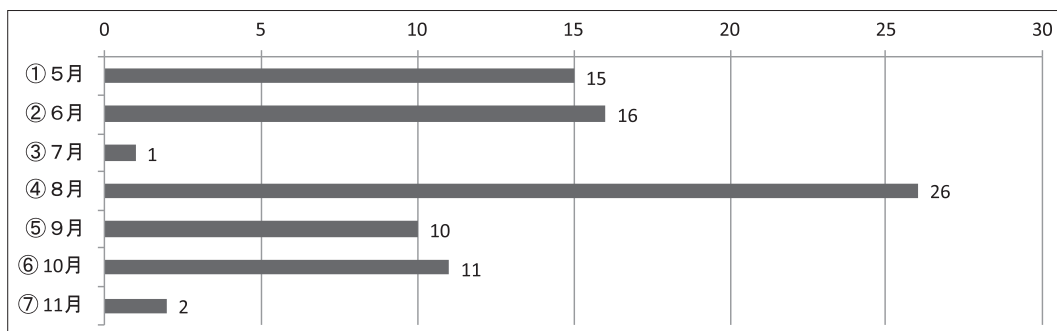


### (2) 期間について



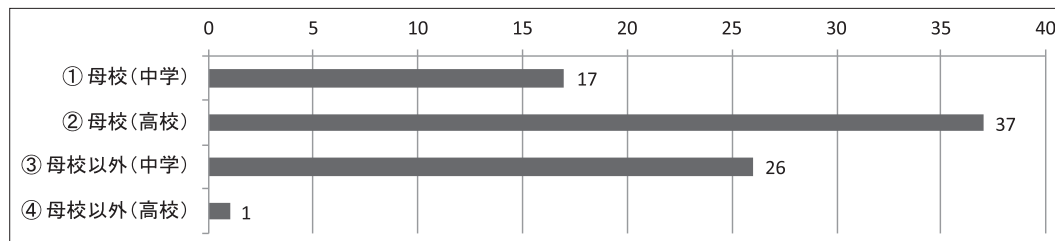
学校種・期間においては、回答者の中では中学校、3週間が多くを占めた。

### (3) 開始時期について



例年は、5月から9月までが実習のピークであるが、コロナ禍以降、後半の10月にも多くの実習が行われるようになった。例年のことではあるが6月の教育実習は教員採用試験の1次検査と日程が重なる学生も多く、余裕のない状況を強いられた。

(4) 実習校について



中学校・高校ともにほとんどの学生が母校実習となっている。

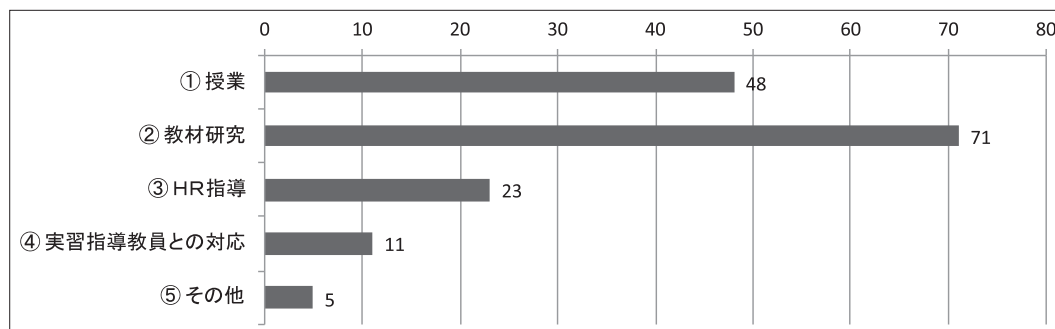
③ 母校以外（中学校）で実習した理由

- ・札幌市内の中学校での実習を希望したため。（19名）
- ・母校の高校に申請したが断られたため、教務センターに頼み、札幌市立の中学校に行かせていただけることになったから。
- ・小樽市は教育委員会が決めるから。
- ・英語の教師が新卒で対応が困難であると言われた。
- ・母校に嫌な思い出があるため。

④ 母校以外（高校）で実習した理由

- ・国語の先生が休養に入ったから。

(5) 実習中に大変だったことについて（該当するものすべて）



⑤ その他

- ・実習日誌（3名）
- ・実習指導教員以外の教員との関わり方
- ・子供との関わり方

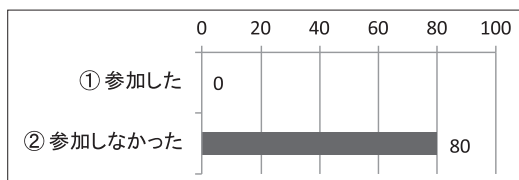
一番多くの学生が、苦労したのは教材研究、次に授業となっている。教育実習のメインは授業。日々、授業の準備（教材研究）に追われる。どこまで調べても、まだまだ足りない。そんな毎日が続く。不安にかられる。でもそんな重圧の中、生徒の笑顔、生徒からかけられる優しい言葉、労いの言葉に癒され、助けられる。たくさんの苦労はあるが、そこには感動がある。特に研究授業は、実習の集大成でもあり、たくさんの先輩教員が授業参観に来てくれることが多い。緊張感もあり負担感が増したものと思う。しかし、実習の記録などから見えるコメントは、研究授業の充実感である。大変なことを成し遂げた後の充実感から、教員への決意を固める学生も多くいる。

また、実習指導教員との対応に苦勞する学生も多くはないが、苦手なタイプの指導教諭にあたる場合だってある。どんな状況であっても、実習をさせていただいていることを忘れずに、謙虚で誠実に教を乞う態度を示すことが重要である。精神的なタフさも必要となる。多くはないが、実習日誌への記載が大変と答えている学生もいる。教育大学の日誌がかなり簡略化されていると聞いている。日誌は本学独自のものではなく私学共通のものなので、改善を希望しているがすぐに実現するかは難しい。

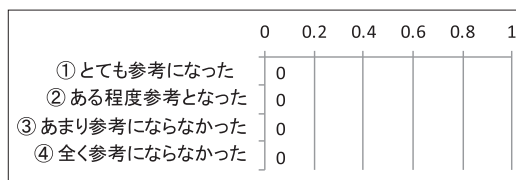
## 10 学外の活動について

### (1) 教職課程インターンシップ（北海学園札幌高校）について

参加



参加した場合の感想について

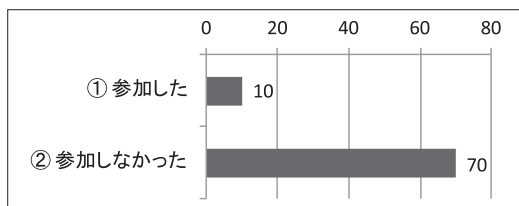


※今年度は、熊出没の影響で全校行事の「支笏湖遠足」が中止になってしまったことによりインターンシップは実施できなかった。

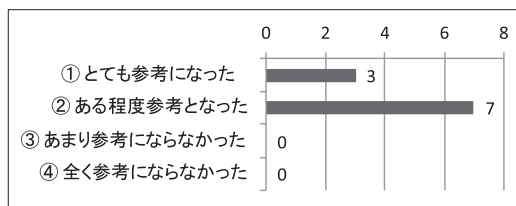
例年、数十名の学生が参加している。教師を目指す学生にとって生徒を目の前にした初めての授業体験であり、参加した学生の多くが参考になったという感想が多い。来年度の実施に期待したい。

### (2) 札幌市学生ボランティア事業について

参加



参加した場合の感想について



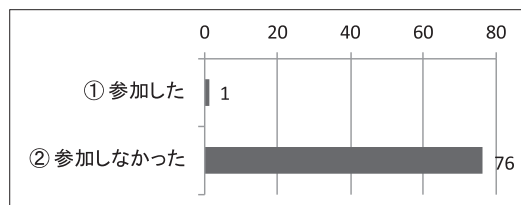
#### ① とても参考になった（主な理由）

- ・教育実施より前に実際の教育現場を知ることができた。
- ・実際に生徒と関わることができたため。
- ・生徒との関わり方を学べたから。

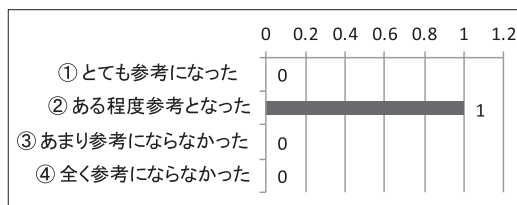
札幌市の学生ボランティア事業は例年多くの学生が参加している。教職を目指す学生にとっては大変有意義な時間であり、教育現場で児童・生徒と直接触れ合うことによって、多くのことを学ぶことができる機会となっている。

### (3) 道教委学生ボランティア派遣事業

#### 参加



#### 参加した場合の感想について

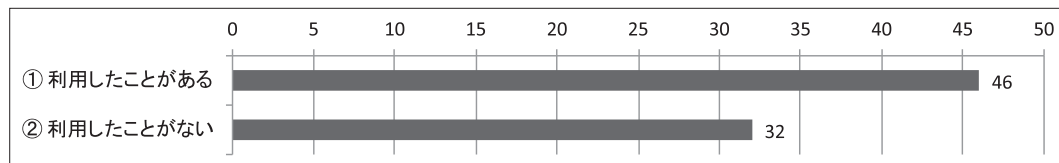


#### ① とても参考になった（主な理由）

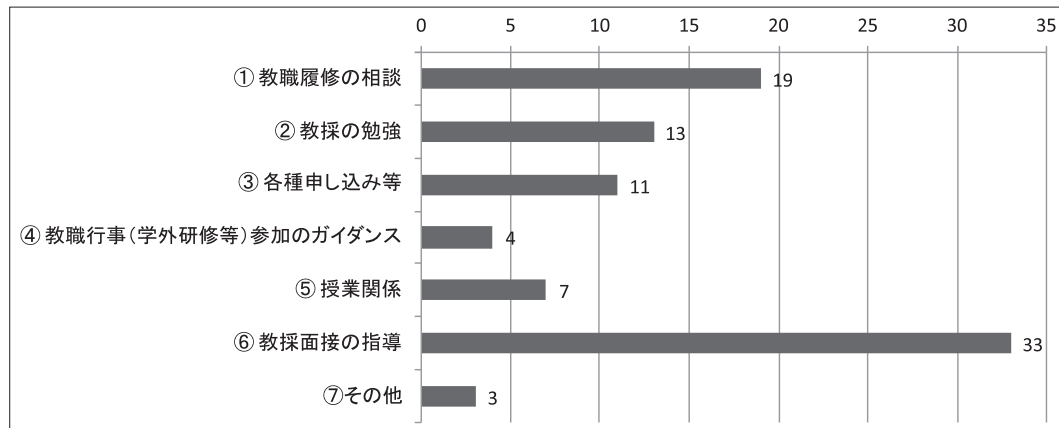
・なし

参加者が極めて少なかった。札幌市ボランティア事業と同様に次年度に期待したい。

### 11 教職指導室の利用について



#### 利用した理由について（該当するものすべて）



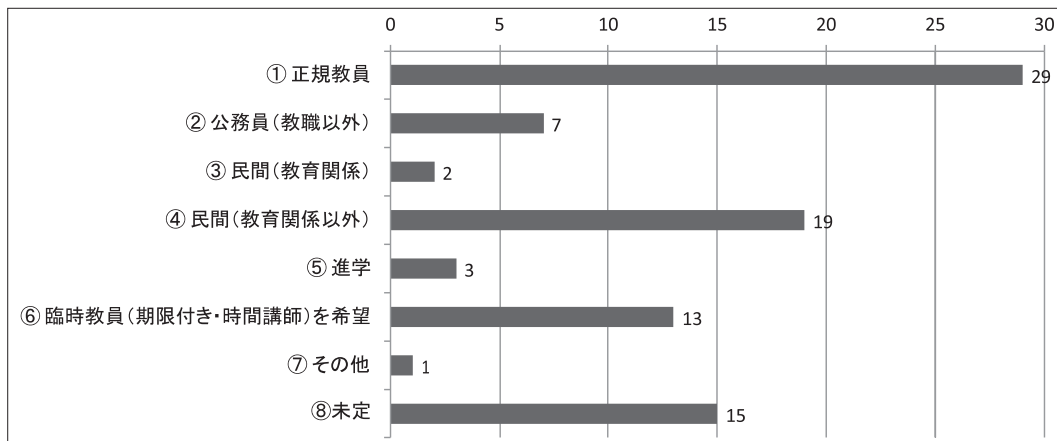
#### ⑦ その他

- ・進路相談。
- ・電子黒板の利用。
- ・教採の問題を貰いに行った。

教職指導室を利用した学生は、「教採面接の指導」「教職履修の相談」「教採の勉強」をはじめとして複数の理由をあげた者が多かった。しかしながら、教職課程履修者の3分の1の学生が一度も利用したことがないということは大きな課題である。ガイダンス等で教職指導室の活用を勧め

ているが、更に教職指導室の業務内容を周知するとともに、大いに活用するよう呼びかけ啓発する必要がある。

## 12 進路（内定・登録等）について



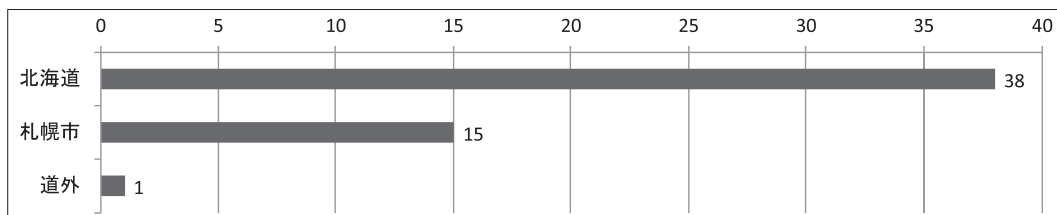
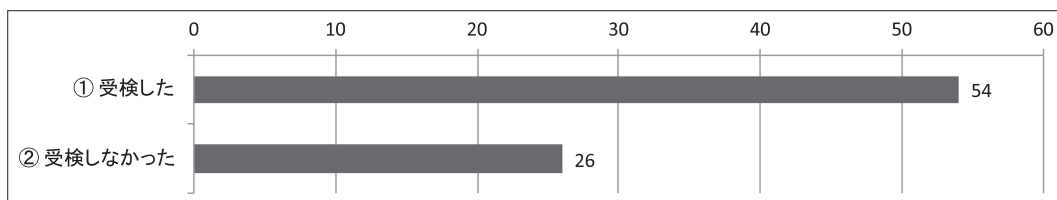
### ⑦その他

・北海道教育大学 大学院 札幌校

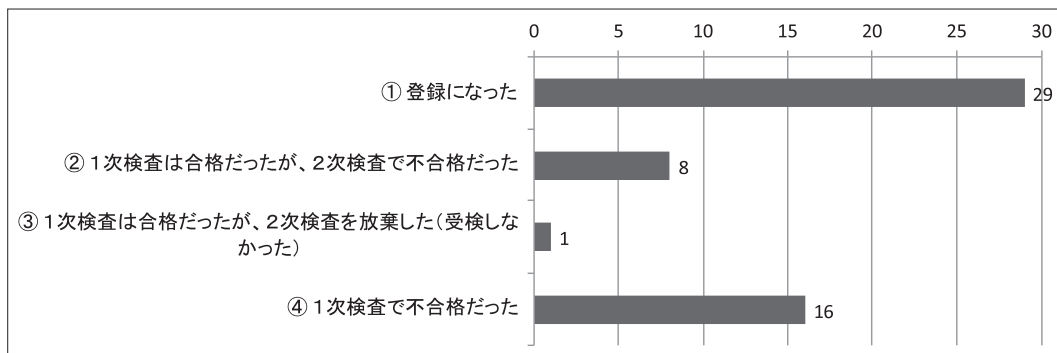
「正規教員」29名は、近年では一番多い登録者数である（最終的には公立学校の登録者数は30名）。北海道28人、札幌市1人。新潟県1名。札幌市は狭き門。北海道の高校も教科（科目）によって高倍率な教科（科目）がある。正規採用にならなかった学生11名が臨時教員（期限付教員）を希望し、教員への道を諦めていない。また、「未定」と回答した学生の中にも臨時教員や時間講師を希望している者もいる。

## 13 教員採用検査（教採）について

### (1) 受検について



(2) 北海道・札幌市を受検した場合の結果について

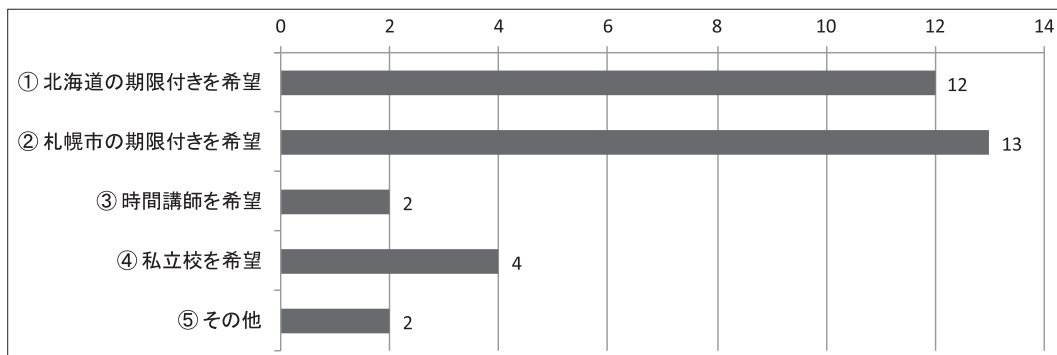


(3) 道外を受検し合格した場合について

都府県名・学校種（中学校・高校）・教科（科目）

・新潟県 高校 国語

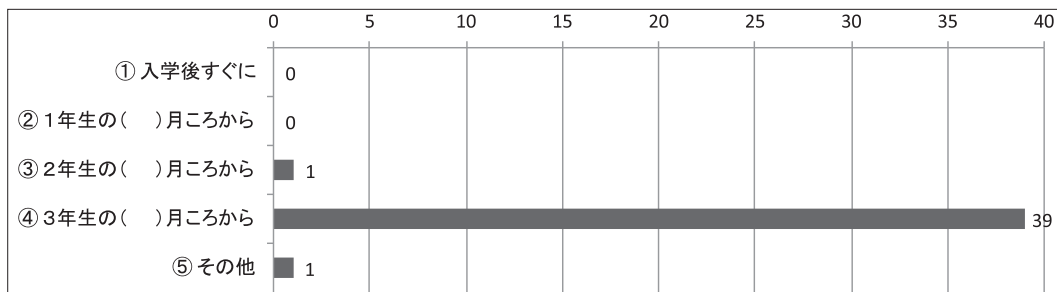
(4) 臨時教員を希望する場合について



⑤その他

- ・奈良県の期限付き
- ・新潟県の期限付き

(5) 教採を受検した場合、具体的な準備の開始時期について



③2年生の( )月ころから

1月 (1名)

④3年生の( )月ころから

8月(1名), 9月(7名), 10月(9名), 11月(9名), 12月(6名), 1月(3名), 2月(4名)

⑤その他

・4年5月頃

受検については、学生の自己申告による現状では1次合格者でも連絡をしない学生もおり、受検者の正確な把握ができない状況である。教員採用検査へのサポートを充実させるためにも学生に受検結果を連絡するようお願いしていきたい。

北海道(札幌市)を受検した場合の結果について、「1次検査は合格だったが、2次検査で不合格だった」ものが8名いる。個別面接が2回で人物重視の傾向が強くなっていることから、2次検査の指導を充実させる必要がある。

臨時教員(期限付教員)を希望する場合については、公立学校で12ヵ月~13ヵ月以上勤務実績のある者に対し、特別選考の受検資格が与えられることから、公立学校を希望する学生が多くなっている。その結果、私学の希望者が減少傾向である。

準備の開始時期については、教採受検者の92.7%が3年次生になってから準備を始め、そのうち、79.5%が9月以降に準備を始めるなど取組の遅さが際立っている。

14 教職課程の授業で特に有益だった科目について(何科目でも)

各教科教育法(52名), 教育相談(8名), 教育方法論(7名), 教育実習実践指導(5名), 教育心理学(5名), 教職総合演習(5名), 教職実践演習(4名), 生徒指導・進路指導論(3名), 教育とICT活用(2名), 特別支援の授業(2名), 学内研修(1名), 教育実習(1名), 学校教育心理学(1名), 教職入門(1名)

教科指導理論や教育実習に関係する模擬授業を行う「各教科教育法」が圧倒的に多く、続いて「教育相談」、「教育方法論」、「教育実習実践指導」、「教育心理」、「教職総合演習」が比較的多くなっている。

15 教職課程で充実してほしかった指導について(何項目でも)

○授業・教科指導関係(13)

- ・模擬授業の数をもっと多くして欲しい。(6)
- ・教科指導をより充実させてもらいたかった。
- ・教材研究の仕方について。
- ・机間指導, 板書, 模擬授業, ほか。
- ・授業研究について少しみんなで考える時間があれば良かった。
- ・新しい教育法などを模索する講義があったらよかったなと思いました。
- ・文法の具体的な指導法。
- ・指導案の書き方について, 模擬授業内でしか指導案を書かなかったため, もう少し具体

のに書き方の指導があるといいと思った。

○教職の科目関係(6)

- ・教職実践演習。
- ・教育課程論。
- ・心理学。
- ・教育課程論。
- ・教職総合演習。
- ・教職入門。

○教員採用試験関係(5)

- ・教採の申込みのリマインドが欲しかった。
- ・教員採用試験対策。(4)

○生徒指導関係(5)

- ・生徒・保護者対応。

○教育実習関係(3)

- ・教育実習に関する説明。
- ・実習直前の指導。
- ・授業実践と、3年次でも教育実習をやりたかった。

○特別支援教育関係(3)

○工学部の学生からの要望(3)

- ・工学部での開講。
- ・工学部生2年次以降でも豊平の授業を取りやすくしてほしい。
- ・工学部で教職教養を復習できるように授業を設けるなどしていただきたい。

○その他(5)

- ・実際の現場についてより知りたかった。
- ・4年生の実習前にゼミがないことが、情報が少なくなり、不安だった。
- ・4年生の前期に1個授業がほしかったです。
- ・学級経営や生徒指導。
- ・分掌業務について。

圧倒的に多いのは授業・教科指導に関する項目で、特に模擬授業を多く経験したいという要望が最も多い。そのほか、学習指導案の作成方法、教員採用対策、特別支援教育に関する等が多い。学生たちのニーズに真摯に向き合い、充実した内容にする必要がある。

## 16 教職課程を履修しての感想について

### ○教職が第一志望（教採登録者・臨時教員希望者）

- ・採用試験合格できて良かったです。
- ・一、二年生の時は、授業の内容がどのように現場で活かされるのかがうまく想像することができず、単位習得だけが目的となってしまう、効率よく学習することができなかった。
- ・手厚い指導のおかげで教採にも合格し充実した学生生活を送ることができました。仲間がたくさんできて楽しかったです。
- ・教員になるためのサポートをたくさん得られて良かった。
- ・模擬授業の機会が多くあったので、授業の簡単なイメージを掴むことが出来て教育実習でも役に立ったと思う。
- ・自分の大学生としての時間を充実したものにできた。
- ・自分の学科の勉強との両立がとても大変だったが、様々な学びを得ることができた。
- ・先生方の手厚いサポートがあって、とても心強かった。北海学園大学でよかったなと思いました。
- ・教員になるための資質や能力を身につけることができた。
- ・現職の先生たちのお話を聞けて、学校の内情を知れてよかった。先生方のマインドを参考に頑張りたいと思った。
- ・自分の夢に近づくことができた。学びたいことを学ぶことができた。
- ・工学部生は1年生で全て単位を取得してしまうため学んだ内容をほぼ覚えていない。
- ・当時は実感できなかったが実習や教採対策を通して、教職で学んだ知識がたくさん活かされていることを実感し、ほんとに教職を取って良かったと思った。
- ・教員になる上での知識が付いたり実習で実体験が出来るととても今後の為になったのでよかった。
- ・教職を目指す人たちと切磋琢磨していくことで、自分の能力や世界が広まったと感じる。ただ、1年生の時に教職教養をとってしまい、せっかく学んだことを忘れてしまっていることが多いので、1年生の時の努力があまり報われないなと感じた。
- ・私は工学部であるため、1年目で豊平キャンパスで履修できる教職科目をすべて履修する必要があったため、とても大変だった。4年間の課程で将来教員として活かせるものが多々あるため、ぜひ活かしていきたい。
- ・教育課程論の単位取得をもう少し簡単にしたいと感じました。
- ・教員になりたくて教職課程を履修したため、色々な科目を通して教職について学ぶことができたので良かったです。
- ・大変だけど、学びも多く楽しかった。
- ・北海学園大学の教職課程に携わっている先生方はとても熱心で、本当にここで学べて良かったと思った。
- ・自分は工学部なので、1年生の間に教職教養の部分を全て履修してしまい、3年生で試験を受ける際にあまり覚えていなかったもので、2、3年生の時に工学部生が勉強できる

環境があればもっといいなと思った。

- ・幼い頃から教員を目指していた私にとっては、北海学園大学の教職課程を履修して本当に良かったなと思います。
- ・合格できてよかったです。身になる授業や実習、いい仲間と先生方に出会えてかけがえない時間となりました。もし教員にならなかったとしても、学校のしくみを知ることができるので、面白かったと感じると思います。
- ・様々な事案について、色々な人とたくさん話し合いをすることが出来たと感じます。それは自分にとってとても有益でした。
- ・とても楽しく学ぶことができ、友人も増え、履修してよかったと心から思います！
- ・先生方に大変お世話になりました。ご指導いただきありがとうございました。
- ・教員としての資質・能力について学ぶことができました。本当にありがとうございました。

#### ○民間（教育関係以外）内定者

- ・入学当初は教員はただ教えるだけだと思っていたため、教職課程を履修して教員がどれだけ大変か知ることができました。自分は教職の道に進む予定は今のところないですが、教職課程で学んだことを今後社会に出ても活かしていきたいと思います。
- ・受けてよかった。
- ・国語の免許で必修になっている漢文学と上野先生のゼミの時間が被っていて、時間割の調整が大変でした。将来の選択肢を狭めないために履修した教職課程で、結果的に教職に就かない選択をしましたが、それでも決して無駄だと感じる時間や講義はなく、確実に自身の成長につながったと感じています。
- ・相談に行ったら親身になっていただいた先生が多くて、安心感がありました。4年間ありがとうございました。
- ・様々な方面への見聞を広めることができてとてもよかったです。
- ・ありがとうございました。
- ・勉強になった。
- ・初めから教員になる気はなかったが、教員という仕事に少し興味がわいた。
- ・教育の楽しさを感じ、大学生活において非常に良い経験になった。
- ・自分は今の状態で教員になれないと潔く決心がついた。
- ・人との関わり方、特段、生徒との関わり方を学ぶことができたと思う。それはこれからの生活に必ず生きることだと思うし、学べて良かった。また、教職を志す仲間との出会いもいいものだと思う。もし、この先教員をやる場合、生きることだと思う。
- ・大学生活が充実しました。ありがとうございました。
- ・特に教育実習の経験が教員になるなら関係なくとても良い経験になったなと思った。教職課程を取ったおかげで仲間もできたしとても良かったなと思った。
- ・人生のとても良い経験になった。
- ・普段学ぶことができない内容ばかりだったためとても勉強になった。
- ・親の勧めで履修した教職だったのでモチベーションが続かないことも多々ありましたが、先生方と仲間たちの存在に支えられて4年まで継続することができました。卒業後

は民間に就職しますが、人生の選択肢として教員もとても魅力のある職業だということを学べた4年間でした。

○民間（教育関係）内定者

- ・来年免許取れるように頑張ります。
- ・方法論が難しかった。

○公務員登録

- ・実践的な科目が多く設置されていて、教育実習で役に立つことが多くありました。国語科の上野先生、地歴科の石黒先生には特にお世話になりました。卒業後、すぐに教員にはなりません社会経験を積み、将来的には教員あるいは教育や青年に関わる仕事をしたいと思っています。教職課程に携わってくださる全ての先生方に感謝しています。ありがとうございました。
- ・教職課程を通して、生徒との指導や関わり方だけでなく教育現場の実態や教員の働き方などを知ることができてよかったです。そういった知識は、教員にならなくても役立つ機会がくるのではと思いました。実際に、実習に行ったことで教師として働くことイメージが鮮明になりました。
- ・教育に関して多くのことを学ぶことが出来ました。

○進学

- ・大変だったが履修してよかった。
- ・とても良い経験になり、将来教員になってもならなくてもためになる授業ばかりでした。
- ・教職課程を履修しなければ気づけないこと（教員側から見た学校の内側や教育の諸問題等）に気づくことができたので、履修して良かった。とても充実した課程だった。

○その他

- ・もっと授業実践をしたかった。三年次に教育実習に行きたかった。
- ・工学部生は半強制的に1年次に全て取りきれないといけないこと、7限に開校や山鼻での開講など、1年次に全て単位を取れるのはいいことではあるが、教採の頃にはもう忘れてる。かと言って4年まで持ち越すと、卒業研究や卒業論文の作成などとかぶり、それはそれで難しい。前倒しなどで勉強しなくてはいけない工学部の3・4年次にとっではかなり厳しい。
- ・自分は教職の道に進まないが、学べることが多くてよかった。
- ・教員についてだけでなく、様々なことを学べたため良かった。
- ・先生方のサポートが手厚く、学園で教職課程を履修して良かったと思います。
- ・楽しかったです。
- ・一般科目と違い、出席することが義務付けられていることが多いため、単位の取得が難しかった。
- ・教職課程を通して、教員以前に、一人の人間としてどうありたいのか、自分と向き合うことができました。どのような姿勢で社会と関わりたいのか、人と関わる上で何を大切

にしたいのか等、これから生きていく上で自身の基盤となるものを築き上げることができました。このように、自己形成を進められた点が、教職課程を受講した成果だと感じています。

- ・授業準備や教材作成の過程で計画性や工夫の大切さを学び、教師としての責任の重さも感じました。
- ・学部の講義だけでは得られない実践的な学びや経験を積むことができた点が良かった。
- ・一般科目や専門科目よりも為になる授業が多かった。今までの私たちに関わるものであり、これからの子供たちにも関わるものなので履修できてよかった。
- ・工学部のため一年生の時にほとんどの科目の単位をとらなければならない点が大変だった。四年、三年の試験で復習する際に思い出すのも苦労したため、気軽に豊平校舎の授業を山鼻キャンパスの生徒でも受けられるようにしてほしいと感じています。
- ・教師として学校で求められる資質や実際の職務について学ぶことができ、実習で視野を広げると同時に学んだ知識を実践することができたことで、宝物のような経験を得ることができました。ありがとうございます。
- ・時間割の都合で大変であったが充実していた。

記載のあったものすべてを進路別に整理して原文のまま掲載した。学生たちが選択した進路は様々であるが、将来の教師としての成長に留まらず、人としての成長を実感しているものが多かった。「北海学園大学の教職課程を履修して本当に良かった。」との声は、教職課程教員として非常に嬉しい言葉である。君たちに出会えて、私達も幸せです。感謝。

### Ⅲ ま と め

このアンケート調査をとおして、学生たちがどんな気持ちで教職を目指し、最後まで履修を継続してきたかを知ることができた。1年次に教職課程を履修し始めて以来、1部生が2部の授業を受講、また逆の場合もあり、時間をやり繰りしながら授業に出席し、学内外の様々な活動に積極的に参加して自らの成長を図ってきたことを窺い知ることができた。さらに、1年次当初の履修と比べおよそ半数が他の道を選び、教職を目指して共に学ぶ仲間が少なくなったが、教職課程を履修したからこそ得られる貴重な経験を積み、互いに切磋琢磨しながら履修を終えようとしている4年次生が多いということを知ることができた。また、教職課程の充実に関する要望や今後の参考となる意見も多数寄せられた。これらを指導改善の礎として、今後の教職課程が、教員を目指す学生たちの支えとなるべく尽力していきたい。最後に、4年間努力を惜しまず、学びを継続してきた学生たちに、心より敬意を表するとともに、アンケート調査に協力いただいたことに心より感謝申し上げる。

#### 引用・参考文献

高等学校学習指導要領（平成30年告示）（文部科学省）

中学校学習指導要領（平成29年告示）（文部科学省）

北海道私立大学・短期大学教職課程研究連絡協議会（2019）『教育実習の手引き（第7版）』学術図書出版社

教職課程履修者の4年間の取組の実態と意識に関する調査(2022)『北海学園大学教職課程年報第15号』

教職課程履修者の4年間の取組の実態と意識に関する調査(2023)『北海学園大学教職課程年報第16号』

教職課程履修者の4年間の取組の実態と意識に関する調査(2024)『北海学園大学教職課程年報第17号』

## 〈研究報告〉

# 高等学校数学科における仮説検定の授業研究

— 高等学校で初めて指導する「仮説検定」をどのように教材研究し、  
授業を構成するか —

城 戸 和 彦

(北海道立教育研究所主査)

## 1 はじめに

近年の高等学校では、多くの数学科教員が、「数学Ⅰ」の大単元「データの分析」における中単元「仮説検定の考え方」について、十分に理解できず戸惑っている、という話を耳にすることが多い。「仮説検定」は、令和4年度から学年進行で適用された高等学校学習指導要領において新たに導入された内容であり、指導に当たる教員自身も高校時代には学習していない場合がほとんどである。そのため、大学で統計学を本格的に学んだ経験がない限り、ゼロから教材研究を行った上で授業に臨まなければならない状況にある。

さらに、「仮説検定」は、「数学B」では大単元「統計的な推測」において本格的に扱われるのに対し、「数学Ⅰ」では直感的に捉えさせることを主眼とした内容にとどまっている。このため、「仮説検定」を初めて指導する教員にとっては、「数学Ⅰ」の範囲だけを対象とした教材研究では理解が十分に深まらない可能性がある。実際、若手教員から「検定の手順や解き方は教科書どおりに進めれば対応できるが、その意味がよくわからない」という声を直接聞いたことがある。

なお、「新たに導入された」と述べたが、正確には、本単元は約24年ぶりに高等学校学習指導要領に復活した内容である。当時の学習指導要領の下で学んだ教員も存在するはずだが、その多くは現在50代以上に限られる。加えて、後述するように、当時必ずしも十分な学習環境が整っていたとは言い難く、現在の数学科教員の中で「仮説検定」に精通している者は、かなり少数であると考えられる。

そこで本稿では、この単元をどのように教材研究し、どのように授業を構成すべきかについて、筆者なりに整理した内容を示す。その上で、若手の数学科教員や、これから教員を目指す学生に対する指導助言の一助としたい。

## 2 高等学校学習指導要領における確率・統計領域の取扱いの変遷

高等学校学習指導要領において、確率・統計領域がどのように扱われてきたかについて、次の表のとおり整理した。こうして俯瞰すると、各学習指導要領の特徴と、それぞれの時代背景が浮かび上がってくる。

昭和57年度から学年進行で実施された学習指導要領は、「現代化カリキュラム」と呼ばれた前回改訂への反省を踏まえ、指導内容を大幅に精選した、いわゆる「第1次ゆとり教育」である。数学科では、「数学Ⅰ」を履修した後、「数学Ⅱ」又は「基礎解析」「代数・幾何」「微分・積分」

「確率・統計」といった、領域ごとに分かれた科目を選択する履修形態が採られていた。「数学Ⅰ」の内容を精選した結果、順列・組合せや確率は「数学Ⅱ」あるいは「確率・統計」で扱われることとなり、多くの学校で3年次履修となった。しかも、文系大学志望の生徒はこれらの科目を選択しない場合が多く、高校で確率を学ばない生徒が増加したことから、一部で疑問視する声が上がった。こうした反省を踏まえ、平成6年度からの学習指導要領では、確率が「数学Ⅰ」に導入された。その一方で、式の展開や因数分解など、高校数学の基礎となる「数と式」の内容は「数学A」に移された。本来、「数学A」は「数学Ⅰ」を履修後、又は同時に履修する科目であるが、数と式を先に学習するべきと判断し、「数学A」を先に履修する学校が多くなった。これは本来の履修条件とは異なる状況であったため、平成15年度以降の教育課程では、多くの生徒が履修する「数学A」に確率を移し、「数と式」は再び「数学Ⅰ」に戻され、現在に至っている。

では、統計はどのように扱われてきたのだろうか。昭和57年度からの学習指導要領では、それまで「数学Ⅲ」に含まれていた確率分布や統計的な推測が、「確率・統計」に移された。この時点では、統計的な推測の中に「仮説検定」も含まれていた。その後、「社会科」が「地理歴史科」と「公民科」に分かれ、学校週5日制への移行期に当たる平成6年度からの学習指導要領では、学習内容がさらに削減され、「仮説検定」はここで姿を消している。

「生きる力」の育成を掲げ、「総合的な学習の時間」を新設した平成15年度からの学習指導要領では、コンピュータを用いて扱う内容を「数学B」に、それ以外の統計的内容を「数学C」に整理した。「脱ゆとり教育」とも呼ばれ、「理数教育の充実」を背景に数学・理科の内容を1年前倒しで実施した平成24年度からの学習指導要領では、「事象を数学的に考察する能力を培う」ことを目標に掲げた必履修科目「数学Ⅰ」に「データの分析」が導入され、その他の統計内容は「数学B」に整理された。

さらに、「カリキュラム・マネジメント」の実現が求められた令和4年度からの学習指導要領では、前回導入された箱ひげ図などの基礎的内容が中学校へ移行した一方で、「仮説検定」が「数学Ⅰ」と「数学B」の双方に位置付けられた。「仮説検定」は、平成7年度で終了して以来、実に約25年ぶりの復活となったのである。

表 高等学校学習指導要領数学における確率・統計領域の変遷

実施年度	科目名	大単元名	中単元（小単元）
S57年度 ～H7年度	数学Ⅱ 確率・統計	確率と統計	順列・組合せ、確率、統計*
		資料の整理 場合の数 確率 確率分布 統計的な推測	変量の分布、代表値と散布度 順列・組合せ、二項定理 確率とその基本的な法則、独立な試行と確率、条件付き確率 確率変数とその確率分布、二項分布、正規分布 母集団と標本、統計的な推測の考え <sup>○</sup>
H6年度 ～H16年度	数学Ⅰ	個数の処理 確率	数え上げの原則、自然数の列、場合の数（順列、組合せ） 確率とその基本的な法則、独立な試行と確率、期待値
	数学B	確率分布	確率の計算、確率分布（確率変数と確率分布、二項分布）
	数学C	統計処理	統計資料の整理（代表値と散布度、相関）、 統計的な推測（母集団と標本、正規分布、統計的な推測の考え <sup>○</sup> ）
H15年度 ～H25年度	数学A	場合の数と確率	順列・組合せ、確率とその基本的な法則、独立な試行と確率
	数学B	統計と コンピュータ	資料の整理（度数分布表、相関図）、 資料の分析（代表値、分散、標準偏差、相関係数）
	数学C	確率分布 統計処理	確率の計算、確率分布（確率変数と確率分布、二項分布） 正規分布（連続型確率変数、正規分布）、 統計的な推測（母集団と標本、統計的な推測の考え <sup>○</sup> ）
H24年度 ～R5年度	数学Ⅰ	データの分析	データの相関
	数学A	場合の数と確率	場合の数（数え上げの原則、順列・組合せ）、 確率（確率とその基本的な法則、独立な試行と確率、条件付き確率）
	数学B	確率分布と 統計的な推測	確率分布（確率変数と確率分布、二項分布）、正規分布、 統計的な推測（母集団と標本、統計的な推測の考え <sup>○</sup> ）
R4年度 ～	数学Ⅰ	データの分析	データの散らばり（分散、標準偏差）、 データの相関（散布図、相関係数）、仮説検定の考え方 <sup>○</sup>
	数学A	場合の数と確率	場合の数（数え上げの原則、順列・組合せ）、 確率（確率とその基本的な法則、独立な試行と確率、条件付き確率）
	数学B	統計的な推測	確率分布（確率変数と確率分布、二項分布）、 正規分布（連続型確率変数、正規分布）、 統計的な推測（母集団と標本、統計的な推測の考え <sup>○</sup> ）

○ 「仮説検定」を含む  
\* 「仮説検定」を含まない（「推定」まで）

しかし、制度上の位置付けとは異なり、現実の授業実践は必ずしも単純ではなかった。昭和 57 年度からの学習指導要領においても、統計は教科書に掲載されていたものの、実際の授業では扱われないケースが少なくなかった。「数学Ⅱ」は単元選択制であったため、統計を扱わないこと自体は不自然ではなかったが、「確率・統計」を選択している学校においても、確率までで終わる傾向が見られた。その背景には、当時の共通一次試験、さらにその後の大学入試センター試験において、「数学Ⅱ」では場合の数と確率しか出題されていなかったことがある。

国公立大学の二次試験でも、統計まで出題する大学はごく一部の難関大学に限られ、「仮説検定」を出題する大学は医科大学など、さらに限定されていた。そのため、こうした大学を受験する生徒が在籍する学校では、補習などで統計を扱うことが多かったが、通常の授業では「仮説検定」が取り上げられることはまれであった。

平成 6 年度から平成 25 年度までの期間、統計は主として選択科目である「数学 B」や「数学 C」で扱われていたが、いずれも単元選択制であったため、統計を選択しない学校が多かったと考えられる。

転機となったのは、平成 24 年度の改訂で、必修科目「数学Ⅰ」に初めて統計が導入されたことである。当初は、統計をどのように指導すべきか戸惑う教員も多かった。しかし、四分位偏差や箱ひげ図、散布図、相関係数といった内容は、初めて教材研究を行う教員にとっても決して難解なものではなく、むしろ理解が深まることで、生徒にとっても興味を引きやすい授業へとつなげやすい内容であった。そのため、戸惑いの声は比較的早く収束した。

そして今回の改訂により、令和 4 年度から「数学Ⅰ」と「数学 B」に「仮説検定」が復活した。「数学Ⅰ」は必修科目であり、「数学 B」は選択科目で、さらに単元選択制ではあるものの、共通テストを受験する生徒が在籍する学校では、統計分野が選択されるケースがほとんどである。

### 3 なぜ教員は「数学Ⅰ」の「仮説検定」で戸惑うのか

今回の改訂で、「仮説検定」が「数学 B」のみに復活するのであれば、二項分布、正規分布、推定、検定へと系統的に学習が進むため、指導に当たってもそれほど大きな戸惑いは生じなかったかもしれない。

しかし実際には、「数学Ⅰ」にも「仮説検定」が、基本的な考え方に限定した内容、すなわち正規分布や二項分布、反復試行などをそぎ落とし、検定の枠組みだけを簡略化したものに限定し、扱われている。教科書を見ても、決して難解な内容は掲載されておらず、形式的には誰でも解くことができるように構成されている。

このような扱い方では、検定の本質にまで踏み込んだ理解に至らず、解き方を何となくぞるだけの学習にとどまってしまうのではと、筆者は考えた。以下に教科書の記載例を示す。

#### 仮説検定の考え方

ボールペンを製造している会社が、既に販売しているボールペン A を改良して新製品 B を開発した。B が A よりも書きやすいと消費者に評価されるかを調査したいと考えたが、すべての消費者を調査するのは不可能である。そこで、無作為に選んだ 30 人に 2 つのボールペン A、B を使ってもらい、どちらが書きやすいと感じるかを回答してもらった。その結果を集計したところ、70% に当たる 21 人が B と回答した。この回答のデータから、

[1] Bの方が書きやすいと評価されると判断できるだろうか。

この時点で、初めて「仮説検定」に触れる教員や生徒は、「Bの方が書きやすいと評価されるって、当たり前じゃないか、何を言っているのだ」と、疑問に思うはずである。ところが、教科書では次のように続く。

この問題を解決するために、[1]の主張に反する次の仮定を立てよう。

[2] A, Bのどちらの回答も全くの偶然で起こる  
すなわち、A, Bのどちらの回答の起こる確率も $1/2=0.5$ である、という仮定を立てる。その仮定のもとで、30人中21人以上がBと回答する確率がどれくらいかを考察しよう。

「70%がBと回答しているのに、確率を0.5に仮定するか」、「30人中21人以上がBと回答する確率がどれくらいかを考察しようって、70%以上ではないのか」と、次々と疑問に感じるはずである。そして、究極の戸惑いが次に続く。

[2]の仮定は、公正な1枚のコインを投げる実験に当てはめることができる。ここでは、コインの表が出る場合を、Bと回答する場合とする。

そして、コイン投げを30回行うことを1セットとし、1セットで表の出た回数を記録していく。

この実験を200セット繰り返したところ、次の表のような結果となった。

表の回数	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	計
度数	2	3	3	12	16	22	22	31	31	22	14	12	6	2	1	1	200

この後は、21回以上表が出た相対度数は、 $(2+1+1)/200=0.02$ であり、非常に小さい確率であることから、[2]の仮定が正しくない、つまり[1]の主張が正しいと判断できると続いている。ここでは、多くの者は、なぜコイン投げが登場するのか、と戸惑うであろう。

教科書は、記載できるページ数に制限があるため、あらゆる内容を丁寧に解説できるわけではない。今回取り上げた例においても、決して難解なことが書かれているわけではなく、具体的な手順は一つ一つ平易に説明されている。

しかし、肝心の「検定とは何か」「なぜそのように考えるのか」といった点については、教員自身が統計学を専攻していた場合を除けば、教材研究の段階で統計に関する専門的な文献を参照するなどしない限り、真の理解に至ることは容易ではないだろう。

#### 4 そもそも「仮説検定」とは何か

まず、導入が重要である。「そもそも検定とは何か」という問いが、教員自身の中で整理されず、生徒にも共有されないままでは、意味の分からない確率や数値が並ぶだけの単元になってしまう。その結果、生徒にとっては「やり方を丸暗記すればよい」という学習に陥りかねない。

そこで、次の例を用いて考えてみたい。

【課題】

A, B の2人がテニスの試合をしたところ, 5回試合をして5回とも A が勝ったとしよう。当然 A さんは「僕の方が強い」と思うだろう。ところが, B さんが「実力に差はないのだからたまたま5連敗しただけ」と主張して聞かなかつたら, どう判断を下したらよいだろう。

この例を生徒に提示し, 班ごとに協議させれば, 次のような意見が出てくるだろう。

「実力に差がない2人が対戦したとして, 一方が3連勝することはあっても, 5連勝はまずないのではないか」

これが, 検定のそもそもの本質である。

これを数学で, つまり「確率の考え方で説明したらどうなるの」というのが, 「仮説検定の考え方の基本」である。

実際に, 「確率の考え方で説明」してみよう。

(説明)

「2人に実力の差がないとする。」

つまり, 「それぞれの試合で A が勝つ確率を  $1/2$  とする。」

「Aの方が実力がある」としてしまうと, 確率の値を決められないから, 「2人に実力の差がない」としたのである。

各試合の勝敗は独立であるとして,

A が3連勝する確率は,  $(1/2)^3 = 1/8 = 0.125$

A が5連勝する確率は,  $(1/2)^5 = 1/32 = 0.03125$

本当は実力に差がないにもかかわらず誤った判断を下してしまう確率が, 0.03125 だけであることを承知の上でなら, 「A と B に実力の差がないとはいえない」という判断を下せることになる。

要するに, 勝敗が偶然で決まると仮定した場合, 3連勝であれば確率は0.125であり, 十分に起こりうると考えられる。一方, 5連勝となると確率は0.03125とかなり小さくなり, 「いくら何でも起こりにくい」と感じられる。このことから, 「2人に実力の差がない」という仮定は適切ではなく, 「A と B に実力の差がないとはいえない」という判断を下すことができる, というわけである。

ただし, この確率は0ではなく, あくまで0.03125である。つまり, 「A と B に実力の差がないとはいえない」という判断が誤っている可能性, すなわち「実際には実力に差がないにもかかわらず, そのように判断してしまう確率」が0.03125存在する, ということになる。これが, 「本当は実力に差がないにもかかわらず誤った判断を下してしまう……」という表現の意味である。

では, 「確率が低い」と判断する基準をどこに置くかという問題が生じる。一般には, その基準を5%あるいは1%とすることが多い。本例では5%を基準としたため, 仮定は誤りであると判断できたが, もし1%を基準としていれば, そのような判断はできなかったことになる。これが,

仮説検定の考え方の基本的な流れである。

そこで、以上の例を踏まえ、「統計的仮説検定法」の流れを整理してまとめる。

#### 【統計的仮説検定法】

- ①確率についての仮定をおく。【仮説】
- ②実際に起こった事柄が起こる確率をこの仮定のもとで計算する。
- ③計算した値がある程度小さければ 【有意水準（危険率）：5%あるいは1%】  
→（正しい仮定を誤ったものだとしてしまう危険を承知の上で）  
仮定を正しくないと判断する。【棄却】

まず、確率についての仮定を置く。これを「仮説」という。この例では、「それぞれの試合でAが勝つ確率は1/2である」という仮定が「仮説」に当たる。

次に、この仮説のもとで、実際に起こった結果がどの程度起こりにくいかを確率で計算する。

そして、あらかじめ定めた基準を用いて、その仮説が正しくないと判断できるかどうかを調べる。この基準を「有意水準」という。有意水準は、「仮説が正しいにもかかわらず、それを誤りと判断してしまう確率」を表しており、「危険率」とも呼ばれる。通常、その値は5%又は1%とされる。本例では、有意水準を5%に設定している。

計算した確率が有意水準を下回った場合、仮説は正しくないと判断する。これを「仮説を棄却する」という。この例では、「AとBに実力の差がない」という仮説を棄却する、すなわち「AとBに実力の差がないとはいえない」という判断を下すことになる。以上が、仮説検定法の基本的な流れである。

先に挙げた教科書の例では、回答者の70%がBを選び、「Bの方が書きやすい」と判断するのが自然であり、しかも会社がAを改良してBを開発したという事実があるため、「AとBはどちらともいえない」と反論するのは、検定を学んでいない者にとってやや無理があった。一方、このテニスの例では、負けず嫌いのBさんが「実力に差はない」と主張することは十分に考えられる。だからこそ、「Aの方が実力がある」と主張するためには、感覚的な説明ではなく、このような仮説検定の考え方に基づく説明が必要となるのである。

ほかにも、次のような面白いエピソードを使って、仮説検定を説明することもできるだろう。

#### 【エピソード】

豊臣秀吉が羽柴秀吉と名のついていたころ、強敵と戦うことになった。彼は手勢を引き連れて神社に参拝し、祈願を込めて小判を8枚投げたところごとく表が出た。侍たちは大いに喜んで士気が上がり、強敵に勝ったという。

これらの小判が普通の小判であるという仮説を立てると、8枚とも表が出る確率は $1/256$ 、すなわち $0.0039\dots$ となり、めったに起こらないことになる。有意水準を $0.05$ にしても $0.01$ にしても仮説は棄却され、「普通の小判とはいえない」と判断するところだが、検定など知るべくもない侍たちが喜んだのはもっともである。

実は、これらの小判は裏同士が御飯粒で貼り合わせてあって、いつでも表が出るように細工がしてあったという。

この例では、8枚すべての小判が表であった。しかし、一般に小判の表が出る確率は1/2であるから、すべてが表になるのは不自然であると考え、その偶然性を疑って検定を行うのが自然な流れである。ただし、この例の時代背景を考えると、下級武士にとっては小判そのものよりも神のお告げが優先され、小判の偏りに疑問を抱くことはなかったのだろう。

このように、教科書に見られる一般的な例に入る前段階として、「そもそも検定とは何か」が直感的に理解できる題材を、「仮説検定」の授業導入で提示することが望ましいと考える。

## 5 「数学 I」や「数学 B」における「仮説検定」の手順

これまで、一般的な仮説検定の考え方について説明してきた。ここからは、学習指導要領で扱われている範囲、すなわち「数学 I」及び「数学 B」で扱う仮説検定について説明する。

教科書では、「仮説検定の手順」は次のように示されている。

まず、「正しいかどうかを判断したい主張に対して、その主張に反する仮説を立てる」とされている。理論的には、仮説の立て方は様々であるが、学習指導要領で扱う仮説検定では、正しいと判断したい主張に反する仮説を立てるという形式に限定されている。これは、その仮説が棄却できれば、もとの主張が正しいと判断できるようにするためである。

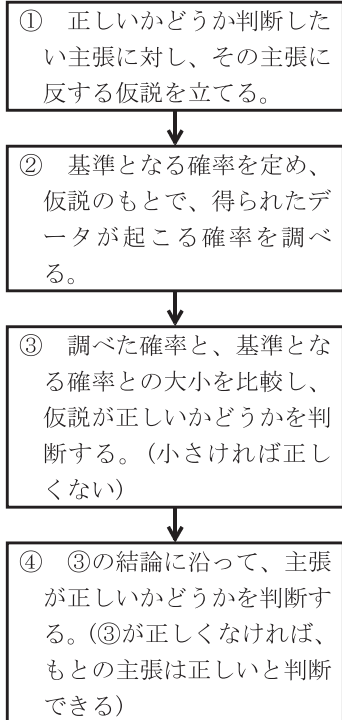
厳密に言えば、検定によって判断できるのは「仮説を棄却できるか、できないか」のみである。しかし、学習指導要領で扱う検定は、仮説を棄却できた場合に、もとの主張が正しいと判断できるような場面にほぼ限定されている。そのため、指導上はこのように説明して差し支えない。

検定の対象となる仮説は、統計学では「帰無仮説」、もとの主張は「対立仮説」と呼ばれる。ただし、これらの用語は「数学 B」で初めて導入されるものであり、「数学 I」では「判断したい主張」「それに反する仮説」といった表現にとどめている点に注意が必要である。

次に、基準となる確率を定め、その仮説のもとで、実際に得られたデータが起こる確率を調べる。この基準となる確率は、統計学では「有意水準」と呼ばれるが、この用語も「数学 B」で扱われるため、「数学 I」ではあくまで「基準となる確率」として示されている。

続いて、求めた確率と基準となる確率を比較し、仮説が正しいかどうかを判断する。確率が基準を下回った場合、仮説は正しくないと判断される。統計学ではこれを「仮説を棄却する」というが、こ

### 【ある主張が正しいかどうかを判断するための仮説検定の手順】



### 【背理法】



の用語も「数学B」で扱うため、「数学I」では「仮説は正しくない」と説明される。

そして、仮説が正しくないと判断できた場合には、もとの主張が正しいと結論づける。この一連の流れが、学習指導要領で扱う仮説検定の手順である。

この流れは、もとの主張に反する仮説を立て、その仮説のもとで確率を計算し、基準より小さければ仮説は成り立たず、もとの主張が正しいと判断するという点で、背理法の考え方とよく似ている。背理法では、もとの命題が成り立たないと仮定して矛盾を導き、もとの命題が真であると結論した。仮説検定も、これと同様の論理構造をもっている。

一方で、基準を上回った場合には、仮説は棄却できない、すなわち「正しくないとは言えない」だけであり、仮説が正しいと結論できるわけではない点に注意が必要である。したがって、この場合には、もとの主張が正しいかどうかについても判断できなかった、という結論になる。これは、背理法でも矛盾が導けないからといって、もとの命題が偽とはならないことと、似ている。

以上のように、一般的な仮説検定の考え方と本質的に異なるわけではないが、正しいと判断したい主張に反する仮説を立てること、及び仮説が正しくなければ、もとの主張が正しいと判断できるという点が、学習指導要領の検定では明確に付け加えられている。言い換えれば、高等学校で扱う仮説検定の範囲をここまですと定め、理解しやすさを重視した結果であると考えられる。

## 6 「仮説検定」の問題と解答例

では、この手順で「仮説検定」をしたらどうなるかをまとめてみる。

**【問題】** ある企業が発売している製品を改良し、20人にアンケートを実施したところ、15人が「品質が向上した」と回答した。この結果から、製品の品質が向上したと判断してよいか。仮説検定の考え方をを用い、基準となる確率を0.05として考察せよ。

- ① 正しいかどうか判断したい主張に対し、その主張に反する仮説を立てる。

「品質が向上した」の主張が正しいかどうかを判断するために次の仮説を立てる。  
 (仮説) 品質が向上したとはいえず、「品質が向上した」と回答する場合と、そうでない場合がまったくの偶然で起こる  
 ; 「品質が向上した」と回答する確率が1/2である。

つまり、「品質が向上した」と回答したのがたまたま多かっただけで、実は半々、確率が1/2だと仮説を立てる。

- ② 基準となる確率を定め、仮説のもとで、得られたデータが起こる確率を調べる。

20人中  $r$  人が「品質が向上した」と回答する確率は、  
 ${}_{20}C_r (1/2)^r (1/2)^{20-r}$  なので、  
 $r \geq 15$  の場合をコンピュータで計算すると、

右の表のようになる。

r	P (X=r)
15	0.014785767
16	0.004620552
17	0.001087189
18	0.000181198
19	0.000019073
20	0.000000953
計	0.020694733

20人中15人が「品質が向上した」と回答したので、そうなる確率を求めると、反復試行の確率で求めることになるので、 ${}_{20}C_r(1/2)^r(1/2)^{20-r}$ のrに15を入れることになる。これは、通常の計算では無理があるので、コンピューターや電卓を使用して計算する。

- ③ 調べた確率と、基準となる確率との大小を比較し、仮説が正しいかどうかを判断する。(小さければ正しくない)

20人中15人以上が「品質が向上した」と回答する確率は0.020…となり、0.05より小さいから、仮説は正しくなかったと考えられ、もとの主張が正しいと判断してよい。

計算すると、20人中15人が「品質が向上した」と回答する確率は0.0147…となり、これだけでも基準の0.05を下回るので、仮説が正しくないと言えそうだが、表を見て分かるとおおり、20人中16人から20人までのそれぞれの確率を見ると、15人の場合の確率より低くなっており15人が仮説を正しくないと言えれば、16人以上も正しくないと言えるため、ここでは15人以上が「品質が向上した」と回答する確率を求め、基準をもとに検定する。

この場合、確率は0.020…となり、基準の0.05より小さいので、仮説は正しくない、つまりもとの主張が正しいと判断できる。

- ④ ③の結論に沿って、主張が正しいかどうかを判断する。

したがって、品質が向上したと判断してよい。

③が正しくなければ、もとの主張は正しいと判断できる。したがって、品質が向上したと判断してよい、となる。

以上が、手順に基づいて行った、「仮説検定」の解答例である。

## 7 6の解答例における課題点

では、6で示した解答例には、どのような課題があるのかについて検討してみよう。

まず、なぜ「15人」ではなく、「15人以上」の確率を求めるのかという点である。多くの教科書や参考書では、この理由についてほとんど説明がなされておらず、教員や生徒が戸惑う場面も少なくないと思われる。

一つ目の理由としては、先に述べたように、15人で仮説が棄却できるのであれば、16人、17人、……、20人と人数が増えるにつれて確率はさらに小さくなり、いずれも仮説を棄却できるという点が挙げられる。ただし、この理由だけでは、「なぜそれらをすべて足すのか」という疑問が残り、納得しきれない生徒も多いだろう。

二つ目の理由として、16人以上が回答した事象の中には、15人が回答した事象も含まれており、

それらをまとめて考える必要があるという点が挙げられる。したがって、「15人以上」という形で確率を合計することに意味がある。

さらに、「数学B」では、二項分布を経て正規分布を学び、それを用いて検定を行う。正規分布では、確率は分布曲線と横軸で囲まれた「面積」として表されるため、横軸上に幅をもたない一点では確率を表すことができない。そのため、検定では「15人以上」といった区間として確率を求める必要があることも理由として挙げられる。

仮に、「〇〇人以上」のような区間ではなく、「〇〇人」という一点で検定ができると仮定してみる。例えば、400人中200人が「品質が向上した」と回答したとする。このとき、仮説を「回答者が『向上した』と答える確率は1/2」として検定を行うと、

$${}_{400}C_{200}(1/2)^{200}(1/2)^{200}$$

で確率を計算することになり、その値は約0.039となる。この結果、仮説は棄却され、「品質は向上した」と判断されることになる。しかし、実際には回答者の半数しか「向上した」と答えておらず、この結論は直感的にも矛盾している。

一方、「200人以上」が「向上した」と回答する確率を求めると、その値はおよそ0.5となり、仮説は棄却されない。このように、検定においては、「〇〇以上」という区間の確率を用いて判断するというルールを採用しなければ、妥当な結論が得られないのである。

このような疑問を自ら抱くことができる学力の高い生徒に対しては、理由を考えさせ、議論させることも有効であろう。一方で、理由を丁寧に説明することでかえって混乱を招くおそれのある生徒に対しては、あえて深入りせず、軽く触れるにとどめるという判断も必要になる。

さて、もう一つ、大きな課題がある。それは、反復試行の確率が「数学A」の範囲に含まれている点である。「数学I」と「数学A」を並行して履修している学校であれば、このような解答例を用いた授業も可能かもしれない。しかし、教育課程上、「数学A」を「数学I」の履修後に配置している学校では、「数学I」に含まれる仮説検定の授業で、この解答例をそのまま用いることは適切とは言えない。実際、「数学I」の教科書の中にも、反復試行を用いた解法が掲載されている例はあるが、それらはいずれも「発展」扱いとなっている。

## 8 「数学I」の範囲に限定した「仮説検定」はどのように扱っているか

それでは、「数学I」の範囲だけではどのように指導するか、考える。例題として、先ほどの問題で考える。

**【問題】** ある企業が発売している製品を改良し、20人にアンケートを実施したところ、15人が「品質が向上した」と回答した。この結果から、製品の品質が向上したと判断してよいか。仮説検定の考え方を用い、基準となる確率を0.05として考察せよ。

ただし、公正なコインを20枚投げて表が出た枚数を記録する実験を200回行ったところ、次の表のようになったとし、この結果を用いよ。

表の回数	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	計
度数	1	2	7	15	25	30	37	32	23	16	8	3	0	1	200

「品質が向上した」という主張に反する仮説として、「向上したと回答する確率は1/2である」

を立て、20人中15人以上が「向上した」と回答する確率を求める、という流れまでは同じである。しかし、6では「数学A」で扱う反復試行の考え方をを用いているため、「数学I」の範囲に限定すると、この確率を理論的に求めることはできない。

そこで、「数学I」における仮説検定では、理論計算によって確率を求めるのではなく、実験によって確率を求めるという方法をとる。具体的には、確率が1/2になることが確実な試行をn回(ここではコイン投げを20回)行い、そのn回の試行を1回の実験として、これをN回(ここでは200回)繰り返す。そして、その実験結果を表にまとめ、相対度数として確率を求めるのである。教科書の問題では、この実験結果があらかじめ与えられている。

仮説検定を、特に統計分野を初めて指導する教員にとっては、なぜここで突然コイン投げの実験が登場するのか、戸惑いを感じる場面も多いと思われる。しかし、「数学I」という範囲に限定すれば、確率を理論的に求めることはできず、このような実験によって確率を求める方法をとらざるを得ないのである。

「品質が向上した」の主張が正しいかどうかを判断するために次の仮説を立てる。  
 (仮説) 品質が向上したとはいえず、「品質が向上した」と回答する場合と、そうでない場合が  
 まったくの偶然で起こる  
 ; 「品質が向上した」と回答する確率が1/2である。  
 20枚中15枚以上表が出る確率は  $(3+0+1)/200=0.02$  となり、  
 20人中15人以上「品質が向上した」と回答する確率は0.02程度であり、0.05より小さいから、  
 仮説は正しくなかったと考えられ、もとの主張が正しいと判断してよい。  
 したがって、品質が向上したと判断してよい。

もとの主張に反する仮説を立てるところまでは同じである。

次に、20人中15人以上が「品質が向上した」と回答する確率を求めるが、ここでは反復試行の確率を理論的に計算するのではない。仮説と同じ確率の実験、すなわちここではコイン投げを用い、20枚中表が何枚出るといふ試行を200回行い、その実験結果から「20枚中15枚以上が表になる確率」を求める。そして、この確率を「20人中15人以上が『品質が向上した』と回答する確率」と同じと見なし、以降は先に説明した検定の手順に従って判断する。最終的には、「品質が向上したと判断してよい」という結論になる。

本来であれば、反復試行の確率を用いて理論的に計算し、検定を行うのが自然であろう。さらに、ゆくゆくは「数学B」で正規分布を学び、それを用いて検定を行うことができるようになる。したがって、生徒の実態によっては、教科書では「発展」扱いとなっているものの、先に反復試行による検定を紹介した上で、実験による検定を扱うという指導も一つの方法だと考えられる。

一方で、「数学I」までしか履修していない場合や、「発展」内容まで扱うことが難しい生徒集団であれば、ここでは理論的に確率を求めることはせず、実験によっても検定ができるという点に絞って、この方法のみで終わるのが無難であろう。

本来の仮説検定は、正規分布まで学習した後に扱う内容である。しかし、仮説検定の考え方に限れば、必ずしも難解なものではない。そのため、学習指導要領の「数学I」では、検定の考え方を理解するための知識及び技能と、実験などを通して判断する思考力・判断力・表現力等を身につけることが求められているのである。

## 9 「仮説検定」の授業をどうつくるか

教科書で扱われている「仮説検定」は、分量としても多くはなく、内容も決して難解ではない。そのため、教科書の問題を順に解くだけの授業に終始した場合、生徒にとっては強い印象を残さないまま、時間の経過とともに忘れ去られてしまう可能性がある。

そこで、先ほど取り上げた問題を題材とし、教科書ではあらかじめ示されている実験結果を用いるのではなく、生徒自身が実験を行い、その結果を基に検定を行う授業例を紹介する。

なお、使用する問題は、先に示したものと同一である。

**【問題】** ある企業が発売している製品を改良し、20人にアンケートを実施したところ、15人が「品質が向上した」と回答した。この結果から、製品の品質が向上したと判断してよいか。仮説検定の考え方をを用い、基準となる確率を0.05として考察せよ。

そして、教員が「 $P=1/2$ という仮説を、実験で確かめて検定しよう！」と呼びかけ、実験させるのである。教科書ではコインで実験したが、別に確率が $1/2$ になれば、何でもかまわない。

- A グループ：コインを投げて、20枚中何枚表が出るか。
- B グループ：さいころを投げて、20個中何個偶数が出るか。
- C グループ：ジョーカー以外のトランプ52枚からカード1枚引き、20回中何回赤のカードが出るか。
- D グループ：当たり外れが半々のくじで、20回中何回あたりくじを引くか。

20枚、20個、20回などの実験を複数回行って、合計を表にまとめる。度数の合計が多ければ多いほど、確率は理論値に近づくので、より正確な検定ができる。

そして、15人以上の確率を求めれば、検定ができる。検定を実験で実感することで、より理解が深まるのである。

表の枚数など	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	計	
度数																						200

実験より、15人以上が「品質が向上した」と回答する確率は  程度で、0.05より小さい（大きい？）ので仮説は正しくなかった（仮説は否定できない？）と考えられ、もとの主張が正しいと判断してよい（判断できない？）。

以上が、実験によって仮説を検定する授業の一例である。実際に実験を行い、その結果を基に判断する過程を通して、生徒が仮説検定をより実感をもって理解できる授業になるのではないかと考えている。

## 10 ゲームで検定を活用できないか

さらに、仮説検定を用いたゲーム化の可能性についても考えてみた。生徒の実態にもよるが、

単純な実験のみでは興味が持続せず、途中で飽きてしまうことも少なくない。一方で、ゲームの要素を取り入れることで、学習への関心を一定時間保つことができるのではないかと考えたためである。

### 【検定ゲーム】

ある商店街で「よく当たるくじ引大会」を実施することになり、「よく当たるくじ」を作成してほしいという依頼を受けた、という設定で活動を行う。

① クラスをいくつかのグループに分け、それぞれのグループで自由にくじを作成させる。くじの本数は任意とし、「よく当たるくじ」にすることが求められる。ただし、当たりくじが多すぎると景品を多く用意しなければならず、商店街は赤字になってしまう。一方で、当たりくじが少なすぎると、「本当によく当たるくじ引きなのか」という悪評が立つおそれがある。

そこで、作成したくじについて検定を行い、「当たりやすい」と判断されたくじのうち、当たる確率が最も低いグループを表彰することとする。

② 各グループのくじを、それぞれ12人に引いてもらい、当たり的人数を調べる。なお、引いたくじはすべて戻すものとする。

③ このくじが「当たりやすい」と判断してよいかを検定する。

仮説を「当たりを引く確率は0.5である」とし、基準となる確率を0.05とする。検定には、コイン投げの結果を用いる。

④ 検定のため、別のグループに公正なコインを12枚同時に投げ、表が出た枚数を記録する実験を100回行わせる。その結果を基に、12回中何回以上表が出る確率が0.05未満となるかを調べる。

(検定の結果、1番目と2番目のグループは仮説が正しくない、すなわち「当たりやすい」と判断され、3番目のグループは仮説が正しくないとはいえない、つまり「当たりやすいとはいえない」と判断されたとする。この時点で、3番目のグループは失格となる。)

⑤ 「当たりやすい」と判断されたグループについて、それぞれのくじの本数を調べ、当たる確率がより低いグループを「優秀くじ作成賞」として表彰する。

(例えば、1番目のグループが77/101、2番目のグループが167/203であった場合、当たる確率がより低い1番目のグループが表彰される。2番目のグループも確かによく当たるくじを作成しているが、当たりすぎると景品を多く準備しなければならず、商店街にとっては必ずしも望ましいとはいえないためである。)

正規分布を用いた検定まで理解している生徒であれば、棄却域から逆算することで、棄却される範囲内で当たる確率を最も低くするようくじの作り方を考えることもできる。しかし、本活動ではそのような知識を前提とせず、各グループが試行錯誤しながら、直感的に「当たりやすい」くじを作成するものとした。

このように、ゲーム形式の活動を通して実際に検定を用いてみることも、仮説検定の考え方を理解させる一つの指導例として有効であると考え、ここに紹介した。

## 11 終わりに

筆者自身は、昭和54年度に高等学校へ入学し、3年次に「数学Ⅲ」を選択した。本来であれば授業で統計を学ぶはずであったが、実際には2月の家庭学習期間中の補習で扱われるにとどまった。平均値や分散、二項分布、正規分布までは何とか理解できたものの、推定や検定に至っては十分に理解できなかったというのが正直なところである。ただし、受験する大学ではそこまで出題されないことが分かっていたため、当時は特に困ることはなかった。

しかし、本当に困ったのは教員になってからである。昭和62年度に地方の道立高校へ赴任し、担当科目の一つとして「確率・統計」を受け持つことになった。当時、その高校では3年次の数学が選択制であり、「確率・統計」は私大文系志望者や就職希望者が多く履修する、受験対策とは直接関係のない科目であった。そのため、基本的な内容とはいえ全単元をきちんと扱う必要があり、推定や検定まで指導できるのか、正直なところ大きな不安を抱いていた。

そのような中で救いとなったのは、使用した教科書が三省堂版「高等学校の確率・統計」だったことである。この教科書は、「受験技術よりも数学の意味が分かること」を重視して執筆されており、推定や検定についても、なぜそのように考えるのかを丁寧に説明する記述に多くの紙幅が割かれていた。推定や検定がほとんど理解できていなかった当時の筆者にとって、非常に分かりやすく、教材研究を進めやすい教科書であった。残念ながら、この教科書は独自性の強さゆえか当時採択が少なく、次の学習指導要領改訂とともに姿を消したが、評価が高かったことから、その後教科書と指導書の内容をまとめた文庫本として刊行され、現在に至っている。

こうした自身の経験を振り返り、教材研究に苦勞しながらも推定や検定を何とか指導できたことを思い出し、もし自分が現在の「仮説検定」を教える立場であれば、どのように授業を構成するかを改めて整理してみようと考えた。それが、本稿をまとめるに至った動機である。

本稿で整理した内容が、若い数学科教員や、これから教員を目指そうとする学生にとって、各単元について深く教材研究を行い、より充実した授業を構想する一助となり、ひいては真の教科指導力を身につける契機となれば幸いである。

### 引用・参考文献

- 「高等学校学習指導要領解説・数学編理数編」（昭和54年，文部省）
- 「高等学校学習指導要領解説・数学編理数編」（平成元年，文部省）
- 「高等学校学習指導要領解説・数学編理数編」（平成11年，文部省）
- 「高等学校学習指導要領解説・数学編理数編」（平成21年，文部科学省）
- 「高等学校学習指導要領解説・数学編理数編」（平成30年，文部科学省）
- 「高等学校 数学Ⅰ」（令和3年，数研出版）
- 「モノグラフ 統計」（1990年，矢野健太郎・監修，村上哲哉・著，科学振興新社，フォーラム・A・発売）
- 「高等学校の確率・統計」（2011年，黒田孝郎・森毅・小島順・野崎昭弘・著，筑摩書房）
- 「チャート式 解法と演習 数学Ⅰ+A」（2021年，数研出版）

〈研究報告〉

# 教科「理科」における気象教育に関する一考察

城 戸 和 彦

(北海道立教育研究所主査)

小 形 秀 雄

(北海学園大学工学部講師)

## 1. はじめに

最近では異常な暑さや大雨など気象に関する災害で命を落とす人が多くなっている。異常気象という言葉もよく言われる。これは「30年に一度の現象」と定義されているが、その異常気象が短い間隔で出現しているように思われる。気象は自然現象であり私たち人間が変化させられるものではない。気象内容をしっかり理解し、災害への対応策を身に付けていかなければならない。

気象についての理解を深めるためには、教育の段階から子供たちに教え気象に関する災害への対応策も身に付けさせる必要があると考える。本報告では、中学校、高等学校の教科「理科」の内容で学習指導要領における気象や天気に関する内容と指導方法について把握し、最近の気象災害に関する内容や災害への対応策について明らかにしたい。特に、外での学校行事や部活動中に落雷における事故が多いことから、落雷への対応を中心に考察する。

なお、「1 はじめに」、「2 学習指導要領における気象に関する内容や指導方法」、については城戸が、「3 最近の気象災害の内容と対応策」については小形が担当した。

## 2. 学習指導要領における気象に関する内容と指導方法

### (1) 中学校における内容

中学校では小学校での「天気の様子」や「天気の変化」に関する学習に基づいて、第2分野の中で「気象とその変化」として位置づけられていて、第2学年で学習することになっている。「気象とその変化」の内容は下記の項目である。

#### (ア) 気象観測

##### ㊦ 気象要素

気象要素として、気温、湿度、気圧、風向などを理解すること。また、気圧を取り上げ、圧力についての実験を行い、大気圧の実験を行い、その結果を空気の重さと関連付けて理解すること。

##### ㊧ 気象観測

校庭などで気象観測を継続的に行い、その観測記録などに基づいて、気温、湿度、気圧、風向などの変化と天気との関係を見いだして理解するとともに、観測方法や記録の仕方を身に付けること。

(イ) 天気の変化

⑦ 霧や雲の発生

霧や雲の発生についての観察、実験を行い、そのでき方を気圧、気温及び湿度の変化と関連付けて理解すること。

⑧ 前線の通過と天気の変化

前線の通過に伴う天気の変化の観測結果などに基づいて、その変化を暖気、寒気と関連付けて理解すること。

(ウ) 日本の気象

⑦ 日本の天気の特徴

天気図や気象衛星画像などから、日本の天気の特徴を気団と関連付けて理解すること。

⑧ 大気の動きと海洋の影響

気象衛星画像や調査記録などから、日本の気象を日本付近の大気の動きや海洋の影響に関連付けて理解すること。

(エ) 自然の恵みと気象災害

⑦ 自然の恵みと気象災害

気象現象がもたらす恵みと気象災害について調べ、これらを天気の変化や日本の気象と関連付けて理解すること。

さらに学習指導要領解説においては、学習指導要領の内容に加えて詳細な学習内容や指導方法について記載されている。学習指導要領の内容に対応させて簡単に確認する。

気象要素についての内容の湿度については大気中に水蒸気が含まれている度合いを表し、風向については観測地点に吹いてくる風の方位を表し、風速については空気が1秒あたりに進む距離として表すことを理解させる。

気圧については、スポンジなどの柔らかい物体に接触面積を変えて同じ力を加えたときのへこみ方の違いを調べさせ、へこみ方は接触面積と関係があるという圧力の考え方を見いださせ、圧力は単位面積当たりの力の大きさで表されることを理解させる。その上で、大気圧については、観察、実験を通して、その結果を空気の重さと関連付けて理解させる。その際、空気中にある物体にあらゆる向きから圧力が働くことにも触れる。例えば、空き缶を大気圧による力でへこませる実験などを行い、空気の圧力の存在を理解させる。

気象観測についての内容では、例えば、時間の変化に伴う気温や湿度などの気象要素間の関係を見いだす課題を設定し、それを検証するために、観測の場所や器具、期間、間隔について観測の計画を立てさせ、観測記録から分析して解釈させ、各気象要素間に関係があることを見いだして理解させる。その際、例えばデータの連続性を補うため、自記温度計、自記湿度計、自記気圧計などの活用を図ることも考えられる。また、アメダス（地域気象観測システム）などの地域の気象情報を自らの観測結果に加えて考察させることも考えられる。

霧や雲の発生についての内容では、例えば、窓や鏡、コップがくもるなど大気中の水蒸気水滴に変化する現象から露点の測定を行う。霧については、気温が下がると飽和水蒸気量が小さくなるため湿度が上がるといふ規則性を理解させ、気温の低下に伴って大気中の水蒸気が凝結して霧が発生することを理解させる。雲の成因については、高度による大気圧の変化と、大気圧の上昇に伴う気温の低下を取り上げる。例えば、密閉された袋が高度変化に伴う気圧の低下によって

膨らむ現象などを取り上げることが考えられる。

前線の通過と天気の変化についての内容では、気象観測などのデータや天気図から、前線付近の暖気と寒気の動きに気付かせ、前線の通過に伴う天気の変化について理解させる。その際、高気圧、低気圧のまわりの風の吹き方に触れる。前線の構造については、前線が通過する際の気温、湿度、気圧、風向、風速、天気の変化、雲の種類を観測結果や実際の経験と関連付けて理解させる。例えば、寒冷前線が通過する際の特徴として、短時間の比較的強い降雨、雷、通過後の気温の低下、風向の変化などの現象が観測できることから、寒冷前線に伴う暖気、寒気の入れ替わりを考察させることなどが考えられる。

日本の天気の特徴についての内容では、気団の特徴は、それが発生した場所の気温や大気中に含まれる水蒸気の量によって決まることを取り上げる。気団が発達したり衰退したりすることで、季節に特徴的な気圧配置が形成され、日本の天気に特徴が生じることを、天気図や気象衛星画像、気象データを比較することで理解させる。例えば、シベリア気団は冬季に大陸で形成されることから、その特徴は寒冷で乾燥していて、シベリア気団の発達と冬の天気が密接に関わっていることに気付かせることが考えられる。また、台風の進路が夏から秋にかけて変化していることに気付かせ、台風の進路が小笠原気団の発達や密接に関わっていることを理解させる。

大気の動きと海洋の影響についての内容では、日本付近の大気の動きについて、1週間程度の天気図や気象衛星画像の変化、上空の風向などの観測データを用いて捉えさせる。例えば、温帯低気圧や移動性高気圧が西から東へ移動していくことや、日本付近の気象衛星画像の動画などの雲の移動の様子から、日本の上空には一年中西から東へ偏西風が吹いていることに気付かせることなどが考えられる。その際、地球を取り巻く大気の動きや地球の大きさに対して気象現象の起こる大気の層の厚さがごく薄いことにも触れる。また、日本の気象への海洋の影響については、日本の天気に影響を与える気団の性質や季節風の発生、日本海側の多雪などの特徴的な気象に、海洋が関わっていることを理解させる。例えば、全国のアメダスのデータと天気図や気象衛星画像などを用いて、冬に北西の季節風が顕著なのは、シベリアで発達する高気圧に対して海洋上が低気圧となるためであることなどから海洋の影響を理解させることが考えられる。その際、日本がユーラシア大陸の東岸に位置するために、日本付近の気象は大陸の影響を受けながらも海洋の影響を大きく受けていることを取り上げることが考えられる。

自然の恵みと気象災害についての内容では、気象現象は、住みよい環境や水資源などの恩恵をもたらしていることを調べさせ、自然が人々の豊かな生活に寄与していることに気付かせる。また、資料などを基に、台風や前線などによる大雨・大雪や強風による気象災害について調べさせ、天気の変化や日本の気象と関連付けて理解させる。例えば、台風について扱う場合は、被害をもたらした過去の台風の特徴を取り上げるとともに、台風の進路に基づいて強風や高潮などによる災害の発生した状況を整理させる学習が考えられる。また、洪水について扱う場合は、気象庁が発表する各種情報や警報などを取り上げるとともに、洪水の記録や資料などから災害を起こした大雨、融雪などの特徴、浸水地域と土地の特徴などを整理させる学習が考えられる。

## (2) 高等学校における内容

文部科学省「令和5(2023)年度 公立高等学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果について」によれば、「地学基礎」の開設状況は49.7%、「地学」は8.5%であり、物理、化学、生物が70~80%程度であることから地学の開設は少ない実態である。

したがって、ここでは「地学基礎」の内容について確認する。

地学基礎の内容で、地球のすがたの(ウ)大気と海洋と変動する地球の(イ)地球の環境の④日本の自然環境に気象関係の内容がある。

(ウ) 大気と海洋

⑦ 地球の熱収支

気圧や気温の鉛直方向の変化などについての資料に基づいて、大気の構造の特徴を見いだして理解するとともに、太陽放射の受熱量と地球放射の放熱量がつり合っていることを理解すること。

④ 大気と海水の運動

大気と海水の運動に関する資料に基づいて、大気と海洋の大循環について理解するとともに、緯度により太陽放射の受熱量が異なることなどから、地球規模で熱が輸送されていることを見いだして理解すること。

(イ) 地球の環境

⑦ 地球環境の科学

地球規模の自然環境に関する資料に基づいて、地球環境の変化を見いだしてその仕組みを理解するとともに、それらの現象と人間生活との関わりについて認識すること。

④ 日本の自然環境

日本の自然環境を理解し、それらがもたらす恩恵や災害など自然環境と人間生活との関わりについて認識すること。

さらに学習指導要領解説においては、学習指導要領の内容に加えて詳細な学習内容や指導方法について記載されている。学習指導要領の内容に対応させて簡単に確認する。

大気の構造については、気圧や気温が高度とともに変化することや、対流圏、成層圏、中間圏、熱圏が気温の変化によって区分されていることを扱う。大気中で見られる現象については、対流圏では雲の発生や降水があること、成層圏ではオゾン層により紫外線が吸収されること及び熱圏ではオーロラや流星が見られることなどに触れる。

太陽放射の受熱量と地球放射の放熱量が釣り合っていることについては、地球全体の平均気温がほぼ一定に保たれていることを扱う。その際、例えば、人口衛星による赤外面像や放射冷却に関する資料に基づいて、大気や地表から放射が行われていることを理解させることが考えられる。また、太陽放射の受熱量に関連して、地球全体のアルベドを取り上げることが考えられる。温室効果については、水蒸気、二酸化炭素やメタンなどが温室効果をもたらししていることに触れる。

大気と海洋の大循環については、地球規模の大気と海洋の運動を扱う。その際、年平均の風や海流の分布などの資料に基づいて、偏西風、貿易風、ハドレー循環、暖流、寒流などを理解させることが考えられる。海洋の層構造と深層に及ぶ循環については、表層と深層で水温が違うことや、表層と深層の間の循環などに触れる。

地球規模で熱が輸送されていることを見いださせるには、例えば、資料などに基づいて、緯度と太陽放射の受熱量、及び緯度と地球放射の放射量との関係を表すグラフを作成させ、低緯度では太陽放射の受熱量が大きく、高緯度では地球放射の方が大きくなっていることから、低緯度から高緯度に地球規模で熱が輸送されていることを見いださせることが考えられる。

地球環境の変化としては、地球温暖化、オゾン層破壊、エルニーニョ現象などを取り上げ、そ

これらの現象の仕組みを理解するとともに、人間生活に関連していることを認識させる。

地球環境の変化を見いださせるには、例えば、世界の平均気温の変化や氷河の後退などのデータに基づいて、地球温暖化が実際に起きていることに気付かせるとともに、地域の自然環境の変化との関わりや人間生活によるものと自然の変動によるものがあることや、その変化の予測には、不確実性や限界があることを認識させることが大切である。

日本の自然環境がもたらす恩恵については、多様な自然景観、豊かな水、温泉、地下資源などを取り上げることが考えられる。自然災害については、気象では台風や豪雨など、地震では地震動や津波、液状化現象など、火山活動では降灰や溶岩流、火砕流などに伴う被害を扱うことが考えられる。自然災害の予測や防災については、例えば、地域の自然災害の予測や防災の必要性に気付かせ、地域の自然災害の実例や防災に関する資料、ハザードマップなどに基づいて、地域の自然災害の特徴を理解させたり、予測された被害を低減させる取組を立案させたりすることが考えられる。その際、他の地域や世界で起きた自然災害や災害対策を比較しながら考察させることも考えられる。

### (3) 指導内容と方法の工夫

最近の天気予報においては、気象予報士が詳細なデータ等を紹介し数日後までの予報を丁寧に伝えている。気象現象・用語については現状の天気や気象災害等に合わせて常に新しいものが追加されてきている。学習指導要領はおよそ10年に1度、改訂されているが、その時々現状に合った気象現象・用語を生徒に紹介できていないのが現状である。

そこで、ここではテレビ等で気象予報士が天気予報を伝える時に使用している気象現象・用語で教科書では扱われていないものについて方法も含めて提示する。

なお、高等学校における「地学基礎」、「地学」の開設状況が低く、履修生徒はさらに少ないと予想される。このことは、この分野を中学校で学習するのが最終となる生徒が多いということである。そのため、中学校での学習指導要領と教科書の内容を参考に提示する。

気象予報士は台風が日本に接近してきたときに、「大型で非常に強い台風」が、という言葉で説明します。気象庁は台風のおおよその勢力を示す目安として、下表のように風速(10分間平均)をもとに台風の「大きさ」と「強さ」を表現している。「大きさ」は強風域(風速15 m/s以上の風が吹いているか、吹く可能性がある範囲)の半径で、「強さ」は最大風速で区分している。台風は「大きさ」と「強さ」の目安があり、分けられていることを生徒に紹介し、生徒がいつでも調べることができるようにすることも大切である。

強さの階級分け

階級	最大風速
強い	33 m/s (64 ノット) 以上～44 m/s (85 ノット) 未満
非常に強い	44 m/s (85 ノット) 以上～54 m/s (105 ノット) 未満
猛烈な	54 m/s (105 ノット) 以上

大きさの階級分け

階級	風速 15 m/s 以上の半径
大型 (大きい)	500 km 以上～800 km 未満
超大型 (非常に大きい)	800 km 以上

普段「低気圧」と呼んでいる温帯低気圧の中には、台風並みに発達し、大雨や強風をもたらすことがある。メディアでは時々「爆弾低気圧」と紹介されています。爆発的な発達ということが由来のようですが、戦争やテロを連想するため、気象予報士の多くは、「急速に発達する低気圧」、「猛烈な風を伴う低気圧」などの表現を使います。

「急速に発達する低気圧」は、気象庁の定義は少し難しいのですが、北緯 40° の地点なら中心気圧が 24 時間で 17.8 hPa 以上低下するものを指すとなっています。気象に関する書物の中では 24 時間で 20 hPa 以上、24 hPa 以上と紹介されているのが多いです。生徒にはわかりやすく 24 時間で 20 hPa 以上 (12 時間で 10 hPa 以上) 低下する低気圧と説明し、「爆弾低気圧」ではなく「急速に発達する低気圧」で定着させたい。

大雨による災害の危険の中で、「線状降水帯」という語句を使って、非常に激しい雨が同じ場所で降り続く実況や予想を解説する場合があります。気象庁の定義では、次々と発生する発達した雨雲 (積乱雲) が列をなした、組織化した積乱雲群によって、数時間にわたってほぼ同じ場所を通過または停滞することで作り出される、線状に伸びる長さ 50～300 km 程度、幅 20～50 km 程度の強い降水をともなう雨域、となっています。生徒には、「組織化した積乱雲群で数時間にわたってほぼ同じ場所で強い降水を伴う線状の雨域」などのわかりやすい表現で説明したい。

最近の夏には最高気温が 40℃ を越える日が度々あり、猛暑日が何日継続とかメディアで紹介されている。冬には今日は 1 日真冬日となりますので暖かい服装でお出かけ下さい、などと気象予報士は説明している。猛暑日は日最高気温が 35 度以上の日、真夏日は日最高気温が 30 度以上の日、夏日は日最高気温が 25 度以上の日、真冬日は日最高気温が 0 度未満の日、冬日は日最低気温が 0 度未満の日、と気象庁では定義している。熱帯夜は夜間の最低気温が 25 度以上のこと、となっている。天気予報の説明ではよく出てくる用語なので生徒には説明しておきたい。生徒にとっては、冬日と真冬日の違いが分かりづらいかもしれない。

天気予報で冬にアナウンサーや気象予報士が、北海道の上空約 5,500 m には氷点下 40 度以下の寒気があり、などと表現することがあります。「寒気」のところが時には「寒波」となることがあります。寒気と寒波について、気象庁では、「寒気」は周りの空気に比べて低温な空気、「寒波」は主として冬期に、広い地域に 2～3 日、またはそれ以上にわたって顕著な気温の低下をもたらすような寒気が到来すること、と定義されている。どちらも寒気であり、違いとしては期間の短い、長いである。生徒にはわかりやすく、寒気が短い期間の場合は「寒気」、2 日以上にわたって長い期間寒気が入る場合は「寒波」と表現することを定着させたい。

最近、天気予報で気象予報士が、日本付近は強い冬型の気圧配置となっており、日本海寒帯気団収束帯 (JPCZ) が北陸地方を指向、などと発言することがよくあります。気象庁の説明では、「冬に日本海で、寒気の吹き出しに伴って形成される。水平スケールが 1,000 km 程度の収束帯。この収束帯に伴う帯状の雲域を、「帯状雲」と呼ぶ。強い冬型の気圧配置や上空の寒気が流れ込む時に、この収束帯付近で対流雲が組織的に発達し、本州日本海側の地域では局地的に

大雪となることがある」と説明されている。JPCZ の発生理由は次のとおりである。朝鮮半島の北東の端に、標高 2,000 m 級である白頭山という山があります。この山に、シベリアからの北よりの季節風がぶつかると、北側と南側の 2 つの方向に迂回します。この迂回した風が、再び風下側にあたる日本海西部で収束します。その収束帯のことを、日本海寒帯気団収束帯と言います。この収束帯は冬季にしばしばみられる現象で、上昇流が強まり同じ場所で積乱雲が発生し、雪が続いて大雪に至ることもあるため、注意が必要である。そのため、メディアで大雪となる理由説明で表現されることが多くあります。生徒には、わかりやすく、「朝鮮半島の北東の端から北陸地方への風の収束帯ができ積乱雲が発生し大雪となる」などとシンプルな表現で説明したい。

上記 6 つの気象現象・用語については、最近の天気予報でアナウンサーや気象予報士が気象状況に合わせて説明している用語であり、教科書では扱われていない内容である。したがって、1 時間程度を「メディアの天気予報にでてくる気象用語」と名付けて授業に追加することを提案する。授業する場合には、6 つの気象現象に関する図、動画、メディアの天気予報の録画などを活用し生徒に提示することが大切であり、定着に繋がるものと考える。

### 3. 気象災害の内容と対応策

大雨や大雪、強風、台風、積乱雲などによって起きる様々な被害を総称して気象災害と言い、その頻発化・激甚化が社会問題となっている。そのため、防災、減災をキーワードとした様々な取組が行われている。気象災害の主なものは、浸水害、洪水害、土砂災害、強風に関連した火災、着雪害、なだれ、落雷、竜巻、高潮、などである。中学校の教科書においても、洪水害、土砂災害、高潮、竜巻、低温による霜、などが取り上げられている。

本研究報告では、外での学校行事や部活動中に落雷における事故が多いことから、落雷への対応を中心に考察する。

#### (1) 過去における学校行事、部活動中の主な落雷事故

かなり前の事故ではあるが、1967 年 8 月に起きた長野県松本深志高等学校の西穂高岳集団登山における落雷事故がある。11 名死亡、13 名負傷という痛ましい事故である。当時は天気予報に関するアプリもなく現在とは大きく違う状況であり、引率教諭の判断も難しいものがあったと推察する。

最近の事故例(概要)を下記に示す。

・令和 7 年 4 月 10 日 午後 6 時頃

サッカー部の活動中に落雷に遭い、6 名が病院へ搬送、うち 1 名が心肺停止、2 名が意識不明の重体となった。

・令和 6 年 4 月 3 日 午後 2 時半頃

サッカー場で、次の試合に備えてサッカーコートの横でウォーミングアップをしていた生徒の列に突然落雷があり、合計 18 名の生徒が病院に搬送された。うち、3 名が意識を失い、2 名は意識を回復したが、1 名が現在も意識を回復したとはいえない状態である。

・令和 5 年 10 月 1 日 午後 3 時 45 分頃

北海道の高校の強行遠足(伝統ある学校行事)で、ゴール地点であった公園の木に落雷があ

り、周囲にいた5名（校長、教諭、保護者）が怪我をした。軽傷で命に別条なし。

・平成26年8月6日

高等学校のグラウンドで野球の試合中に落雷があり、マウンドに立っていた投手が意識不明の重体となり、翌日亡くなった。

上記には外での部活動、学校行事中に落雷に遭った例を示したが、この他にも多くの事例があり、学校関係以外でも海水浴場、コンサートなどのイベント、花火大会、などでの落雷事故は数多く起きている。

雷は、積乱雲の位置次第で、海面、平野、山岳など場所を選ばず落ちる。また、周囲より高いものほど落ちやすいという特徴がある。グラウンド、平地、山頂、尾根等の周囲の開けた場所にいると、積乱雲から直接人体に落雷（直撃雷）することがあり、直撃雷を受けると約8割の人が死亡する。また、落雷を受けた樹木等のそばに人がいると、その樹木等から人体へ雷が飛び移ることがある（側撃雷）。

事例のサッカーと野球については直撃雷であり、強行遠足の件については側撃雷である。比較的北海道は落雷が本州の発生件数より少ないが事故は起きている。

過去には、高校サッカー大会中の落雷事故で、落雷事故発生の危険が迫っていることの見えすべし注意義務に関する裁判事例もあることから、学校は、外での学校行事や部活動中の天候には十分留意し、落雷への対応策を考えておかなければならない。

## (2) 落雷への対応

文部科学省の事務連絡においては、再発防止に向けて、屋外活動実施責任者及び実施担当者に次のことに留意するよう指摘されている。

- ・雷及び落雷についての最新の性格な知識を習得しておくこと。生徒等に対しても同様の知識を習得させることが望ましい。
- ・屋外活動の前の時点で、天気予報の雷注意報の発表の有無を確認すること。
- ・取得した雷雲等の情報により落雷の危険があるときは、躊躇することなく屋外行事を停止し、安全な建物の中に生徒等を避難させること。
- ・避難の終了及び屋外活動の再開については、「雷ナウキャスト」等により雷雲等の動き等に関する情報を十分に収集して落雷の危険が去ったと認められる状態になったことを確認したうえで判断すること。
- ・避難方法及び避難中の事故を避ける対策をあらかじめ用意しておくこと。さらに避難した時に備えて、屋内のできる活動をあらかじめ用意しておくこと。

上記の内容については、主に教諭が留意すべきこととなっている。生徒を含めて知っておくべきことは、テレビやラジオ、インターネットなどの天気予報で、次のキーワードが出たら落雷リスクがあるということである。

- ・雷注意報……………雷警報はない
- ・上空寒気……………積乱雲が発達しやすい状況を作る
- ・湿った空気……………積乱雲を作る材料である水蒸気が大量にある
- ・大気の状態が不安定……………上空寒気、下層暖気で活発な対流で積乱雲ができやすい

天気予報において、上記のキーワードが伝えられていたら、その日は落雷があるかもという気持ちで十分留意して活動してもらいたい。

さらに、落雷に対して身を守るポイントは次のとおりである。

- ・ 早めに頑丈な建物や車の中に退避する
- ・ 木や電柱から、4 m 以上離れる。
- ・ 広いグラウンドなどで近くに逃げる場所がなく、多くの生徒が集まる場所では、直ちに退避行動をとるのは困難であることを頭に入れる。複数の退避場所を考えておき早めに逃げる。
- ・ こまめに気象情報をチェックする。
- ・ 外での活動中は、随時、空の様子を確認する
  - 真っ暗な雲が近づき、周囲が急に暗くなる。
  - 雷鳴が聞こえたり、雷光が見えたりする。
  - ヒヤッとした冷たい風が吹き出す。
  - 大粒の雨や「ひょう」が降り出す。
- これらの状況があれば、活動を中止して安全な場所へ避難する。
- ・ 行動の再開は、「雷鳴後 30 分たって次の雷鳴が聞こえない」ことを目安にして、天気アプリ等で周囲に雷雲がないことを確認してから行う。

車中や家の中で感電した事例があり、100%安全とはいえない。車中や家の中でも金属には触れないなどの注意が必要である。現在は気象庁 Web ページを含めて気象情報をスマホで簡単に見ることができる。数多くのアプリがあるので天気や雲の状況を簡単に確認できるようになっている。

雷ナウキャストは気象庁から提供されているもので、雷の激しさや雷の可能性を 1 km 格子単位で解析し、その 1 時間後 (10 分～60 分先) までの予測を行うもので、10 分毎に更新して提供されている。

上記の落雷事故の事例、天気予報からの落雷の可能性、身を守るポイントについて述べたが、これらの内容については、中学校の教科書では触れられていない。現実的に事故が発生していて、メディア等では上記の内容等が説明されていることから、1 時間程度を「落雷事故と落雷への対応」と名付けて授業に追加することを提案する。授業する場合には、落雷に関する写真、動画、天気に関するアプリ、雷ナウキャスト、などを活用し生徒に提示することが大切であり、定着に繋がるものと考える。

## 引用文献

- ・『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 理科編』(文部科学省 平成 29 年 7 月) 92 頁～98 頁
- ・『高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説 理科編 理数編』(文部科学省 平成 30 年 7 月) 154 頁～158 頁
- ・『よくわかる気象学 実技編』(気象予報士 中島俊夫 2023 年 7 月) 215 頁
- ・長野県松本深志高等学校 校長通信  
[https://www.fukashi-ed.jp/principal\\_blog/%E7%AC%AC215%E5%8F%B7%E3%80%8055%E5%B9%B4%E7%9B%AE%E3%81%AE8%E6%9C%881%E6%97%A5%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6/](https://www.fukashi-ed.jp/principal_blog/%E7%AC%AC215%E5%8F%B7%E3%80%8055%E5%B9%B4%E7%9B%AE%E3%81%AE8%E6%9C%881%E6%97%A5%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6/)
- ・『落雷事故の防止について (依頼)』(文部科学省 事務連絡 令和 7 年 4 月 11 日)
- ・『学校事故の詳細調査報告書の共有について (屋外でのサッカー部活動中における高校生の落

- 雷事故)』(文部科学省 事務連絡 令和7年6月12日)
- ・『雷 改訂増補版』(小林文明 成山堂書店 2024年11月) 45頁, 51頁, 72~75頁
  - ・『山岳気象遭難の真実』(大矢康裕 吉野 純監修 ヤマケイ新書 2021年10月) 87~89頁
  - ・東京都教育委員会 落雷から子供を守る教員のためのフローチャート  
<https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/documents/d/kyoiku/2025-05-29-093546-590>
  - ・気象庁 Web サイト 台風について  
<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/typhoon/1-3.html>
  - ・気象庁 Web サイト 気圧配置 気圧・高気圧・低気圧に関する用語  
[https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/yougo\\_hp/haichi1.html](https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/yougo_hp/haichi1.html)
  - ・気象庁 Web サイト 降水  
[https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/yougo\\_hp/kousui.html](https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/yougo_hp/kousui.html)
  - ・気象庁 Web サイト 気温に関する用語  
[https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/yougo\\_hp/kion.html](https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/yougo_hp/kion.html)
  - ・気象庁 Web サイト 前線に関する用語  
[https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/yougo\\_hp/haichi3.html](https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/yougo_hp/haichi3.html)
  - ・気象庁 Web サイト 雷による災害  
[https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/tenki\\_chuui/tenki\\_chuui\\_p4.html](https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/tenki_chuui/tenki_chuui_p4.html)
  - ・気象庁 Web サイト 雷ナウキャストとは  
<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/toppuu/thunder2-1.html>

#### 参考文献

- ・『教科書 未来へひろがるサイエンス2』(啓林館 令和3年2月)
- ・『教科書 地学基礎』(啓林館 令和3年12月)
- ・『北海道の天気と防災』(菅井貴子 北海道新聞社 2023年3月)
- ・『異常気象と温暖化がわかる』(河宮未知生 監修 技術評論社 2016年6月)
- ・『よくわかる最新気象災害の基本と仕組み』(岩槻秀明 秀和システム 2025年3月)

〈研究報告〉

# デジタル学習基盤を活用した 「個別最適な学び」における教師の支援と生徒の学び

— 中学校の社会科の事例から —

五十嵐 素子

(北海学園大学法学部教授)

布川 由利

(和歌山大学教育学部講師)

## 1. はじめに：ICTをめぐる教育の動向と研究の目的

### 1.1 デジタル学習基盤を前提とした学校教育へ

学校現場では、現学習指導要領の施行後、GIGA スクール構想のもと、急速にネットワーク環境の整備がなされ、1人1台の端末利用が実現してきた。そして令和3年1月、中教審答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」(中央教育審議会 2021)では、学校教育の基盤的なツールとしてICTは必要不可欠としつつ、全ての子供たちの可能性を引き出す観点から「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」が提起された。現在、多くの学校では、ICTを活用しつつ「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」を目指した教育実践が試みられつつある。

中央教育審議会ではこれまでのGIGA スクール構想の現状と課題を整理し、学校におけるICT環境整備についての各種検討事項の整合性に留意して論点整理と報告を行なうべく、令和6年にデジタル学習基盤特別委員会を設置している。ここでいう「デジタル学習基盤」とは、1人1台端末やクラウド環境等の情報機器・ネットワーク・ソフトウェアなどの要素で構成される一連の学習基盤であり、具体的には①児童生徒の端末、②通信ネットワーク、③周辺機器、④デジタル教科書・デジタル教材・学習支援ソフトウェア、⑤CBTシステム(MEXCBT)<sup>1)</sup>、⑥教育データ利活用、⑦情報セキュリティが含まれている(中央教育審議会初等中等教育分科会デジタル学習基盤特別委員会 2024)。そして令和6年12月の諮問においては、次期学習指導要領は「デジタル学習基盤」の活用を前提とすることが示された(中央教育審議会 2024)。上記諮問を受けて教育課程企画特別部会では、有識者検討会やデジタル学習基盤特別委員会からの報告を基に、現学習指導要領における諸課題が指摘され、次期学習指導要領のなかでどのように改善するべきかを具体的に論じている(中央教育審議会教育課程企画特別部会 2025)。

次期学習指導要領の改訂では、①「主体的・対話的で深い学び」の実装②多様性の包摂③実現可能性の確保という3つの方向性を踏まえることとなっているが、デジタル学習基盤に関する現状と課題は、特に①に関わっている。「デジタル学習基盤と『個に応じた指導』に関する現状と課題」における「課題」として、1. デジタル学習基盤が前提になっていない(地域間・学校間の格差、現学習指導要領の記述の不十分さ)、2. ICTの活用が教具的発想に留まっている(学習者の学習ツールとしての発想に立った記載が現学習指導要領にない)、3. 個別最適な学びと協働的な学びとの関係整理(学習形態のみが強調され、主体的・対話的で深い学びに繋がっていない

等)、の3点が指摘され、改正に向けた具体的な方向性と論点が出されている。そして、本稿が貢献しようとするのは、特にこの2点目の指摘に関するものである。

## 1.2 教具的発想からの転換と「学習ツール」としてのICT

ここまでで概観したように、現在指摘されている課題の一つはICTの活用が「教具的発想」に留まっているという点にある。次期学習指導要領に向けて示された改訂の方針である『論点整理』では、デジタル学習基盤を「教師の指導のツールとしての側面に加え、学習者の学習ツールとしての側面を有して」いるものと捉え直すことが提言されている(中央教育審議会教育課程企画特別部会2025, p.24)。すなわち、デジタル学習基盤は、子供にとっての「学びやすさの向上」や「合理的配慮の基盤」として機能し、多様な特性を持つ子供たちが主体的に学ぶための基礎となるものである。そこでは、デジタルキャリアかといった二項対立に陥るのではなく、デジタルも最大限活用して一人一人の豊かな学びを充実させるという視点が重要視されている。

こうした「学習者の学習ツール」としてのデジタル学習基盤の位置づけは、「個別最適な学びと協働的な学び」の概念整理とも密接に関わってくる。『論点整理』においては、次期の学習指導要領の改訂の際には、現行学習指導要領の総則に記載のある「個に応じた指導」を、「個別最適な学び」へと発展的に置き換えて整理し、その際、デジタル学習基盤の役割を踏まえつつ、以下の二つの視点をバランスよく踏まえて記載すべきとしているからだ。一つは、「教師が子供たち一人一人に応じて指導方法・指導体制を工夫していく」という「教師主語の視点」である。もう一つは、「子供自らが自己の学習を主体的に調整することを促すことにより、資質・能力の育成に資するとともに、一人一人の多様性に応じていく」という「学習者主語の視点」である(中央教育審議会教育課程企画特別部会2025, p.24)。

従来、「個に応じた指導」におけるICT活用は、前者の教師による指導の工夫の文脈で語られることが多かった。しかし、GIGAスクール構想による1人1台端末環境が整備された現在、より課題となっているのは、後者の視点、つまり生徒自身が主体的にデジタル学習基盤を使いこなす、自らの学習を調整していくことを促し、多様性に応じていくことである。

次期学習指導要領でこのような「学習者主語の視点」が明記されたとしても、教育現場においてその理念が容易に達成されるわけではない。教師がデザインして生徒に与えたデジタル学習基盤が、生徒にとって「個々の学びを促す学習ツール」として機能しているのかが、今後の授業づくりにおける重要な視点となっていくことが想定される。

通常の授業と同様、教師が想定した学習過程と、実際の生徒の取り組みとの間には乖離が生じうる。とりわけデジタル学習基盤を活用する個別学習においては、生徒の学びのプロセスが外部から見えにくく、教師がその乖離に気づき、即時的な支援を行うことが難しくなる。したがって教師には、生徒のつまづきを未然に防ぐ指示や環境を綿密に設計すると共に、個々の生徒の取り組み状況を適時把握する手立てを用意することが求められる。

## 1.3 本研究の目的

本稿では、上記の教育動向と課題意識を踏まえ、デジタル学習基盤を活用した「個別最適な学び」の授業実践を事例として取り上げ、そこにおける教師の支援と生徒の学びの様相を明らかにすることで、今後の授業づくりを考える手がかりを示していきたい。具体的には、まず、本稿で取り上げる実践において用意されたデジタル学習基盤と学習活動の設計を概観し、教師が学習者

のためにいかなる環境と支援を生み出しているかを整理する(2節)。次いで、実際の授業場面において、教師がいかに学習環境を整え、生徒がいかにデジタル学習基盤を学習ツールとして活用し、与えられた課題に対して自らの学びを作り上げているのか、その実態を詳細に記述・分析する(3節)。これらの考察を通じて、これからのデジタル環境下に求められる新たな教師の支援のあり方を検討していく(4節)。

## 2. 研究の方法と調査対象校の実践

具体的な分析に入る前に、本研究の調査・分析の概要と調査対象校の研究背景及び対象授業の実践概要を説明しておきたい。本研究は、ICTが学習者の「学習ツール」として機能し、個別学習が展開されている授業を対象としている。1人1台端末環境が整備されたとはいえ、多くの学校現場では、生徒が端末を自律的な「学習ツール」として使いこなすまでには至っていないのが実情である。教師と生徒の双方がICTを使いこなし、個別学習を成立させること自体、日々の実践の積み重ねによって可能となる難しさがある。加えて、デジタル学習基盤の整備状況やその活用方法は、学校の教育方針や教師の指導観、単元の構成によって大きく異なる。したがって、対象校の研究背景と授業の実践概要を詳細に記述しておくことは、本事例がいかなる教育的条件の下で成立しているかを示す上で重要な意義を持つと考える。

### 2.1 調査および分析の概要

本研究のフィールド調査は、2025年10月下旬の6日間にわたって実施した。調査対象は、次節で詳述するZ中学校第3学年の社会科(公民的分野)における単元授業である。

データの収集にあたっては、教室での参与観察を行うとともに、複数の固定カメラおよび手持ちカメラによるビデオ撮影(計18授業分)、ICレコーダーによる録音を実施した。また、必要に応じて教師や生徒への聞き取り調査を行ったほか、授業で使用された学習指導案、ワークシート、振り返りシート等の記述データ、およびクラウド上に残された生徒の学習ログや提出物の一部を収集した。

収集したデータの分析に際しては、ビデオデータに依拠し、授業空間における教師と生徒、生徒同士の相互行為、ならびに生徒とデジタル学習基盤との相互行為のプロセスを詳細に記述・観察する手法(ビデオ・エスノグラフィー)を用いた。特に本稿の3節では、教師の指示や周囲の生徒との会話、デジタル空間上の各種資料を主体的に活用し、自らの学びを作り上げる姿が見られた生徒Aを分析対象生徒として焦点化し、その学習過程を詳細に検討していく。

なお、調査の実施およびデータの研究利用にあたっては、対象校の長および当該教諭の許可を得ている。また、プライバシー保護の観点から画像では顔が判別できないようにし、本文中の固有名詞(自治体名、学校名、氏名、地名、公共施設の名称等)はすべて仮名としている。

### 2.2 調査対象校の研究概要

本研究の調査対象は、西日本エリアのX市にある大学附属のZ中学校である。同校は研究実践校として「主体的に学ぶ生徒の育成：個別最適な学びを支える授業づくり」を研究テーマに掲げている。ICT環境としては、全校生徒にiPadが配布されており、授業支援クラウド(ロイロノート・スクール)を用いた資料共有や課題提出が日常的に行われてきた。

同校では「個別最適な学び」を、教師の視点からの「指導の個別化」と、生徒の視点からの「学習の個性化」の両面から捉えて実践してきた(表1)。特に学習者の姿として「生徒が自分で決めることで主体性が育つ」「生徒が自分に合った学び方がわかる」といった姿を期待しており、これに向けて「学びの場の工夫」として、例えば社会科では、「自分で選択肢を作る」「選択して追究する」「自分のペースで進める」「個性を生かして表現する」「やりなおし・考え直しができる」「学びを振り返る」といった姿が見られるよう取り組んできた(表2)。

こうした学校全体の教育研究の取り組みは、まさに前節で述べた「学習ツール」としてのICT活用を基盤としながら、個別最適な学びを促そうとする試みであるといえる。

表1 個別最適な学びに関する整理 (Z中学校 2025a)

〈個別最適な学びとはどのようなものか〉	中教審答申令和3年1月を参考に作成
<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導の個別化 (教師の視点) 一定の目標を全ての児童生徒が達成することを目指し、個々の児童生徒に応じて異なる方法等で学習を進めること</li> <li>・学習の個性化 (生徒の視点) 個々の児童生徒の興味・関心等に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げること</li> </ul>	
〈個別最適な学びを意識した授業をすることで期待される生徒や教員の姿〉	本校独自に作成
<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が自分で決めることで主体性が育つ</li> <li>・生徒が自分に合った学び方がわかる</li> <li>・生徒が安心して学びに取り組める</li> <li>・教師が生徒の資質能力をみとる目を鍛えられる</li> </ul>	

表2 個別最適な学びにおける「学びの場」の工夫 (Z中学校 2025a)

(※表中の「○」印は既に校内公開授業で行なわれたもの)

学びの場の工夫	解説	国	社	数	理	音	美	家	保体	英
自分で問いを立てる	探究や学びの出発点となる疑問や仮説を生み出す			○	○				○	
自分で目標を決める	達成までの期間や内容を決める			○						
見通しを立てる	目標を達成するまでの段取りを考える									
自分で選択肢をつくる	事前にいろいろな方法や行動を考える		○							
選択して追究する	自分に適した方法を選択して追究する	○	○	○	○			○	○	
自分のペースで進める	時間や方法など自分に合ったペースで学びを進める	○	○	○	○	○	○	○	○	○
個性を活かして表現する	興味・関心にしたがって自分らしさを発揮する	○	○	○	○	○	○	○	○	○
やり直し・考え直しができる	目標に近づくように繰り返し試行錯誤する	○	○	○	○	○	○		○	○
学びを振り返る	学んだ内容や学び方を言葉で整理する	○	○						○	

## 2.3 対象授業の実践概要

### (1) ルーティーンとしての授業スタイル

本稿で分析対象とするのは、Z中学校の第3学年社会科(公民的分野)におけるW教諭の実践である。W教諭は生徒が自ら学びを進める「教えない授業」を目指し、当該生徒らが1年生の頃から試行錯誤してきた。

現在の基本的なスタイルは、教師による一斉指導を最小限に留め、クラウド上の「資料箱」に

あらかじめ格納された資料やワークシート等を生徒が自ら取り出し、教科書や資料集等を併用しながら、各自のペースで課題を進める形式である。通常、ワークシートは課題の難しさにパースティックコース、スタンダードコース、アドバンスコース（自分で課題自体を設定するコース）の3段階が用意されており、生徒自身が自分に合ったコースを選択する仕組みとなっている。また、こうした「個別学習」の場面において、一人で行うのか、他の生徒と一緒に場所で行うのかを任意に選択できる点も特徴である。さらに、毎回の授業では「振り返りシート」が用意されており、その記述と提出がルーティーン化されている。このように、本実践では生徒にコース選択や学習形態の自己決定を委ね、毎時間の振り返りを促すことで、自立した学習者としての成長を支援しているといえる。一方で、社会科という教科の特性上、すべてを個別学習で完結させることが難しい学習内容もあるため、教師による補足が必要と判断した場合には、前半を個別学習、後半を教師の解説とするなど、柔軟に授業が展開されている。

## (2) 本事例の単元計画

本稿が事例として取り上げるのは、単元「地方自治と私たち」における小単元「持続可能な社会の創り手としてX市の未来を考えよう」（全5時間）である（表3）。

表3 「地方自治と私たち」（5時間）単元計画（Z中学校 2025b）

	テーマ	主な学習内容
第1次	地方自治と地方公共団体	地方自治が住民自治と団体自治の二つの原則に基づいていることを学習する。
第2次	地方公共団体のしくみと住民参加	首長と議会の関係を図解し、互いに抑制と均衡を保ちながら市政を運営する二元代表制について学習する。
第3次	地方財政の現状と課題	市庁舎の歳入・歳出の資料を読み解き、市の財政の特色や、人口減少・高齢化といった課題と関連付けて理解する。
第4次	私が選ぶのはこれだ～多様な市民の願いをかなえる提言を選ぼう①～	5つの案を、公的な見方・考え方である「効率」と「公正」を判断基準として、市の現状を踏まえながら多面的・多角的に比較検討する。
第5次	私が選ぶのはこれだ～多様な市民の願いをかなえる提言を選ぼう②～	多様な意見があることを踏まえた上で、根拠をもって説明し協議することで意思決定する。

本単元の大きな特徴は、先行して実施された「総合的な学習の時間」の内容との連続性にある。「総合的な学習の時間」において、生徒がフィールドワークを経て作成した、X市の課題解決のための提言案を、公的な視点から改めて比較評価・検討する活動が設定されている。

具体的な単元の展開としては、まず第1・2次で地方自治の基本原則やしくみ、住民参加の在り方について理解を深め、続く第3次では、学校所在地であるX市における地方財政の現状と課題を学習する。その上で第4次では、「総合的な学習の時間」における生徒の成果物の中から、教師が選定した5つの提言案を、評価・検討の対象となる教材として位置づけている。この第4次において生徒には、既習の地方自治に関する知識や、「効率」や「公正」といった公的な見方・考え方を働かせてこれらの提言案を多角的に比較検討し、最終的に優先すべき政策を判断・決定することが求められる。そして単元の締めくくりとなる第5次では、前時で形成した個人の考えを持ち寄り、他者との協議へと発展させる。ここでは、多様な意見が存在することを前提としつ

つ、自らの判断の根拠を説明し合い、対話を通じた合意形成や最終的な意思決定へと至ることが目指されている。

### (3) デジタル学習基盤とその利用方法

本單元においても、クラウド上の「資料箱」にあらかじめ格納された資料やワークシートなどを生徒が自ら取り出し、教科書や資料集等を併用しながら、指示に沿って個々のペースで課題を進める形式がとられている。

#### ① 端末と多様な入力方法（ハードウェアとインターフェース）

利用されている端末は iPad である。当該校では、生徒個人に端末 (iPad) を用意させているが、キーボードの購入については任意としている。そのため生徒の入力方法は、画面上のソフトウェアキーボード (QWERTY 配列)、フリック入力、スタイラスペンによる手書き、指による手書き、外部物理キーボードを用いた入力の 5 通りが混在している。

実際の授業場面では、生徒が課題の内容や個人の特性 (使いやすさ) に応じて、これらの入力方法を使い分けている様子が見受けられた (図 1)。この事実は、デジタル学習基盤における「周辺機器」や「インターフェース」の選択自体が、学習者による自己の調整の一要素として機能していることを示している。



図 1 様々な入力方法 (202510243D00062)

#### ② 学習支援ソフトウェアとクラウド環境 (Google・AI 等) の利用

学習のプラットフォームとしては、授業支援クラウド「ロイロノート・スクール」(以下、ロイロノート) が用いられている。各種資料の配信、課題の作成および提出、意見の共有といった一連の学習活動は、主にこのプラットフォーム上で行われている。これに加え、生徒による情報収集や思考の補助ツールとして、Web 検索エンジン (Google) や生成 AI (Gemini, ChatGPT 等) が併用されている<sup>2)</sup>。実際の授業では、生徒が教師から配信されたワークシートや参考資料をロイロノート上で閲覧・編集・共有するだけでなく、必要に応じて関連情報を Web で検索したり、生成 AI に問いを投げかけて思考を深めたりするなど、複数のソフトウェアをスムーズに切り替えながら学習を進める様子が観察された。

このように、本單元におけるデジタル学習基盤は、ハードウェア (端末や周辺機器) と、特性の異なる複数のソフトウェア (ロイロノート、検索エンジン、生成 AI など) によって構成されており、生徒自身がそれらを組み合わせて学習を進めていくデザインとなっている。

### ③ 提示用機器と一斉指導環境（大型提示装置の活用）

教室前方には黒板の代わりにホワイトボードが設置されており、備え付けのプロジェクターを用いて、教師の端末から資料や動画などを投影できる環境が整えられている。本単元では個別学習に多くの時間を割いているものの、導入や要点の解説といった一斉指導の場面も設定されており、そこではしばしばプロジェクターが活用されている。

例えば、導入として関連動画を視聴させるために投影するほか、クラウド上で生徒と共有しているスライドや補足資料をホワイトボードに大きく映し出し、教師が直接指し示しながら解説を加える場面が観察された(図2)。このように、個人の手元端末(個別学習の場)と、教室前方のスクリーン(協働・共有の場)を相互参照することができるよう設計された物理的・情報的環境も、本実践を支えるデジタル学習基盤の重要な構成要素となっている。



図2 プロジェクターの使用(20251029\_3D\_①)

## 2.4 分析対象とする本時(第4次)の概要

本稿の検討対象とするのは、本単元の第4次「私が選ぶのはこれだ～多様な市民の願いをかなえる提言を選ぼう①～」の授業場面である。本時の目標は、5つの提言案を「効率」と「公正」の視点から多面的・多角的に分析し、客観的な根拠をもって自分がどの提言案を選ぶのかを決定することに置かれている。本時では、前時までに学んだ内容を生かし、次時の意見交換に向けて、生徒一人ひとりが自ら提言を比較検討し、自己決定を行うための個別学習が展開された。ここには、多様な情報や知識を関連付けて整理し、自ら問題を見出して解決するという意味での「深い学び」が求められているといえる。本時を分析対象として選定した理由は、まさにこの「デジタル学習基盤に支えられた個別学習における深い学び」の様相を明確に捉えうる点にある。

なお、教室前方のホワイトボードの左側には、「テーマ」として「私が選ぶのはこれだ!～多様な市民の願いを叶える提言をえらぼう～」と「めあて」として「持続可能なX市の未来を創るために、最も優先すべき案はどれだろう?」が書かれており(図5)、「授業の流れ」として「①説明(10分)」「②分析シートに記入(10分)」「③優先すべき案を決める(理由・根拠)(20分)」「④自己決定(1回目)」が書かれていた(図2)。しかし、後述するように、実際の授業においては、この提示された「授業の流れ」よりも詳細に学習活動が分けられて展開していくことになる。

## 3. 学習活動の詳細と「学習者主語」の視点からの分析

以下では、実際の授業の進行に従って、教師と生徒による学習活動の詳細を具体的に記述していく。その上で、本時のねらいに照らしつつ、「学習者主語の視点」から、生徒がいかなる学びの過程を作り上げていたのか、また教師の働きかけやデジタル学習基盤の設計が、そこにいかに機能していたのかを検討する。分析に際しては、前述の通り、生徒と教師、生徒と生徒の相互行為、および生徒とデジタル学習基盤との相互行為のプロセスを詳細に記述・観察し、特に生徒Aを対象として分析を進めていく。

### 3.1 全体指導による導入：前提知識の確認とツールとしての共有

#### (1) 関連資料の提示と説明による前提知識の確認

授業冒頭の全体指導において、教師が行った「説明」の目的は多岐にわたる。まず導入として、直近の時事問題（トランプ大統領の来日）を取り上げ、生徒の政治的関心を喚起した。続いて、本時の「テーマ」および「めあて」に向かうための準備として、前時までに学習した内容のうち、本時で必須となる前提知識の確認を図った。

教師は、朝の段階でロイロノートを通じて送信しておいた資料（「社会科通信」）を手元の端末で開くよう指示し、同時にホワイトボード上にも同資料群を投影した（図3、上段左から時計回りに「租税体系」「地方公共団体の民生費：社会福祉や社会保障など、住民の福祉向上のために使われる費用全般」「令和7年度の（X市の）予算の全体像（歳入・歳出・市債）」「財政を圧迫する3つの課題」「授業振り返りシート」）。そして、これら個々の資料について順に解説を加えた。



図3 「社会科通信」内の資料

具体的には、まず「租税体系」を参照し、市町村と都道府県で税の体系が異なる点に触れつつ、詳細は別の機会に扱おうと述べて「地方公共団体の民生費」の資料へ切り替えた。これが市町村における民生費の用途を示す資料であることを説明した上で、「予算の全体像」の資料へと移行した。ここで歳入・歳出の円グラフを指し示し、X市の財政状況は自主財源よりも依存財源の割合が高いという事実を提示し「今後財源がどうなっていくのか」と問いかけながら、次の「財政を圧迫する3つの課題」の資料に切り替えた。

「財政を圧迫する3つの課題」の資料では、まず一つ目の課題として「人口減少」を取り上げた。折れ線グラフを参照しつつ、1960年と2050年の人口規模がほぼ同等になると説明した。次に、二つ目の課題である「少子高齢化」について、1960年から2050年にかけての推移を示す棒グラフを指し示した。子ども、現役世代、高齢者の構成比が大きく変化していることに着目させ、1960年時点では少数であった高齢者が、2050年には大きな割合を占めるようになるという構造的な変化を解説した。

さらに、こうした事象がもたらす問題性について、前時にある生徒が記述した「授業振り返りシート」（図4）をホワイトボードに提示し、読むよう指示した。シートに書かれた「高齢者が増加して民生費も増えること」、「税金が減っていく中、使う必要なお金も増えていること」、「高齢者の福祉と現役世代への福祉のバランスをどう良くしていくのか」という具体的な論点を確認し、これらの視点を意識しながら本時の課題に取り組むよう求めた。

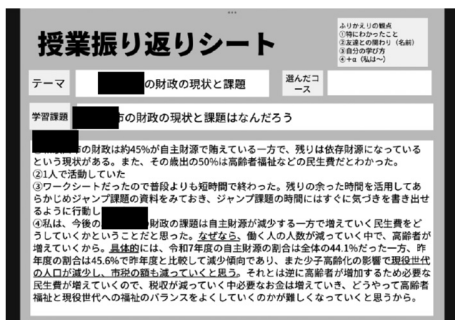


図4 授業振り返りシート

最後に、振り返りシートの記述を指でなぞりながら結論の後に理由を述べる際の接続表現（「なぜなら」とか「具体的には」など）に着目させ、このよ

うな語を使えるようになったほうが良いと述べ、論理的な記述に向けた支援を行った。

### 〈学習者主語の視点からの考察〉

このような導入における教師の説明は、既習事項のなかでも、本時の個別学習で利用するのが望ましい教材を確認し、本時で利用しやすいツールとして前景化・可視化させる働きがあったといえる。生徒の学びを促す効果は以下の二点に整理できる。

一つ目は、生徒が本時の「めあて」である「持続可能な X 市を実現する」ための提言を選択する上で不可欠な前提知識を、視覚的な資料群として、また内容上つながりを持ったセットとして利用できる状態に置いた点である。ホワイトボード上の資料と説明を通じて、生徒はまず「租税の体系」という視点から全体像を俯瞰し、次に「X 市の民生費の使途」へと焦点を絞っていく。さらにその使途の現状を踏まえて「少子高齢化による人口動態の変化」と結びつけることで、「税金が減少する一方で、必要な福祉支出（民生費）が増加していく」という、市の財政を圧迫する構造的な課題を論理的に理解することができた。提示された「授業振り返りシート」には、この「財源（税）→使途（福祉）→課題（少子高齢化による財政圧迫）」という一連の論理的帰結が明文化されてまとめられており（図4）、生徒がこれからの X 市を持続可能にする施策を選ぶにあたり、考慮すべき論点として主体的に活用できる状態で提供されていた。

二つ目は、提示された「授業振り返りシート」の文章が、生徒が自らの論理的な記述を構成するための「文章のモデル」として参照可能な状態で提示されたことである。本時の個別学習において、生徒はワークシートを自らの文章で埋めていくことが求められる。教師が「なぜなら」「具体的には」といった表現を意図的に取り上げたことで、生徒は文章を書く際に、このシートの論理展開を枠組みとして自ら参照し、活用するよう促されたといえる。

### (2) 本時のめあて、テーマ、サブめあての意味と、具体的な作業の説明

次に教師は、クラウド内の「資料箱」にアクセスするよう指示し、「めあて」が書かれたスライドを投影して、「持続可能な X 市の未来を創るために、最も優先すべき案はどれだろう？」を読み上げた。続いてホワイトボードに書かれた「テーマ」の文章（図5）を指した後、「みんながやってくれた総合のアイデアを使います」と述べ、スライド上の5つの提言案を指し示した（図6）。さらに、テーマにある「私」とはみんな＝生徒自身であることを確認し、「提言」とは「X 市に、

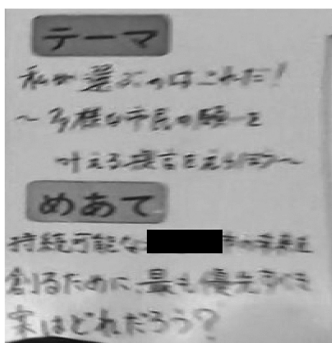


図5 テーマとめあて  
(20251029132854\_3D\_WB)

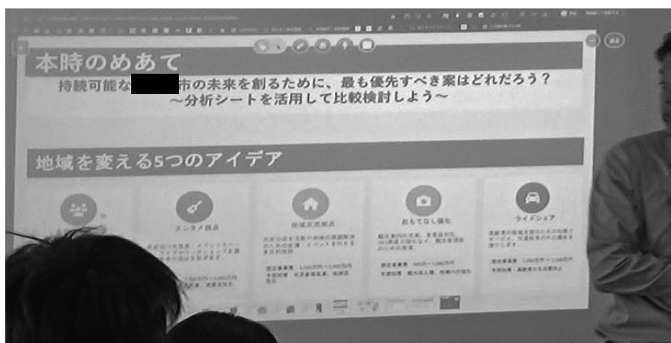


図6 めあてと提言案 (20251029132854\_3D\_WB)

こんなことをしてほしい」という内容であると、かみ砕いて説明した。市外からの通学生も含め「X市の住民として考えてください」と述べ、当事者の立場から政策の一つを選択するよう促した。

この後、5つの提言案（提言1「福祉分野：多世代交流・いこいの広場」、提言2「空き家分野の活用（エンタメ拠点）」、提言3「空き家分野の活用（地域交流拠点）」、提言4「観光分野（おもてなし）」、提言5「ライドシェア」）について順に資料を見ながら紹介した。

特に「提言5ライドシェア」については、別途資料を見せながら補足説明を加えた。海外の事例や無許可タクシー（いわゆる「白タク」と）の違いに触れつつ、日本版ライドシェアはタクシー会社の管理下で一般ドライバーが稼働する仕組みであることを丁寧に解説した。

続いて比較検討のための分析シートを表示し（図7）、シートの記入枠を指で囲んだり（図7黒線）、個々の提言の枠を指したりしながら、「公正（誰を幸せ）」と「効率（費用と効果）」の二つの視点で、各提言の課題解決への効果を分析するよう指示した。さらに、これらの抽象的な視点だけで考えるのが難しい生徒への手立てとして、『効率』と『公正』の視点」という補助資料を提示した（図8）。ここには効率と公正に関する具体的な視点が各6項目（計12項目）記載されており、これらを提言に当てはめて考えるよう促した。その上で、この作業を14時までに行うという時間的な区切りを設定した。

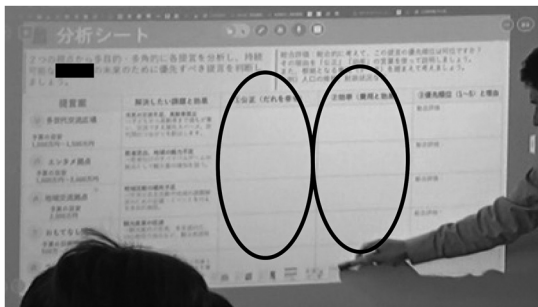


図7 分析シート  
(20251029132854\_3D\_WB)

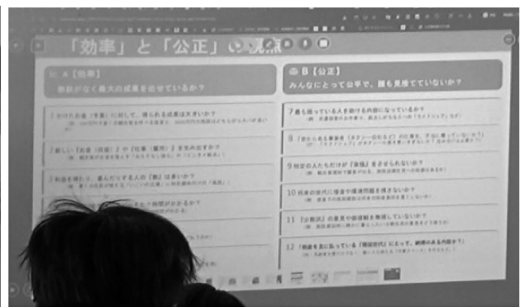


図8 「効率」と「公正」の視点  
(20251029132854\_3D\_WB)

最後に学習活動の最終的なゴールと手順について述べた。生徒は10分間で分析シートを記入すること、時間があれば提言の1位から5位までの優先順位を決め、その理由まで書くことが望ましい旨を、分析シートを再度表示し、場所を示しながら述べた（図9の黒枠）。

さらに論証のための「ピラミッドチャート」を表示し（図10）、場所を示しながら、「主張（選んだ提言）」、「理由」、「根拠（事実）」を書くよう説明した。作業完了後は、ホワイトボードの各提言案の該当箇所に自分のネームプレートを貼って意思表示を行うよう指示した。また、教

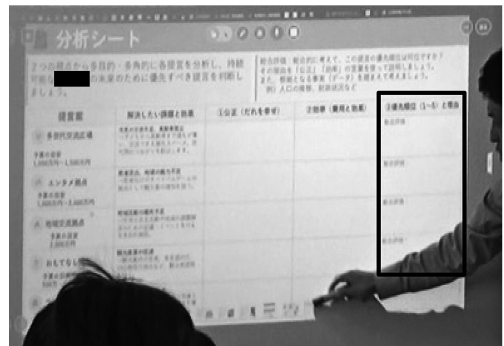


図9 分析シート  
(20251029132854\_3D\_WB)

師は次回このチャートと各提言案を選んだ生徒一覧を使って討論を行うことを予告した。

### 〈学習者主語の視点からの考察〉

ここでの教師の説明と指示は、生徒が自らの学びを方向付け、深めていくための支援として機能していた。その効果は以下の四点に整理できる。

一つ目は、生徒自身が学習課題を「自分事」にし、当事者意識を持つことができた点である。先行して行われた「総合的な学習の時間」における生徒らのアイデアが教材として採用されたこと、さらに市外からの通学者を含めた全員に「住民」という立場が与えられたことで、生徒は提言の選定を単なる学習対象としてではなく、自らの生活に関わる切実な問題の解決として捉え直すことができた。これにより、生徒は与えられた課題をこなす受動的な学習者から、意思決定を行う社会の一員へと主体的に視点を転換させて課題に向かうことが可能となった。

二つ目は、生徒が自ら判断を下すための必要な知識の土台を持たせたことである。すべての生徒が、この5つの提言案の作成に関わったわけではない。そこで生じる知識差に対応し、詳細な資料や解説（特に「ライドシェア」等について）が提供されたと考えられる。さらに、抽象度の高い「効率」と「公正」という概念に対し、具体的な12のチェックリスト（視点）が与えられた。これらの判断材料と視点を「評価の尺度」として自ら使いこなすことで、生徒は主観や印象に頼らず、公民的な見方・考え方を働かせた多角的な分析を主体的に進めることができる状態になった。

三つ目は、分析シートやチャートを、個別学習における「進行をガイドするツール」として活用できるようにした点である。教師が言葉だけでなく、シートの該当箇所を直接指し示しながら説明したことで、生徒は「どの枠に」「どの資料を用いて」「何を書き込み」「次にどこへ進むのか」という作業の進行の展開を視覚的に理解した。これにより、生徒は用意されたシートを単なる記入用紙としてではなく、自らの思考と作業プロセスを方向付けるガイドとして主体的に活用し、スムーズに個別学習に取り組むことができるようになったのである。

四つ目は、学習活動の展開を把握させたことによる、進捗管理の促しである。「分析シート」を用いた比較検討から「ピラミッドチャート」による論証の構築、そして「ホワイトボードのネームプレート」による意思表示という一連の流れが、教師の説明によって、物理的・情報的環境と結びつけられて明確に提示された。これにより、生徒は、限られた時間のなかで自らの進捗を客観的に確認することができ、見通しを持って自らの学習の進行を調整しながら作業に取り組むことが可能となったと考える。

## 3.2 個別学習：分析シートを用いた提言の比較検討

教師は指示の理解を確認した後、20分間の作業時間を設定し、座席の移動を自由に行うことを許可した。以下では、前述の全体指導を受けた生徒が、いかにしてデジタル基盤や他の生徒、そして教師をリソースとして活用しながら、自らの学びの過程を作り上げたのかについて、生徒Aを中心として詳細に検討していく。

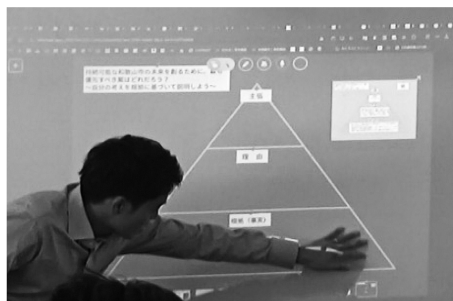


図10 ピラミッドシート  
(20251029132854\_3D\_WB)

〈デジタル学習基盤と他者をリソースとした学習過程〉

全体指導の間、生徒らは手元の端末で各種シートを開いており、作業開始の指示と同時に、席を移動するなどした後、スムーズに「分析シート」への記入を開始した。学習形態は個人の裁量に委ねられており、一人で取り組む者、二、三人で協働する者など多様に分かれた。生徒 A は、隣接する生徒 B・C とは独立し、分析シートを書き込む個別学習を進めていた（図 11、図 12）。

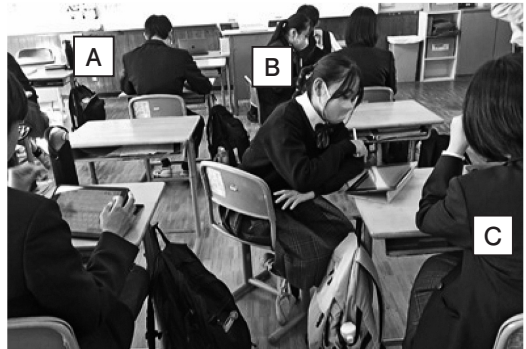


図 11 生徒 A・B・C  
(20251029\_3D\_②)

作業開始から三分ほど経過したあと、教師は「効率と公正の視点」の資料をうまく使うよう指示した。当初、一人でシートの記入を進めていた生徒 A は、この指示の後、近くの生徒 B・C が当該資料を探しているらしい様子に気づくと、自らクラウド内から対象の資料を引き出し、画面を見せて所在を共有した。これを機に、生徒 A 自身も分析シートを記述する際に、主体的に資料を参照するようになった。また、B と C が個々の提言内容や独自のアイデアについて対話しながら検討を進める傍らで、A は自身の記入の手を一時的に止め、施設の維持費やコストに関する自らの見解を述べるなど、彼らの対話に介入する様子が見られた。



図 12 A が書き込んでいる分析シートの画面  
(20251029\_3D\_②)

例えば、三人の間で「多世代交流広場」（提言 1）をめぐる、実際の「岸辺公園」等を具体例として挙げながら、維持費用とコストパフォーマンスについて議論がなされた。その後、A は再び個別学習に戻り、「エンタメ拠点（サバイバルゲーム施設等）」（提言 2）について「公正の視点」から思考をしていた。B と C が同施設について会話を始めたところ、A が介入し、「近隣住民からどう思われるかな、結構音がするし」と騒音の懸念を指摘した。これに対し B が「防音設備が必要」と対策を提示すると、A は「ああ〜」と納得の声を上げ、この発言内容を「効率（費用と効果）」のシートに書き込んだ（表 4）。

さらにその後、B が「多世代交流広場」に関して「お店とかないのかな？ ないんなら、効率悪くない？」と言いながら提言内容が書かれた資料を確認したり、「（人が）来るのはいいけど（休憩所とか）管理はどうするんですか。暑い日とか。」「誰が管理するの」と C と議論をしていた。

これに対して個別学習を継続していた A が「税金やでそれも。公園は税金」と再び介入した。こうしたやりとりを経た後、A は「多世代交流広場」を選ぶ理由として、「子供から大人まで利用することができて、その利用する場所に店などを置くとみんなお店のものを買ってくれそうだから」と書き込んでいる（表 4）。

表4 作業終了時のAの分析シートの記述内容

(②, ③の列の薄グレー部分は、他生徒との会話が活用された記述箇所を示している。「提言案」と「解決したい課題と効果」の枠内の記述は、あらかじめシートに記載されている)

分析シート		総合評価: 総合的に考えて、この提言の優先順位は几位ですか? その理由を「公正」「効率」の言葉を使って説明しましょう。また、根拠となる事実(データ)を踏まえて考えましょう。例) 人口の推移、財政状況など		
提言案	解決したい課題と効果	①公正 (だれを幸せ)	②効率 (費用と効果)	③優先順位 (1~5) と理由
<b>多世代交流広場</b> 予算の目安 1,000万円~1,500万円	市民の交流不足、高齢者孤立 →子どもから高齢者まで誰もが集い、交流できる屋外スペース。世代間のつながりを創出します。	高齢者から子供までみんな	人が集まる。公園なので一時的な利益だけにならない。周辺に店を置くと利用者が出てくる。	総合評価: 1 子供から大人まで利用することができ、その利用する場所に店を置くときみんなお店のものを買ってくれそうだから。
<b>エンタメ拠点</b> 予算の目安 1,000万円~2,000万円	若者流出、地域の魅力不足 →若者向けのサバイバルゲームの拠点として観光客の増加を狙う。	若者、新しい物が好きな人、サバゲー好き。	レンタル費や利用料で儲かることができる。 防音設備が必要で近隣住民に迷惑をかけるかもしれない。	総合評価: 2 物珍しさからたくさんの方が訪れる。流行り廃りがあるかもしれない。
<b>地域交流拠点</b> 予算の目安 2,000万円	地域活動の場所不足 →市民の自主活動や地域の課題解決のための会議・イベントを行える多目的施設。	子供、大人。自治体の役員さんなど。	交流する場なので何か大きなプロジェクトができるかもしれない。	総合評価: 5 イベントを行っても人が来てくれるか分からないから。
<b>おもてなし強化</b> 予算の目安 500万~1,000万円	観光産業の低迷 →観光案内の充実、多言語対応、SNS発信力強化など、観光客誘致を狙う。	外人、観光客。	外国人は案内に従って来るため、外国人の幸福度が上がる。	総合評価: 4 新型コロナウイルスなどのことがあると外国人観光客が減るかもしれない。
<b>ライドシェア</b> 予算の目安 2,000万円~3,000万円	高齢者の移動手段不足 →高齢者の移動支援のための相乗りサービス。交通弱者の外出機会を増やします。	車を運転できない人。高齢者の方々。	タクシー会社の利益が落ちてしまうかもしれない。	総合評価: ③ 交通弱者の数になる。しかし、タクシー会社の利益が減ってしまえば経済の悪化につながるかもしれない。

残り時間が迫る中、教師が「あと2分だけど、どう?」と全体に問いかけると、彼らの間で以下のような議論が始まった。

- A 「ほく、多世代交流広場(提言1)にしました」
- B 「私、地域交流拠点(提言3)にしました」
- C 「あー私も」
- A 「え?まじ?俺それいま5位やで」
- B 「え、なんで?」
- C 「なんで?」
- A 「え、まじっすか。まじっすか。えー。」
- B 「確かに多世代交流広場もいいけど、確証が持てない。その、確実に収益が出るのか」
- A 「まあまあまあ確かにな?」
- B 「地域交流拠点は、塾とか行っていない人とか、子どもで公園ばかり行っているとかの子は使う人がいるから収益は確実にあると思う。そしたら、効率はいいと思う」
- A 「そうします」
- B 「は!?バクらないで」
- A ((分析シートに加筆しようとしてやめて))「でもさ、それさあ、あの維持するのが大変ちゃう?」

B 「どうということ」

A 「無料で入れるから。有料なの？」

B ((タブレットで関係する資料をじっと見る))

議論は続いてしたが、教師が壇上で「2分延長します」と述べ、「一番右に1～5の優先順位をつけてください」と述べた。その後、AとBが「地域交流拠点は無料ですか」と机間巡視している教師を呼び止めて質問し、教師が「いちおう、無料」と答えるとAがBに「利益でないじゃん」と指摘した。この後もA～Cは議論を続け、別の提案についても話をしていたが、教師が「途中でいいので、自分の席にもどってください」といったため元の席の配置に戻っていった。

### 〈学習者主語の視点からの考察〉

この場面における教師の机間巡視や声掛けは、結果として、生徒が、デジタル学習基盤や他者といった環境を「自らの学習を進めるためのリソース」として活用する契機として機能していた。その特徴は以下の三点で整理できる。

一つ目は、教師の声掛けを契機とした、協働的な関係性の構築や対話の開始である。生徒Aは当初、自身の分析シートへの記入に集中していたが、教師の「資料をうまく使ってください」という全体指示を受けてクラウド上の当該資料へアクセスした。さらにすぐ隣の他の生徒(B・C)にもその所在を教えることで、互いの関与を生み出し、その後の協働的な関係性の前提づくりに成功している。また、教師の進捗確認を「対話の契機」として利用してもいた。教師が「あと2分だけど、どう？」と問いかけた際、Aはシートの記入をまだ終えてはいなかった。教師に向けて「まだ終わっていない」と答えても良かったが、Aはそうしなかった。シートが書けたかではなく、提言の選択が決まったかどうかという観点から、自分が1位に選んだ提言を周囲の生徒に報告している。この発言を契機として、互いの選択の違いが明らかになり、「収益の確実性」や「維持費の問題」といった「効率」の視点に基づく高度な議論へと展開していった。ここには、他者との対話が、学びの資源を渡し合うものとして位置付けられ、教師の指示や問いかけが単なるそれとしてだけでなく、個別学習を中断し他者と関わることで、そうした学びの資源を得る契機として利用されていることが見て取れる。

二つ目は、オンデマンドの情報源としての教師の主體的な利用である。生徒Aは、総合的な学習の時間の担当でもあり原案の背景を知る教師が机間巡視で通りかかった際に呼び止めて質問し、自らの判断に必要な情報を補足させた。資料を基に個人作業を進める際、情報が不足すると作業が行き詰まることがある。本事例における「地域交流拠点は無料か否か」という疑問がそれに当たる。ここには、教師を「教えてくれる人」として待つのではなく、自らの個別学習を円滑に進めるための資源として使いこなす学習者の姿がある。

三つ目は、他者の会話内容を「学びの資源」として取捨選択し、自身の考えを深めようとする姿である。生徒Aの個別学習においては、同級生との直接的な議論はもちろん、直接言葉を交わしていない場面であっても、他者の話している内容を自身の考えを深めるための資源としている様子がみられた。例えば、自身が提示したエンタメ施設の騒音問題に対してBが「防音設備」という解決策を出したことを受け、即座にシートに組み込んで思考を構成し直している。また、多世代交流広場に関するBとCの議論から「収益化」のアイデアを拾い上げ、自らの選択理由として統合している。さらに特筆すべきは、他者の意見(Bが地域交流拠点を推す理由)に一旦は同

調してシートに書き込もうとしながらも、自ら「維持費」という疑問を持ち、事実確認を行うことで安易な同調を回避している点である。ここに、用意されたデジタル環境や他者の存在を最大限に活用し、批判的思考を働かせながら深い学びへと向かう、自立した学習者の姿を見出すことができる。

### 3.3 班における意見交換と分析シートの提出・共有

続いて教師は、あらかじめ座席と構成メンバーが指定されている「班」ごとに、各自が「効率」と「公正」の視点から分析した内容を周囲と共有する時間を3分間設けた。その際、記述が完了していない生徒に対しては、他者の意見を参考にし、自身のシートに加筆するよう促した。

生徒Aは、同じ班のC、Dと議論を行うことになった(図13)。Aはシートへの記入を終えた段階で、優先順位を1位:多世代交流広場、2位:エンタメ拠点、3位:ライドシェア、4位:おもてなし強化、5位:地域交流拠点としていた(表4)。3人は、すでに一定程度書き込まれた自らの分析シートを参照し、適宜加筆を行いながら議論を展開した。

まず、Cが「多世代交流広場(提言1)」について「人が来る量にもよる。『桜森の丘公園』みたいならいいと思うけど、人が少ない場所では維持費用が大変ではないか」と懸念を示した。これに対してAは、「冷暖房費もかからず、設備投資も遊具と芝刈り程度で済む」と屋外施設のコストパフォーマンスの良さを主張した。さらにCから「飲食の要望などが出ると維持費が増えるのでは」と反論が出ると、Aは「土地を貸したり、キッチンカーなどを呼んだりして、賃料や出店料を取ればいい」と「市民ホール前」の事例を交えて提案し、CやDもその収益化の仕組みに納得する様子を見せた。

次に優先順位の話へ移り、Dが「高齢者の移動手段確保」という「公正」の視点からライドシェアを上位に挙げた。これに対しAは「タクシー会社の利益が落ちる」「プロではなく個人にお金が出る」と事業者側の「公正」の視点から介入し、さらに「見分けがつかず犯罪が増えるかもしれない」と治安リスクへの懸念も口にした。(なお、AとDは共にライドシェアを3位に位置付けていた)。また、Aが2位に「エンタメ拠点(提言2)」を挙げ、「サバゲーしたい」と理由を述べると班内で笑いが起きた。「おもてなし強化(提言4)」については、Aが「コロナや戦争が起きると(外国人観光客が)来てくれなくなる」と外部要因によるリスクを指摘すると、Cも「だから迷っている」と同意し、観光業特有の問題を共有した。さらにDが高齢者を支える若者の税負担について触れ、「外国人を呼び込んで経済を回し、減税してほしい」と世代間の「公正」の視点から願望を語る一幕もあった。

この後、教師から分析シートを無記名でクラウドに提出するよう指示が出されたため、対面での議論は一旦中断した。生徒らは自分のシートを入れたあと、そのまま手元の端末で他の生徒の分析シート群を次々に閲覧し始めた。Aは「なんか多世代多いな」とつぶやき、Cが「優先順位難しくない?なんか全部メリットとデメリット一個ずつぐらいある」と応じるなど、傾向を踏まえた対話が交わされていた。

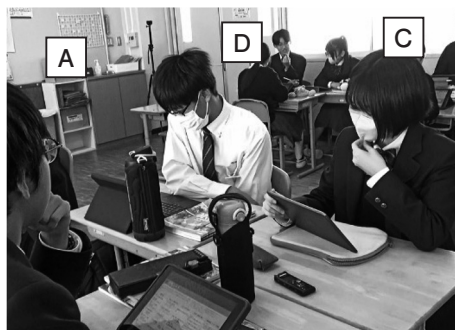


図13 班の議論(20251029\_3D\_②)

### 〈学習者主語の視点からの考察〉

この意見交換と分析シートの共有の場面において、生徒は対面環境とデジタル学習環境を資源としながら、その特性を生かして自分の提案選択とその理由を深めるよう自らの学びを作っていた。その特徴は以下の二点に整理できる。

第一に、生徒が「班」の対話のなかで自分の考えを再構築・拡張していた点である。例えばAは、「多世代交流広場」の維持費を懸念する意見に対し、屋外ゆえのコストの低さや、キッチンカー等への土地貸出による収益化のアイデアを用いて即興的に反論している。Aの分析シートには、この「維持費の少なさ」に関する記述はどこにも存在していない(表4)。だがAは、事前の個別学習におけるB、Cとのやり取りで、「地域交流拠点」の「維持費の多さ」をBに指摘しており(3.1の会話参照)、この際の論点を自分の支持する「多世代交流広場」の「維持費の少なさ」というメリットとして反転させ応用したと考えられる。つまり対話の過程で、直前に獲得した論理を再構築して自説の説得性を高めていたのである。同様に、ライドシェアの治安リスクに関する指摘も分析シート(表4)には記載されていない新たな論点であった。このように、生徒は事前に分析シートに書いた内容をもとに意見を言うだけでなく、他者との議論のなかで、書かれていない自分の考えを再構築したり拡張したりしていたのである。

第二に、クラウド上での分析シートの共有において、生徒たちは他者の意見を、「自分の意見の相対的な位置づけを確認する」ために利用していた。AとCの「多世代が多い」「全部にメリットとデメリットがある」という発言からわかるように、生徒らは他者の多様な意見を俯瞰的に探索し、その「優先順位」の傾向や理由の内容を分析・把握し、自分自身の提案や判断理由を再検討する機会として活用していた。

### 3.4 ピラミッドチャートの使い方の説明と論証の構築過程

#### (1) ピラミッドチャートの使い方の説明

分析シートの共有時間が終了すると、教師は時間の都合上、次の作業段階に進むことを告げた。生徒に教室前方を見るよう促し、ホワイトボードに「ピラミッドチャート」のシートのフォーマットを投影しながら説明を始めた(図14)。

教師はまず、自分が選んだ提言を、最上段の「主張」欄に書くよう指示した。続いて「提言5(ライドシェア)」を例に挙げ、「理由」の書き方のモデルとして「持続可能な社会とは、経済効率だけでなく誰もが安心して暮らせる社会であると思う。この提言は公正の視点、特に視点7などを最も満たしていると思う」という文例を示した。

さらに最下段の「根拠(事実)」の書き方について、教師は社会科の授業で「データを持ってこい」「憶測だけで書いてはいけない」と指導してきたことに触れつつ、先行する「総合的な学習の時間」で、生徒自身が市民にインタビューした結果も「事実」として使用できると説明した。また、前時に配布した単元資料(X市の人口減少や高齢化、財政の用途を示すデータなど)を根拠として用いることや、「他の提言はこうだから」と他案と比較した上での理由を記述しても構わないと補足し、チャートの完成を促した。

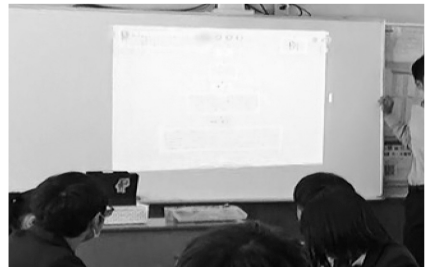


図14 ピラミッドチャートの説明  
(20251029\_3D\_②)

最後に、このチャートが完成した生徒から順に、ホワイトボード上の各提言の掲示場所に自身のネームプレートを貼って意思表示を行うこと、そして次回の授業ではこのチャートを用いて討論を行うことを改めて予告し、生徒を個別学習へと移行させた。

## (2) ピラミッドチャートを用いた論証の構築過程

ピラミッドチャートの作成に取り掛かる際、Cが「難しすぎる。ちょっと何考えてるかも分からなくなってきた」と作業の行き詰まりを口にすると、Aは「答え無いんだし、いいやん」「答え無いほうが楽しい」とポジティブに応答した。これに対しCは「答えが無いから重いんよ」「考える範囲広いやん」と、オープンエンドな課題に対する負担感を語った。

Aはピラミッドチャートの「主張」欄に「多世代交流広場」と記入し、「理由」の記述に着手した。「公園は幅広い世代の人たちが」と書き始めたところで手を止め、自分の「分析シート」(表4)を再確認してから、「幅広い世代の人たちが公園を使うため、公正の面で考えると使った費用が住民に還元できるのかなと思った。効率の面で考えると長期的に公園は使えるため少しずつの利益だけど最後は黒字になるのかなと思ったから」と、二つの視点を統合して記述した。さらに「根拠(事実)」の欄には、「この前、桜森の丘公園に行ったら人が多過ぎて駐車場が止められなかった。そして家族連れが多く、僕の弟のように遊び疲れた子供達は店で何か買って帰るから。」と、自らの実生活における体験のデータを論拠として記述した(図15)。

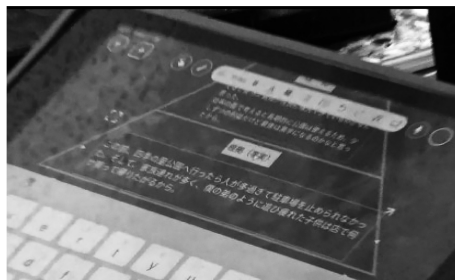


図15 Aのピラミッドチャートの作成  
(20251029\_3D\_②)

予定時間が経過したところで、教師が壇上から「あともう時間ないんで。ピラミッドチャートも、もう途中やと思うんやけど提出してください」と全体に指示を出した。「無記名で共有するから、他の人がどんな書きしてるかちょっと見といて」と促すと、生徒たちは「めっちゃ早い」「全然書いてない」と焦りつつも作業を区切り、クラウドへの提出の作業を行った。なお、この後には、生徒らが、自分が選んだ提言案に従い、ホワイトボードに区切られた各提言案の場所に、自分の名札を置いて授業は終了した。

## 〈学習者主語の視点からの考察〉

ここでは、「分析シート」から「ピラミッドチャート」へと新しいツールへの移行がなされており、さらに「ピラミッドチャート」の使い方の説明において、論証モデルとしての文例の提示や、根拠となりうる材料の提示がなされていた。このことは、以下の二つの点で生徒の学習の支援となっていたといえる。

一つは、他者との意見交換やクラウド上でのシート共有を経た直後に「ピラミッドチャート」という新たなツールが提示されたことで、生徒は自らの思考を「比較検討」から「論証」へと主体的に転換させることができた点である。分析シートが複数の提言を並列して比較検討するためのツールであったのに対し、ここでのピラミッドチャートは自己の主張を頂点とし、それを理由と客観的データで支える論証のためのツールとなっている。生徒は、意見交換やクラウド上で他者の多様な意見に触れ、自らの考えが相対化された直後にこのチャートに向かうことで、「自分と

異なる意見を持つ他者」を強く意識し、「自らの主張は他者を納得させる客観的な事実に基づいているか」という視点を自ら獲得していくことになる。ここでの生徒は、協働的な学びによる気づきを、再び個別最適な学び（ここでは自分の主張の論証の構築）へと向かわせ、次時の「討論」という実践的な課題に向かう準備を促すことになったといえる。

二つ目は、本時後半における教師の説明や指示が、生徒がより説得力のある主張を構築するための手立てとなっていた点である。「理由の書き方モデル」や「根拠となるデータの所在」が明示されたことは、生徒にとって、分析シートの記述内容をピラミッドチャートの構造に合わせて再編集するための強力なガイドラインとなっていた。というのは、ピラミッドチャートの「理由」枠は大きく、分析シート（表4）の記述を単に書き写すだけでは成立しないし、分析シートには「根拠（事実）」に該当するものはないからだ。

実際に生徒Aの学習過程を見ると、彼は教師のモデルを参照しつつも、自身の分析シートを再確認し、「効率」と「公正」の両面の視点を自らつなぎ合わせ、新たな「理由」の文章を主体的に構成していた。さらに、分析シートにはなかった「根拠（事実）」の記述という新しい課題に対しても、Aは先の班活動でCが成功例として引き合いに出した『桜森の丘公園』の実例や、自らの実生活における経験を組み合わせ、独自の根拠としてチャートに統合していた。

ここには、デジタル上に用意されたチャートという枠組みや、それについての教師の指示を、自ら学びの過程を作り上げるために使いこなす学習者の姿があらわれている。

#### 4. おわりに：デジタル学習基盤における新たな教師の支援と生徒の学び

本研究の目的は、次期学習指導要領を見据えた「デジタル学習基盤」の活用において、従来の「教具的発想（教師主語）」から脱却し、ICTを「学習者の学習ツール（学習者主語）」として捉え直す授業実践のあり方を、実際の学習過程の詳細な分析を通じて明らかにすることであった。

中学校社会科（公民的分野）における「個別最適な学び」を志向した授業場면을対象とし、抽出生徒の生徒Aを中心とした相互行為の分析を行った結果、以下の知見が得られた。

第一に、デジタル学習基盤が「学習者主語のツール」として機能する環境下において、生徒は自らの学習過程を作り上げている実態が確認された。本事例における生徒は、クラウド上に配置された資料群や分析シートといったデジタルリソースにとどまらず、物理的な対面環境における他者（同級生）との対話、さらには机間巡視を行う教師の存在をも、自らの思考を深め、論理を構築するための「学びの資源」として主体的に使いこなしていた。他者の意見を取り込みつつも安易な同調を避け、クラウド上に共有されたクラス全体の意見と照らし合わせながら自らの意見を客観視していく姿は、自立した学習者の姿といえる。さらに、こうした他者やデータとの対話を通じて自らの主張を再構築していく過程は、社会科において求められる「多面的・多角的な考察」を体現するものであり、「効率」と「公正」という公民的な見方・考え方を深く働かせるプロセスそのものであった。

第二に、こうした学びの過程は、教師の緻密な学習環境のデザインによって支えられていることが明らかになった。対象授業において教師は、ただクラウド上に資料やツールを与え、活動を設定し、進捗を管理しているだけではなかった。以下四点述べる。

1) 教師は資料を単なる情報の羅列としてではなく、作業の前提となる相互参照的な関係を持った構造として提示していた。導入において「租税・民生費・少子高齢化」という別々のデー

タを結びつけ、市の財政圧迫という構造的課題（論点）として生徒に手渡していた。

2) 個別学習の段階に応じて、生徒が行うべき認知的作業を支える「ツール」を適切にデザインし、移行させていた。抽象的な「効率・公正」の概念に対しては12の具体的なチェックリストを足場として与え、さらに思考の広がりに応じて「分析シート（多角的な比較検討）」から「ピラミッドチャート（根拠に基づく論証）」へと、生徒の思考を一段階引き上げるためのツールを意図的に配置していた。

3) 個別学習を軸としながらも、学習空間の特性を活かした交流を効果的に組み込んでいた。班活動による対面的な議論（即興的な思考の補強）に加え、クラウド上でのシートの無記名共有を指示することで、生徒がクラス全体のいわば「集合知」にアクセスし、自らの意見を相対化する機会を意図的に創出していた。

4) 最後に、机間巡視や声掛けを通じた動的な支援である。学習者のつまづきを予期して机間巡視を行い、生徒からの問いに対して即時の情報提供をしていた。さらには、「あと2分」というタイムマネジメントの介入も、結果として生徒同士の議論を誘発する契機として機能させていた。

このように、これからのデジタル環境下における教師の役割は、従来の学習内容の伝達者や学びを促すファシリテーターにとどまらず、生徒が自ら学びの過程を作りやすくするための「デジタル学習環境のデザイナー」へと質的に拡張していることが示されていると考える。

教室空間におけるデジタル学習基盤における「個別最適な学び」は、個々の生徒が端末と向き合うなかで生まれるのではなく、生徒がデジタル空間と物理空間を行き来しながら、教師や他の生徒やデジタル学習環境を、自らの学びの資源として活用するプロセスの中に立ち現れていた。このプロセスは、単なる進度や学習形態の個別化にとどまらず、第1節で課題として挙げた「主体的・対話的で深い学び」を、デジタル学習基盤を前提としていかに実装するかという一つの実践的なモデルを示しているといえる。本稿で提示した学習過程の記述は、今後のGIGAスクール構想下における授業づくりの手がかりとなると考える。

今後の課題としては、本稿が単一の教科・単元における一事例の分析に留まっていることが挙げられる。学びの良さやその過程は多様であるべきであり、本稿の事例と考察のみで論じきれるものではない。今後は、他の教科や異なる学習段階において、デジタル学習基盤がいかに学習者主語のツールとして機能しうるのかを比較検討していく必要がある。また、デジタル学習基盤を前提とした個別学習の過程において、どのような困難がありえ、そうした困難にいかに手立てや支援を行うのか、という点も論じ切れなかった。重要な課題として今後も取り組んでいきたい。

## 注

- 1) MEXCBT（メクビット）とは、文部科学省が開発・提供している公的なCBT（Computer Based Testing：コンピュータ上で受験・解答するテスト）プラットフォームである。GIGAスクール構想によって整備された1人1台端末を活用し、児童生徒が国や地方自治体等の作成した公的な問題などをオンライン上で学習や評価に利用できるよう構築された。なお、考察の対象となっている本時では利用されていない。
- 2) 本授業において、AIを活用する際には提示された内容が事実であるのかを自分で確かめるように指導されている。

## 謝辞

本研究の調査実施にあたり、多大なるご協力を賜りましたZ中学校の先生方、W教諭、ならびに生徒の皆様にご心より感謝申し上げます。なお、本研究はJSPS 科研費（課題番号：25K06599）及び2024年度北海学園大学学術研究助成（科研費）の助成を受けたものである。

## 参考文献

- 中央教育審議会（2021）『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』（2026年2月13日取得，[https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt\\_syoto02-000012321\\_2-4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf)）
- 中央教育審議会初等中等教育分科会デジタル学習基盤特別委員会（2024）「デジタル学習基盤に係る現状と課題の整理」（2026年2月13日取得，[https://www.mext.go.jp/content/20241204-mxt\\_jogai01-000038845\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20241204-mxt_jogai01-000038845_001.pdf)）
- 中央教育審議会（2024）「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」（2026年2月13日取得，[https://www.mext.go.jp/content/20241226-mxt\\_kyoiku01-000039494\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20241226-mxt_kyoiku01-000039494_1.pdf)）
- 中央教育審議会教育課程企画特別部会（2025）「論点整理（案）」（2026年2月13日取得，[https://www.mext.go.jp/content/20250925-mext\\_kyoiku01-000045019\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20250925-mext_kyoiku01-000045019_02.pdf)）
- Z中学校（2025a）「教育研究協議会資料」
- Z中学校（2025b）「社会科研究授業案」

# 1 周目を終えて

福 田 さ と み

(市立札幌藻岩高等学校教諭)

## 1. はじめに 教員になることを決めるまで

2018年に北海学園大学人文学部日本文化学科に入学した。当時の自分は、4年後に札幌市の高等学校で教員として勤務している姿なんて想像していたわけではなかった。それでも、将来の進路の可能性を狭めないため、教職課程を履修することを選択した。進路について明確な目標を定めきれないまま学生生活を送っていた点は、当時の多くの大学生や今の高校生とも大きく変わらなかったように思う。

大学生活後半は、社会情勢の影響により外出を控える生活が続いた。散歩とレポート作成を中心とした日々の中で時間を持て余していたこともあり開始した民間企業の就職活動は、Zoomを用いた会社説明会やオンラインインターンシップへの参加から始まり、次第に対面での活動も増え、4年次がはじまるころには複数の企業から内定をいただくことができた。

一方で、教職という選択肢を完全に手放すことはできず、6月に実施された1次試験は例年と大きく傾向が異なる年であったためか、無事に通過することができた。8月の2次試験では、民間企業の就職活動で培った面接経験が大きな支えとなった。その結果、11月に札幌市中学校・高等学校国語科教員として登録をいただくこととなった。

その後、民間企業への就職と教職との間で熟慮を重ねた末、自らの意思で教職を選択し、令和4年4月に市立札幌藻岩高等学校に着任した。職場の教職員、そして何より生徒に恵まれた環境の中で教職に携わることができていることは、教員としての自分を支える大きな基盤となっている。

## 2. 担任としての自分

2人担任制(2人で40人の担任)の本校では、学年主任や教務主任などのご経験をお持ちの方とペアを組ませていただき、生徒対応から業務のやり方まで、教師としてのイロハをご指導いただくことができた。これは2人担任制の大きなメリットであると実感している。最も重要なのは情報共有で、20人-20人をそれぞれ担当するのではなく40人を2人で担当するからこそ、ケースに対してどのように対応したか、保護者にどのような話をしているか、どのようなことを本人が望んでいるかなどを共有しておく必要がある。個人的に業務としてもメリットが多いと感じるこの制度は、おそらく生徒の立場からしても良い面があり、もし片方の担任と相性が仮に合わなくても、何かかしらをもう1人の担任に伝えることができたり、人間関係の悩みはこの先生、進路の悩みはもう1人の先生というように内容によっても様々な先生と話すことができたりする≡頼っていい大人が1人増えるという点で有用であろうと感じる。

さて、そんな担任制度をもってして自分は「歳の近いおとな」として一緒に考え、一緒に走る存在を目指して3年間生徒と向き合ってきた。少々おせっかい過ぎたかもしれないが、関わり方として間違いではなかったと信じている。多種多様な生徒と関わってきた中で、高校の取り組みが進路に繋がる印象的なエピソードがある。

運動部所属の生徒で、警察官に憧れを持ち、大学進学を目指していた生徒だが、高校3年生で学校祭の総合司会を担当したことをきっかけに、法学部から経済学部へ進路を変更し、総合型選抜で合格を勝ち取った。真面目かつ面白いことが好きな生徒であり、昨年度とは異なる学校祭の開会式・閉会式のコンテンツを提案してくれて、一部実現が不可能なものもあったが、概ね実行することができ、前日の長時間にわたる打ち合わせも功を奏し全校生徒からも「面白かった」と評価を得ることができた。7月の中旬、その生徒から急に面談がしたいと言われるとその内容は「人を笑顔にするイベントって楽しいことに気づき、進路変更をしたい」ということだった。その後いろいろな話を重ね、結果的に「まちづくりや地域活性化について学ぶために進路変更をし、総合型選抜を利用して経済学部を受験する」ことになった。その後は2,000字の志望理由書を書くことを暫定的な目的に、将来はどんな場所でどんなことをしたいか、なぜそのように思うことになったか、幼少期はどのような体験をしていたのか、そもそも自分はどのような性格なのか、など就職活動でいう自己分析をひたすら行い、それを文字にする作業を一緒に行った。いわゆる生徒の思考の深掘りと、適切な言葉を探していく作業だったが、2ヶ月その作業を行い、生徒も自分もかなり納得することができる志望理由を発見することができたように感じている。ほぼマンツーマンで実施したこの取り組みは非常に高い成果を得ることができた一方で、自分自身のファシリテートやコーチング技術の不足さにも気づくことができ、生徒たちとどう関わるか、「対話」の重要性を実感させてくれた経験となった。なお、その生徒は無事に合格することができたのも結果が出たと感じるひとつの要因である。

### 3. 授業者としての自分

教員の業務は多岐にわたるが、その中でも大事にしたいと考え、その難易度の高さに頭を悩ませたのが教科指導である。単元テーマの設定、言語活動の調整、内容に応じた教材選定などの授業準備には毎回時間を要した。基本的なことだが、単元作成の際には学習指導要領に沿って内容を考える必要がある。学習指導要領に沿った目標に対してどのような内容にするかは各々に裁量があり、国語科の特性上かなり自由にテーマや言語活動を設定できるため、「何をするか」の選択肢が多様にある点が自分にとって難しいと考える点である。実践例として、1年次現代の国語で実施したルールメイキングをテーマにし、話す単元として実施した授業がある。以下に単元の目標を示す(主體的に学習に取り組む態度は省略する)。

#### 知識及び技能

- (1)イ 話し言葉と書き言葉の特徴や役割、表現の特色を踏まえ、正確さ、分かりやすさ、適切さ、敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し、使うこと。
- (2)イ 個別の情報と一般化された情報との関係について理解すること。

#### 思考判断表現(話すこと)

- イ 自分の考えが的確に伝わるよう、自分の立場や考えを明確にするとともに、相手の反応を

予想して論理の展開を考えるなど、話の構成や展開を工夫すること。

単元設定の際に自分が軸として意識していることは、卒業後、社会で何か課題が生じた際に「そういえば高校の国語の授業でやったな」と思い出してもらえるようなテーマを設定することである。そういった点で、関わる人の納得解を作り出すルールメイキングを授業の中で取り入れ、かつそれは生徒の生活に関わるものにしたと考え、「授業中の水分補給について」をテーマとした。本校では当時、授業中の水分補給は原則として禁止されていたが、猛暑日の熱中症対策に必要であること、そして実質形骸化されていることなどからこのテーマに決めた。生徒を4人程度のグループに分け、なぜそのルールは存在していたのか、なぜルールの改変が必要か、改変後はどのような運用をするべきか、どのようなリスクが考えられ、どのように対策をとるか、等について発表させることとした。プレゼンをさせるにあたり、まずは全体で、聞き手を納得させるためにどのような要素が必要かについて別テーマのプレゼンを分析させ、基本的には自分たちで話す内容については考えさせた。適宜机間巡視を行い、ツッコミを入れつつ準備を進めさせたが、中には他校の実情を友人に聞いてみたり、先生方にアンケートをとったりするなどの自らの主張を強めるための根拠となるデータを収集しようとする生徒もいた。授業の最後にはそれぞれのクラスから選ばれた3グループが各授業内で発表を行い、この時間は公開授業として様々な先生方にもご覧いただき、生徒へのツッコミや授業者へのアドバイスをいただいた。生徒からのアンケート結果からも割と好評ではあったものの、時間配分やコンテンツの整理など、自分にとっては課題の残る授業となった。

言葉を扱う教科として、様々なテーマを設定できる国語科の魅力を大いに感じるとともに、その難しさも感じるようになった。日頃からたくさんのことを教えてくださる国語科の先生方に心から感謝し、教科指導を最も大切なことのひとつとする教員でありたい。

#### 4. 顧問としての自分

初年度から現在まで生徒会執行部を担当している。高校生の時に自らが生徒会執行部だったことが理由と考えているが、他の部活と活動の内容は大きく異なっているように感じる。本校では生徒会執行部は部活動ではなく分掌業務のひとつであり、いわゆる特別活動の担当教員であると表現した方が一般的かもしれない。近年は、特別活動の企画・運営にあたり①安全を確保した上で ②生徒たちの「やりたい」を実現することを意識している。

①については最も重要な要素であり、過去に実施したことがある企画を含め、どのようなリスクがあるかを検討し、対処できないのであれば生徒と一緒に練り直している。学校祭や体育大会など全校規模で実施する行事については担任の先生はじめ教職員全体で生徒の見守りなど、安全管理はもちろん、もし怪我人が出た際にすぐに対応していただけるように決まりを作っている。②については主に生徒会執行部所属の生徒たち、そして何かしらの形で執行部担当として自分に関わる生徒に対して、彼らの充実・達成感を活動の中で味わって欲しいという担当者としての活動の意義として意識している。学校行事は生徒たちにとって高校生活の充実さを位置付ける重要なものであることを前提に、少しでも彼らの学校生活が楽しかったと思ってもらいたいという一心で取り組んでいる。多少無理だという申し出に対しても、ではどのようにしたら実現できるか

を一緒に考え、工夫することで互いの妥協案を見つけることができるケースは多い。

生徒会執行部を教員として担当し、生徒対応の難しさに改めて気が付くことができた。担任や授業では基本的に1つの学年を担当しているため、ある程度の生徒理解はしているつもりだが、行事となると全校生徒の720人を対応する必要がある。時には関わりがない生徒を指導する必要がある、どのような声掛けをすべきなのかは今もお悩みながら対応し、何か問題が生じた場合は必ず担任・年次に報告することは忘れないように意識している。

特に行事が近づくと大変なことも多いが、行事当日の執行部や全校生徒の顔を見るとやりがいを感じずにはいられない。もちろん当日の楽しみも大事だが、その長いプロセスもきちんと寄り添い、生徒たちが成長したと実感してくれるような担当者でありたい。

## 5. 教員としてどうあるべきかの悩み

この4年間は、「若手」としてどのようなポジションであるべきかを模索した。その結果、生徒からは「近所のお姉さんみたい」と言われるようになったが、ある程度自分が目指したポジションではあると認識し、ラフに相談しやすく、小さな悩みを早期解決の一助を担うことができたのではないかと感じる。一方でこの立場で最も気をつけていたのは、心理的距離が近いおとなであって、生徒ではなく、指導すべきところは指導することである。「優しい」と「甘やかす」は違うことを念頭に、基本的にやるべきことはやる、ダメなものはそのように指導することを意識してきた。生徒はどうしても心理的距離感を感じ辛い(ように振る舞う)ため、どうしても友達感覚になりやすい。そこで一線を引くことができるということが若手の教員として気を付けるべき最も大事なことの1つであると振り返る。

この立場であるが故、よかったなと思うこともあるが、数多くの失敗もしてきた。自分の言動が間違っていたこともあるが、かなりの時間をかけて指導したことに対して期待していた効果がなく、落ち込んだこともある。哲学者・教育学者の苦野一徳氏によると、「教師の仕事とは信じることと忍耐すること」である(苦野一徳『どのような教育が「よい」教育か』より)。期待し、どれだけ裏切られてもそれでも子どもたちを信じ続け、待ち続けるというこの考え方を大切に、今後も生徒と関わり続けていきたい。

## 6. おわりに

教員免許(中高国語・高校地歴)、日本語教員の資格の取得に加え、中川町でのインターンシップなど、大学在学時は様々なイベントに参加してきた。教育関係でいえば道内小学校の学習ボランティアにも申し込んだ。社会人サークルにも所属していたことで様々な場所へ行き、そこで出会った魅力ある人たちとの出会いと筆舌の尽くし難い素敵な経験は、教員としての自分の価値観を形成する一助になっていることは間違いなく、「大学で〇〇しておけばよかった」と思うことは度々あるが、不要不急の外出を控えるように言われていた後半の2年間を鑑みるならばかなり充実した4年間を過ごすことができた。大学生の時に培ったこの好奇心は社会人になっても維持しており、教育関係のワークショップやセミナーを中心に聴講し、自分自身のアップデートを続けていることができているのではないだろうかと感じる。

教員歴4年目、ひとつの年次を1～3年生まで担当し、卒業させることができた。教員によく

## 1 周目を終えて(福田)

ある「まずは3年やってみないと」という段階を終えようとしている今、今後はどのような立場になろうか、という今しか悩めない大きな問いについて考えるタイミングが来ている。素敵な同僚の先生方の偉大な背中を追い続け、自分なりに自己研鑽を続けていきたい。

今回、自分の思考をメタ認知する機会を頂戴し、現在の自分を認識することができました。教員歴4年目を終えようとしている今、成長できた面がある一方でまだまだ伸び代があると自認し、今後も奮闘していきたいと考えております。貴重な機会とお声がけいただいたことに感謝するとともに、北海学園大学の教職課程に関わる皆様のご健勝とこれからの発展を心より祈念申し上げます。

# 教師になって

— 大学生の自分に伝えたいこと —

三 浦 静 也

(北海道稚内高等学校教諭)

## 0 はじめに

本学の経営学部経営学科を卒業し、4年が経過しました。大学時代は教員採用試験に合格できず、最初の1年間は期限付教諭として北海道有朋高等学校で勤務し、その後、正規採用で、北海道稚内高等学校で3年間、勤務しています。

多くの諸先輩方がいる中で、まだ4年間という短い教職人生ではありますが、出逢いに恵まれ、濃密な時間を過ごすことができています。大変、恐縮ではございますが、私がこれまで教員として働いた経験について、この場を借りて、述べさせていただければと思います。

## 1 教員を目指したきっかけ

私が教員を目指したきっかけは2つあります。まずは、高校時代の恩師との出逢いです。私は小学4年生から野球を始めました。中学時代も中学校の部活動には入らず、硬球を使用するクラブチームに所属し、野球に没頭しました。野球に打ち込むことができ甲子園が狙える高校を求め進路選択に迷っている時に、恩師である先生に声をかけていただいて、札幌国際情報高等学校に進学することが決まりました。先生の期待にプレーで応えることはできませんでしたが、野球の技術や知識はもちろん、1人の人間として生きるための「人間力」も先生から学びました。部員の多い野球部の1人1人に熱心に向き合ってください、今では尊敬する憧れの存在です。信頼する野球部の先生方に「教員に向いているぞ」と言われたことが、教員を志すきっかけとなりました。

2つ目は、部活動に対する情熱です。私は野球を始めてから、将来は野球に携わる仕事をしたはずだと思っていました。高校野球は、1人の少年を大きく成長させることができるスポーツだと思います。高校野球の監督というのは、とても魅力的な仕事だと思っています。野球が好きで仕事にしたいという思いが、教員を目指すモチベーションになりました。

## 2 大学時代

大学時代は硬式野球部に所属し、4年間、朝から夕方まで野球に打ち込み、夜に大学で講義を受けるという生活をしていました。平日も土日もずっと野球に打ち込む日々は、私にとって、とても充実していました。

しかし、大学3年生の時に肩の怪我をしてしまい、選手としての野球人生が終わりました。大

学生生活ラスト1年間の使い方を、野球部を退部し、教員採用試験に集中する選択肢も考えましたが、学生コーチとして、チームに残り、指導者としての経験をすることに決めました。

チームの方針、練習メニューなど多くのことを監督から任せていただき、貴重な時間となりました。チームも30年ぶり20回目の全国大会に出場することができ、指導者として、東京ドームでノックを打てたのは、良い経験となりました。

学習面に関しては、商業科の教員になることは決めていたので、教職課程の勉強はもちろん、商業関係の資格取得に励みました。ITパスポートや日商簿記2級を大学時代に取得することができました。

しかし、教員採用試験は、1次試験で不合格となりました。

### 3 前任校（北海道有朋高等学校）

教員採用試験に不合格だったため、正規採用ではなく、期限付教諭ではありましたが、縁があり、大学卒業後は、北海道有朋高等学校に勤めました。

有朋高校は、北海道で学ぶ高校生の「最高の砦」として、札幌市北区にある学校で、単位制、通信制、T-baseの3つの体制で動いています。私は単位制で1年間、勤務をさせていただきました。ノーチャイムの90分授業や、時間割を生徒自身が自ら組む仕組みなど、私が学生時代に想像していた学校とは、違う景色が存在していました。この学校での勤務経験は現在、そしてこれからの教職人生にとってとても貴重な1年間だったと感じています。

有朋高校での勤務を通して、2つのことを学びました。まずは、準備の大切さです。生徒に向けて何かを発信するということは、思っている以上に責任重大です。教壇に立つことでそれを実感しました。2つ目は、報告・連絡・相談の大切さです。生徒に関する情報は特にですが、些細な情報でも、教員間で、「ほうれんそう」しておくべきだと感じました。そのおかげで、トラブルなどの未然防止に繋がると実感できました。

### 4 現在勤務校（北海道稚内高等学校）

有朋高校での期限付教諭時代に、商業だけでなく、「情報」の免許も通信制大学で取得し、無事に教員採用試験も、商業で合格することができました。

令和5年度4月、正規採用で、北海道稚内高等学校に新採用で赴任しました。1年目は、2年生の副担任、野球部の副顧問、分掌は情報管理部というパソコン関係の分掌に配属されました。創立100周年の記念式典など貴重な経験ができました。2年目からは、初めての担任を持ちました。校内人事で3月中旬に次年度の商業科新入生の担任を持つことが決まってから入学式までの間の準備期間はとても大変でした。入学式が終わった後も、GWぐらまでは、学級開きやオリエンテーションなどが忙しすぎて、本当にあっという間でした。良い経験をしました。

そして、現在は3年目に突入しました。クラスはそのまま持ち上がり、2年次商業科の担任として、日々過ごしています。分掌は3年目から生徒指導部になりました。主に生徒会の会計を担当しています。部活動でも、前任から引き継ぎ、野球部の監督となりました。同じ学校での勤務ではありますが、色々と立場や環境が変わる1年となっています。

また、学校内での勤務だけではなく、北海道高校野球連盟名寄支部の審判部事務局・幹事とい

う役割もいただいています。1年目から野球の審判でも起用していただき、今年度は、支部大会で球審をやらせていただき、北北海道大会(夏の全道大会)も経験させていただきました。この年齢で、このような機会をいただけて、とても幸せだと感じますし、機会をくださる支部の先輩方には感謝しかありません。

さて、3年目という短い教職人生ではありますが、本当に色々な経験をさせていただいています。それは嬉しいことですが、はっきり言って時間が足りないと日々感じています。朝はHR教室の清掃から私の1日は始まります。そこから始業前までに1日の確認から朝SHRで生徒に連絡すべき事項を確認します。授業の時間が始まれば、だいたい1日4時間ぐらいは授業が入っているの、空いている2時間ぐらいで、年次、分掌、学科、部活動の仕事などをします。放課後は会議などなければ、全ての仕事を中断し、部活動へいきます。人によって感じ方は違いますが、私にとってはこの部活動が生きがいです。何事もそうですが、特に手を抜きたくないものと言えます。だいたい生徒の下校時間ぎりぎりまで活動し、その後、職員室に戻り、残った仕事を片付けて、帰宅します。

教員の仕事は、手を抜こうと思えば、いくらでも抜けると思います。私は毎週、両面で学級通信を発行していますが、これは義務ではありません。月に1回、年に1回、さらに片面にすれば、もっと他のことに使える時間が増えると思います。他にも、部活動も活動日数や時間をもっと減らせば、大幅な時間確保ができますが、自分についてきてくれる一生懸命な生徒がいるので、妥協はできません。効率が悪いだけかもしれませんが、目の前の生徒に本気で向き合うことは私のこだわりかもしれません。

## 5 教員はブラックか？

教員はブラックだと、世間的には言われています。長時間勤務、部活動、保護者対応、様々な人間関係、サービス残業などブラックと言われる要素は確かにあると思います。私自身、平日に定時で帰宅する日は、ほとんどありませんし、土日でも部活動があるため、学校にいたことが多いです。このような状況ではありますが、私は1度もブラックだと感じたことはありません。理由はやりがいがあるからだと思います。

## 6 皆さんに伝えたいこと

期限付教諭時代も含めて4年間の教職人生を過ごし、大学生の頃の自分(大学生の皆さん)に伝えたいことをいくつか紹介します。

### ①いつ何時も先生であることです。

札幌圏ではなく、地方の学校で勤める先生方には、共感していただけたと思いますが、稚内市内でお店などに出かけるとかなり高い確率で生徒に遭遇します。だから、常に見られている意識はどうしても抜けません。休日で私服を着ている時も、旅行中も生徒からしてみれば、先生であることに違いはありません。公務員なので、あたりまえかもしれませんが、それだけ、自覚と覚悟が必要な職業だと感じています。

また、教員になって気づきましたが、生徒はSNSやブラウザで、教員の過去を検索し、先生方の過去を知っていることが多いです。「〇〇先生は▲▲大学だ」とか「〇〇先生は大学時代、全国

大会に出場している」なんて過去を知っていることが多いです。教員になってから学生時代の自分の過去を変えることはできませんが、生徒に示しがつく充実した学生生活をしておくべきだなと感じました。

これらを踏まえて、私が一つだけ後悔していることがあります。それは学生時代ほぼ野球しかしていなかったことです。自分の学生時代は自信を持って、充実していたと言えますが、周りの先生方を見渡すと学生時代に色々な経験をされています。私は、野球に熱中して旅行などにもいきませんでしたし、留学経験などももちろんないです。野球だけでなく、色々なことを経験していれば、もっと生徒とのコミュニケーションの幅が広がっただろうと感じています。

## ②情熱を持って生徒と接すること

私はある程度、嫌われてもいいという精神で生徒と接しています。それは、生徒の将来のためなら厳しく指導する場面はとことん指導する、礼儀マナーを重んじさせる、勉強も部活も妥協させないなどと言った意味です。自分も8年前は高校生だったのでわかりますが、今の自分のような先生は、あまり関わりたくはないタイプの先生だと思います。でも、それでいいんです。教員として生徒と関わるなかで、最も大きな過ちは、指導されなかったことによって、卒業後に生徒が苦しんだり、恥をかいたりすることだと思っています。だからこそ、大人基準で生徒の人間的な側面を見るようにしていますし、部活動などに関しても終わった後に生徒の後悔してほしくないで、日々、全力で取り組ませています。手を抜くことは一切、許していません。引退したとき、卒業するとき、大人になったときに、この先生に出逢えてよかったと思ってもらえる先生になれば、嬉しいです。

ただ、厳しさに愛情がないと、生徒はついてこないと思います。厳しくすれば良いということでもないです。生徒は思ったより敏感だと感じています。「情熱=愛情」を持って生徒と接していれば、ある程度の関係性は築くことができると信じています。

## ③出逢いは大切に

教員は他の職業に比べて出逢いがとても多い職業だと思います。その1つ1つの出逢いを大切にしなければいけないと日々感じています。教職人生が約40年近くあるとすれば、何千人という生徒と出逢うことになります。今日の前にある生徒はその何千人のうちの1人かもしれませんが、その生徒からすれば、人生で1度しかない高校時代の担任が自分であったり、高校時代の部活の顧問が自分であったりするというを常に念頭においています。

次に、先生方との出逢いもすごく大切だと感じています。まず、先生方はどこかで誰かが繋がっています。私の例をあげますと、私の父の恩師(野球部監督)と私の高校時代の恩師(野球部監督)は、年齢が同じで、よく練習試合をしています。さらに私が稚内高校に赴任してから名寄支部でお世話になっている支部の先輩教員は、前任校で私の父の恩師にお世話になったらしく、そのつながりもあって、よく面倒をみていただいています。お世話になった人同士が繋がっていて、私の話などもしてくださっているみたいなので、より頑張ろうと思えますし、期待に応えようと頑張ることができます。

また、同じ学校で勤める先生方との出逢いもちろん大切です。稚内高校は若い先生が多いので、何事も切磋琢磨しながら、刺激を受けながら仕事をしています。5年~6年で転勤がある職業ですので、いつまでも一緒というわけではありませんが、一緒に戦った仲間として、別の学校になった後も、良い付き合いができればいいなと思っています。ちなみに、余談になりますが、私は、稚内高校で奥さんとも出逢いました…(笑)

次に、恩師との出逢いも大切だと感じています。私が恩師だと思える方は何人かいらっしゃいますが、その中でも、高校時代の野球部の顧問の先生方に対しては特にそう思います。この先生方と出逢うことがなかったら教員にはなっていないと思います。その先生方には、高校入学時から現在まで10年が経ちましたが、今でもお世話になっています。今後も甘えてしまうことはあると思いますが、いつかは自分の誰かの恩師と呼ばれる存在になれるように尽力したいと思っています。

最後に、もう一人、私は大学4年生の時に、教職課程研修会で人生を変える出逢いをしました。それは、当時、北海道有朋高等学校で校長をなさっていた元紺谷尊広校長です。私が、大学4年生の時に、元紺谷校長は、講師として大学生の私たちに講演をしてくださいました。この段階では教員採用試験に不合格で、次年度から期限付教員ができる学校を探していましたが、この出逢いがきっかけで、北海道有朋高等学校での勤務が決まりました。

# 教師のやりがい

山 崎 風 也

(帯広市立西陵中学校教諭)

## 1 はじめに

本学工学部を卒業後、専門分野についてさらに理解を深めたいと考え大学院へ進学した。その後、中学校教員として採用され、現在は教職3年目になる。大学および大学院で培った論理的思考力や課題解決の視点を、数学の授業づくりや生徒への指導に生かすことを意識しながら、日々の教育活動に取り組んでいる。

1年目は、第2学年の副担任および研修部に所属し、2・3年生の数学の習熟度別授業を担当しました。初年度ということもあり、授業準備や教材研究、評価方法の設計、生徒への声かけ一つひとつに試行錯誤を重ねた。同時に、学校行事の運営や校務分掌の仕事を通して、学校が組織としてどのように機能しているのかを実践的に学んだ。この1年間で、授業の基本的な構成員力、生徒との関係づくり、チームとして働く意識など、教員としての土台を築くことができた。

2年目は第1学年の担任を務め、学級経営の中心的役割を担いました。学級目標の設定、日常生活指導、保護者対応、進路に向けた基礎づくりなど、多面的な業務に携わった。生徒指導部にも所属し、個別の生徒対応や学年・学校全体での指導体制の構築にも関わった。生徒一人ひとりの背景や特性を理解することの重要性を実感し、指導の際には頭ごなしの指示ではなく、対話を通じた理解と納得を大切にす姿勢を身につけた。

現在3年目は、第2学年の担任と生徒指導部の仕事をしている。これまでの経験を生かし、授業では思考過程を重視した指導と、学び合いの場面づくりを意識している。学級経営においては、生徒同士が安心して意見を言える関係づくりと、集団としての規律の両立を目標に取り組んでいる。また、生徒指導の場面では、早期対応と情報共有を徹底し、学年・校内で連携した支援ができるよう努めている。

この3年間を通して、授業づくり、学級経営、生徒指導のいずれにおいても難しさと同時に大きなやりがいを感じている。日々の実践を振り返り、改善を重ねながら、生徒とともに成長していく姿勢をこれからも大切にしていきたいと考える。必要に応じて研修や研究にも積極的に取り組み、より質の高い教育実践ができる教員を目指していきたい。

## 2 教職大学院について

私は、本学在学中に教員採用試験不採用となったため、その後、就職するか、進学するかを考えていた。そのタイミングで教育実習に行った際に、もう少し教育について勉強しようと考え、北海道教育大学教職大学院に進学することにした。

教職大学院での学びは、「理論と実践の往還」である。学部直進者と現職教員がいるため、現場

の実態を知ることができ、それぞれのニーズに合わせて専門性を深化させることを可能にする。現場に出る時期が遅れたり、コストがかかったりなどのこともあるが、それ以上に学部直進者や現職教員とのネットワークを構築できた。少しでも興味があれば、調べてほしいと思う。

### 3 本校について

本校の今年度の重点目標は～自律～自ら考え 判断し 行動できる～「ウェルビーイングの向上」です。自律性の向上は、生徒の内的動機づけを向上させ、同時にウェルビーイングの向上させることで、学校全体のパフォーマンスを高める正の循環を生み出す。

働き方改革にも力が入っている。本校では、ICTを活用している。Google チャットによるリアルタイムな情報共有や独自ポータルサイト「SEIRYO STAFF ROOM」の運用は、教師の負荷を軽減させます。必要な情報を即座にアクセスできる環境を整えることで、より高い生徒への深いかわりに時間を使う子ができるようになる。

### 4 教師に必要なスキル

教師の仕事には、教科指導、学級経営、分掌業務、生徒指導、保護者対応、部活動経営など、多岐にわたる役割がある。単に教科を教えるだけでなく、生徒の成長を総合的に支える専門職であり、求められる能力も幅広い。その中で、教師に特に必要なスキルについて述べる。

まず、どの職業にも共通して必要だが、教師にとって特に重要なのがコミュニケーション能力である。教師は日常的に生徒と関わるだけでなく、保護者や同僚、地域の関係者とも連携しながら教育活動を進めていく。そのため、相手の話を正確に受け止める傾聴力と、自分の考えを分かりやすく伝える表現力の両方が求められる。信頼関係が築かれていれば、生徒は安心して相談でき、保護者とも協力関係をつくることができる。結果として、生徒指導や学級経営、各種業務を円滑に進めることにつながる。

次に、授業力である。授業力は教師の専門性の中核であり、学習の質を大きく左右する。これからの授業では、生徒が主体的に考え、対話し、学び合う活動を重視することが重要である。そのためには、教師が一方向的に説明するのではなく、問いを投げかけ、生徒の思考を引き出す工夫が必要となる。教師は知識の伝達者にとどまらず、学びを支援するファシリテーターとしての役割を担うことが求められる。また、導入で学習内容と日常生活とのつながりを示し、「なぜ学ぶのか」という目的意識を持たせることも、学習意欲を高めるうえで重要である。

三つ目は責任感である。教師にとっては日常の一コマであっても、生徒にとっては心に残る重要な出来事になることがある。何気ない言葉が励ましにもなり、逆に傷つけてしまうこともある。教師は常に教育的影響力を持つ存在であることを自覚し、自らの言動に責任を持たなければならない。また、安全管理や個人情報の扱いなどについても高い倫理観が必要である。

四つ目は、学び続ける姿勢、すなわち自己成長力である。教育現場は常に変化しており、指導方法や評価方法、教育課題も更新されていく。採用された時点が完成ではなく、そこが出発点である。研修への参加や授業研究、他の教師の実践から学ぶことを通して、自分の指導を改善し続ける姿勢が求められる。自ら課題を見つけて振り返りを行うことが、教師としての専門性を高めることにつながる。

五つ目は対応力である。学校では毎日さまざまな出来事が起こり、予定通りに進まないことも多い。生徒間のトラブル、体調不良、保護者からの相談など、突発的な事態に対しても、感情的にならず冷静に状況を判断し、優先順位を考えて行動する力が必要である。また、一つの方法に固執せず、状況や相手に応じて指導法を調整する柔軟性も重要である。

六つ目は、報告・連絡・相談を徹底する力である。学校は組織で動く職場であり、情報共有が不十分だと対応の遅れや誤解が生じる。問題が起きた際には、速やかに管理職や同僚に報告し、チームとして対応することが大切である。一人で抱え込まず、周囲の知見を借りることで、より適切で安全な対応が可能になる。外部機関との連携も含め、協働する意識が不可欠である。

以上のように、教師には多面的なスキルが求められる。これらを一度に完全に身につけることは難しいが、日々の実践と振り返りを積み重ねることで伸ばしていくことができる。常に学び続ける姿勢を持ち、生徒の成長を第一に考えて行動することが、教師として最も大切である。

## 5 やりがい

学校現場は、教科指導だけでなく、学級経営、生徒指導、分掌業務、保護者対応、部活動など多くの役割を担っており、非常に忙しく大変な仕事だと思われる。しかし、その忙しさの中にも、教師だからこそ感じることのできる大きなやりがいがある。その最も大きなものは、生徒の成長を最も近い距離で実感できることである。成長と一言で言っても、その内容は学力面だけでなく、心や態度、人間関係の築き方など多方面にわたっている。

私が特に成長を感じる瞬間は、生徒のできることが増えたときである。例えば、最初は理解できなかった学習内容を繰り返しの指導や工夫した支援によって克服し、自分の力で問題を解けるようになる姿がある。また、あいさつができるようになる、自分の考えを言葉で伝えられるようになる、仲間と協力して活動できるようになるなど、社会性や人間性の面での変化も大きな成長である。このような変化を日々の関わりの中で継続的に見取ることができるのは、教師という職業ならではの魅力である。

さらに、教師は生徒と感動や喜びを共有できる立場にある。学校行事で一つの目標に向かって努力する過程や、本番をやり切ったあとの達成感、部活動での勝敗に一喜一憂する時間などを、生徒のすぐそばで共に味わうことができる。結果だけでなく、そこに至るまでの努力や葛藤も共有しているからこそ、その喜びはより大きなものになる。また、その経験の積み重ねは、教師自身の指導方法や支援のあり方を見直す機会にもなり、指導スキルの向上にもつながっていく。

教師は生徒を育てる存在であると同時に、生徒から学ばされる存在でもある。日々の関わりの中で、生徒の発想の豊かさや粘り強さ、思いやりのある行動に気づかされ、自分自身の価値観や指導観を見つめ直すことができる。生徒の夢や目標が実現する場面に立ち会えることは、教師としての大きな喜びであり、誇りにもなる。

このように、教師という仕事は困難や負担も多いが、それ以上に人の成長に深く関われるという大きな意義がある。「未来をつくる仕事」であるという使命感は、日々の課題や苦勞を乗り越えるための原動力となる。生徒の変化と成長を支え続けられることこそが、教師の仕事の最大のやりがいである。

## 6 終わりに

教職を目指すうえで学生の間準備できることがある。

一つ目は経験の多様性と人間としての幅を広げることである。教職を目指すうえで、学業だけでなく多様な経験を積むことは非常に重要である。アルバイトやボランティア活動を通して社会の仕組みや対人関係を学ぶことは、将来の生徒理解や保護者対応にも生きてくる。また、個人の趣味の時間も大切にしてほしい。これらは単なる息抜きではなく、自分自身の心身のバランスを整え、困難な状況に直面したときに立ち直る力、すなわちレジリエンスを育てる土台となる。さらに、趣味や体験は生徒との共通の話題となり、信頼関係を築ききっかけにもなる。人間としての幅を広げることが、結果として教師としての引き出しの多さにつながる。

二つ目は、働く前に勉強しておくことである。「働く前に勉強しておく」という助言は、単なる知識の先取りではない。現場に出ると、授業準備、生徒指導、保護者対応、校務分掌など、多くの業務が同時に進行する。その中で教育の本質を見失わず、生徒一人ひとりに丁寧に向き合うためには、事前の準備によって心の余裕、いわばメンタルの帯域幅を確保しておくことが重要である。教科内容の理解、指導法の基礎、評価の考え方などをあらかじめ整理しておくことで、現場では観察や対話により多くの意識を向けることができる。基礎体力が備わっていれば、その分だけ生徒の小さな変化やサインにも気づける教師になれる。

教職は困難や負担も大きいですが、それ以上に深い感動と自己成長を得られる創造的な仕事である。生徒の変容に立ち会い、可能性を引き出し、未来への道を共につくっていく営みは、他の職業では得がたい価値を持つ。次世代を育てるといふ誇りと責任を胸に、今後も学び続けることが必要である。

# あなたの「想い」が未来を創る

小 山 学

(市立札幌みなみの杜高等支援学校長)

## 1 はじめに

令和7年度は北海学園大学豊陽会の会長の任を受け、教職を目指す学生の皆さんの前でお話をさせていただく機会を何度かいただいた。そこで今回は、その中の「教職課程研究会」で話した内容について、以下の4つのテーマに分けて報告したい。

## 2 人生の転機

この私が、現在特別支援学校の校長をしているのには、いくつもの「偶然や奇跡（人生の転機）」が重なった結果なのだが、そのことについて、自己紹介を交えながらお伝えしたい。

### (1) 自分を見失った2年間の浪人生活

小中学校ではどちらかというと優等生だった私は、高校では部活とバンド活動に明け暮れ、成績はいつも下の方。それでも理想だけは高く、卒業後は身の丈に合わない大学を志望するも、2年間の浪人生活に突入する。

1年目は夢と希望に燃え、勉強に勤しんだが、2年目にはすっかり勢いがなくなり、気がつくやうに完全に自分を見失っていた。そんなある日、同じ2浪仲間が「俺、北海学園大学を受験するけど、お前も一緒に受けないか？」と声をかけてくれたのである。

彼のその一言が、その後のわたくしの人生に大きく影響することとなった。

### (2) ありのままの自分でいられた5年間

学園に入学後は、教員だった父の勧めで教職課程を履修することとした。また、「I部フォークソング研究会」に入部し、大学生生活を満喫していたのだが、次第にバンド活動と打ち上げに力が入りすぎ、その結果、5年間通うことになってしまった。

ただ、この大学5年間で出会った仲間たちのおかげで、本当の自分を知ることができたし、その自分を大好きになれたのは、自分の人生において本当に重要なことであつたと今でも思っている。そして、実はこの1年間の遅れが、次の人生に大きく影響するのである。

### (3) 特別支援学校の教員になる

平成3年3月。卒業式も終え、遊んでばかりいた月末のことである。一応教員採用試験を受け、C登録（登録外）だった私のところに道教委から、「4月1日から教員として正式採用する。」との連絡が入った。その衝撃的な一報に両親は大喜びだったが、ミュージシャンへの想いをひそかに

温めていた自分としては、前向きな気持ちにはなれなかった。しかも、赴任先は旭川市の北に100 kmほどのところにある「美深高等養護学校」。知的障害のある生徒たちが、卒業後に職業自立・社会自立を目指す寄宿舎のある高校であった。

しかし、実際に赴任し、障害のある生徒たちと出会い「こんなに素敵な生徒たちと毎日一緒にいて、しかもお金がもらえるなら、こんなに素晴らしい仕事はない!」と。

あの時から、今日に至るまで、私の気持ちは少しも変わっていないのだが、そのことは自分にとっての大きな自慢である。

#### (4) 結婚と離婚、そしてシングルファーザーに

突然教員となったその年の12月に結婚し、その後2児の父となるが、およそ10年後には離婚し、2児の子をもつ「シングルファーザー」となる。幸い、その時はすでに転勤し、実家から近いところに住んでいたため、両親に助けをもらいながら、何とか仕事と子育てを両立させることができていた。

そんなある日のことである。子どものお迎えのために帰る準備をしていた女の先生を見ながら「お母さんはいいよなあ、この時間に帰れるから。俺たちはこれからが本番だよ。」とつぶやいていた先輩教員がいた。わたくしはその発言に衝撃を受けた。この先生は、子育てをしながら働く人たちの大変さを想像すらできないのかと。

それ以来、どんな職場であっても性別に関係なく、平等に働くことができる世の中であるべきだと思ったし、自分はそういうことを理解できる人になろうと心に決めたのである。

#### (5) 明日は当たり前をやっこない

40歳半ばを過ぎたころである。たまたま申し込んでいた「脳ドック」で検査後にドクターからこう言われたのである。「すぐに大きな病院で精密検査をした方が良いです。」と。

その1週間後の精密検査で病気が発覚、更にその1週間後には10時間を超える脳の大手術を受けた。幸い術後は順調に回復し、後遺症なども一切残らなかったが「人はいつ死ぬか分からない。明日は当たり前をやっこない。」ということを知り、生きることを意味を捉え直した人生の転機となった。

#### (6) 新しい学校づくり

大手術から約1年後。当時勤務していた校長の推薦で、札幌市教育委員会で勤務することになった。任務は「札幌市立の特別支援学校を創ること。」

なぜそのような任務が私に与えられたのかは、いまだに定かではないが、市教委での2年間と開校準備室の1年間の計3年間は、自分にとっても大変だが、とても充実した時間となった。後の章「4 愛する『みな杜』」で詳細をお伝えしたい。

#### (7) 管理職として

開校した「市立札幌みなみの杜高等支援学校」では、教頭として着任し、3年間、生徒や保護者、先生方と新しい学校づくりの楽しさを思う存分に味わうことができた。一方で、教頭の事務的業務の大変さに押しつぶされそうになり、「自分は教頭に向いていない。」ことを痛感させられた。

校長として昇任したのは、以前教員として勤務していた「市立札幌豊明高等支援学校」だった。歴史と伝統に縛られ、新しい時代に合わせて変化できていないのはもったいないと考え、新米校長の私は、着任早々「豊明イノベーション」と銘打った学校改革に取り組むも初めはトップダウンすぎて大失敗。その後は作戦を変え、核となる教員を中心として「全職員の対話」により改革を進めたが、これが大成功。その2年後の入学者選考検査では、道内の高等支援学校の中で最高倍率を記録するほどの人気校となった。

そして現在は、立ち上げた学校に校長として戻ってこれたことができたが、開校当時にはない新たな課題に囲まれて、悪戦苦闘の毎日を過ごしている。

### 3 多様性の包摂（ほうせつ）

障害のある生徒との出会いが、人生の大きな転機となったわけだが、障害のある方を知るきっかけは、もっと前からあったし、その一つ一つの出会いから自分の中の「障害者観」が少しずつ変化していったのだと感じている。

だから、もし障害に対する差別や偏見をなくそうとするのであれば、教育が時間をかけて意図的・計画的に取り組む必要があるだろうし、もしかすると、私が特別支援教育に関わることになったのは、「それをあなたが推し進めなさい。」と運命の神様に言われているのかもしれないと思うことがある。

#### (1) 重度の肢体不自由があった同じ年のいとこと親戚のおばさん

私が小学生の頃、いとこは近所に住んでいたのですが、お母さんが背負って遊びに来ることが時々あった。椅子に座ることはできないので、並べた座布団の上に横になるのだが、言葉も聞き取りづらく、直接コミュニケーションをとることは難しかった。ただ不思議と嫌な印象はなく、「こういう人もいるのだな。」と静かに受け止めていたように思う。

もう一人は親戚のおばさんで、いとこほど障害の程度は重くはなく、言葉が聞き取れたので、いろいろとおしゃべりをしているうちに「体は不自由だし、言葉は出づらけれど、想いは変わらないのだな。」と理解することができていた。

#### (2) 坂本九さん

これも小学生の時であるが、私は日曜日の9時からSTVで放送されていたテレビ番組「サンデー九」が大好きであった。司会はその坂本九さんで、笑顔いっぱい九さんが、障害のある方たちと楽しそうに話をしたり活動したりしている様子に自然と心を動かされていた。

その番組と九さんには、障害のある方たちへの差別や偏見みたいなものを抱かせないパワーみたいなものがあつたのだと思う。

また中学校1年生の時には「24時間テレビ」の札幌の司会であった九さんに会いたくて、朝からSTVホールに入り浸り、結局ほんの少しの時間ではあるが、九さんとお話をすることができた。その優しさに触れた私は、九さんのことが更に大好きになった。

#### (3) 壮大な妄想

教員になった当初は、ただ毎日無我夢中で生徒たちと向き合っていたが、やがて担任となり、

生徒を社会に送り出す経験を重ねていくうちに、あることに疑問を感じ始める。それは卒業後の進路先についてである。

当時は、優秀な生徒であっても、卒業後の進路先を自分で選択することはほとんどできず、企業就労しても最低賃金をもらえない場合が結構多かった。

もちろん、知的障害のある高校生を雇用してくれる会社は、本当に限られていたし、「最賃除外申請」をして障害者を雇用するのは、当時は珍しいことではなかった。

それにしても私の中では「障害があるから仕方がない。」と諦めなければならないことだらけの世の中で本当に良いのだろうかとか疑問は増すばかりで、いつしか「そうだ！ きっと教育にできることがあるはずだから、もっともっと努力して、教育で世の中を動かせるような教員になろう。」などと壮大な妄想を抱き始めるようになっていったのである。

#### (4) 新たな時代の幕開け

それから随分と時が流れたが、そんなわたくしの妄想が文科省に届いた？のか、次期学習指導要領（教育の共通ガイドラインのようなもの）に「多様性の包摂」という考えが盛り込まれた。

見ただけでは難しく意味が理解できないので、AI「誰にでも分かりやすく教えて！」と聞いてみると「みんな違って当たり前」と教えてくれた。「全ての人たちは違うし、それでいいじゃん！」ということである。

もしかして、若い頃に芽生えた私の中の違和感は、それほど遠くない未来に解消されるのではないかと何だかワクワク・ドキドキしてしまう。

## 4 愛する「みな杜」

平成26年1月末日のある日、当時勤務していた学校で校長に呼ばれた。「小山先生、新しい学校づくりをしてみないかい？」

この一言からその後、私は札幌市教育委員会で2年間、開校準備室で1年間、悪戦苦闘しながら新設校の開校準備を行うこととなった。

そして平成29年4月に南区真駒内に「市立札幌みなみの杜高等支援学校」が開校したのである。

#### (1) 高等支援学校担当係長

教育委員会では、毎日のように行われる会議のたびに「高等支援学校担当係長」としての意見が求められるのだが、準備不足でうまく回答ができなかったときに「高等支援学校担当係長の責任をきちんと果たすべき。時間の無駄である。」と指摘されたことがあった。

これには、さすがの私も落ち込んだが、考えてみれば当然である。

例えば、教室の仕様を決める際にその場所で、何人の生徒が、どのような道具を使って、どのように学習活動を展開するのが決まっていなければ、それに応じた施設設備を設計することはできないのである。

改めてその責任の重さに押しつぶされそうになったが、逆に、それならば思う存分に自分の夢や妄想を活かして、ワクワクドキドキするような提案をし続けてやろうじゃないかと開き直ることができた。

## (2) 対話により新たな価値を生み出す

様々な困難を乗り越えられた要因の一つに「対話により新たな価値を生み出す」という手法を身に付けたことがある。

それは私の夢や妄想を各分野のプロたちに提案し、対話により具体化するというプロセスを経ると「1の提案が10にも100にも膨らんでいく。」という経験をしたことによる。

その力は、校長になった今でも私自身の大きな力となっている。

## (3) 市立札幌みなみの杜高等支援学校（通称：みな杜）の特色

高等支援学校とは、中学校を卒業した知的障害のある生徒が、卒業後に職業自立及び社会自立を目指すために職業教育を中心に学ぶ高校である。

この学校をどのような学校にすべきかを考え始めたときにまず頭に思い浮かんだことが、「知的障害のある生徒たちは、成功体験が少ないことから自己肯定感が低い場合が多い。」また「指示されて行動することに慣れてしまったため、自分で選択して、自分から行動することが苦手。」であることなどをどのように支援していくべきかであった。

そこで考えたのが3つの作戦（みなみの杜の特色）である。

### ① 「普通科職業コース」

これまでの北海道の「高等支援学校・高等養護学校」は、ほとんどが「職業学科」で設置されており、入学した学科を中心に卒業までの3年間、学びを積み重ねる。もちろん、他の学科の学びも経験できるように各学校で工夫をしているが制限があるため、全国の先進校の取組からヒントを得て、導入したのが「普通科職業コース」である。

この仕組みのメリットは、1年生で全ての職業コースを学び、2年生から選択した職業コースを学ぶことができる点にある。

残念ながらデメリットもあり、職業学科の学校に比べて、職員数が少なくなる点である。

### ② 「みなみの杜協働育成システム」

特別支援学校の教員であっても、免許状の教科の専門性はあるものの、職業コースの専門性は、自己研鑽して高めていかなければならない。そこで、地域や企業の「ホンモノ」の方々に力を借りて学習を展開する「みなみの杜協働育成システム」を生み出した。

このシステムの核は「みなみの杜応援団」であり、3つの部会で構成されている。

1つ目は「協育実習部会」である。

6つの職業コースが、それぞれ学ぶ内容に関連する企業とつながり、学ぶ場を提供いただいたり、講師（協育アドバイザー）を派遣いただいたりして、生徒も教師も「ホンモノ」から学ぶ機会を数多く設定している。この協力企業の集まりが「協育実習部会」である。

2つ目は「協育学習部会」である。

地域には「元プロ」の方々がたくさんいらっしゃるの、調理実習で「おせち」を作る際にお手伝いやアドバイスをいただく、浴衣の着方の学習で着付けが得意な方に講師をしてもらうなど、地域の方の得意を生かして各教科の様々な場面で協力いただいている。

この地域の学習ボランティア（協育サポーター）は、現在では60名程度の登録があり、そのうち20名ほどの皆さんが定期的にサポートをしてくれている。この協育サポーターの集まりが「協

育学習部会」である。

3つ目は「PT 部会」である。

PTA 活動もこれまでの常識にとらわれずに、一律に各学級で役員を決めて活動していただくのではなく、できるときに、できる方に参加していただく仕組みとし、名称も PTA ではなく、「PT 部会」とした。

### ③ 「6つの職業コースが連携した杜 cafe の運営」

生徒たちが「はたらく」意味を理解し、社会に出て自分らしく生き生きと活躍するためには、社会の産業構造が様々な仕事に関連し合い、連携し合って成り立っていることを知り、どんな仕事にも必ず大切な役割があることを理解する必要があると考えた。

そこで校舎内にある「杜 cafe」の運営を中心に、6つの職業コースが関連し合って、連携し合っ

て杜 cafe を支える仕組みを構築した。「アグリコース」では、無農薬野菜を栽培してカフェのメニューに使用し、「ファクトリーコース」では、カフェで使用するコーヒーカップや木製スプーンなどを制作し、「サポートコース」では、カフェのメニュー表や掲示物をデザイン・制作、また保育や介護を学び、「クリーンアップコース」では、カフェの営業後の清掃や校内清掃、地域の施設を清掃し、「ストアコース」では、カフェでの接客や校内備品等を管理し、「キッチンコース」では、カフェで提供するメニューの調理や製パンを行っている。

これらの特色や積み上げてきた実践は、現在全国の特別支援学校からも評価され、学校視察の希望数がとても多いため、うれしい悲鳴を上げているところである。

## 5 あなたの「想い」が未来を創る

北海学園大学を何とか5年かけて卒業したわたくしが、今こうしてこのような立場で原稿を書かせていただいていることを当時のわたくしが知ったら、びっくらぼんどころの騒ぎではないであろう。

それにしても、人生というものは本当に不思議なものである。その時の選択によって、その時の出会いによって、その時のタイミングによって、想像もできないくらい変化するのだから。

運命なのか偶然なのかよく分からないが、ふりかえてみるとその時々にはゆるぎない「想い」があったように感じているし、もしかしたら、その「想い」が全てをつないでくれていたのかもしれないと思う。

だからこそ、これを読んでくれている、特に未来がまだそんなに決まっていな人たちに伝えたい。あなたの『想い』が未来を創るということ。

その「想い」は、自分の中から湧き出てきたものでなくてもよい。誰かの影響を受けていたり、または私のようにいろいろな人との対話から生み出されたものであったりしても全く問題ないと思う。とにかく自分の中に間違いなく存在し、自分らしいと思うことができるのであれば、それはもう自分の「想い」であるはずだから。

そして、チャンスがある人には是非、教員を目指してほしいと思う。なぜならば、未来を創る人を育てることができる職業だからである。

自分の想いで未来を創るだけでなく、もっともっとたくさんの「想い」をもった人を育てるこ

あなたの「想い」が未来を創る(小山)

とができれば、更に未来はどんどん創り出されていくはずだから。

## 6 おわりに

北海学園大学は、自分を見失っていた私に「本当の自分」を教えてくれた。そして偶然なのか運命なのかは分からないが、障害のある生徒たちと出会う機会を与えてくれた。本当に感謝している。

だからわたくしは、その感謝の気持ちをこれから教職を目指す学生の皆さんや、すでに教員になって頑張っている後輩たちを全力で応援することで返していきたいと思っている。

皆さん！ 共に頑張ろうではありませんか！

## 4年間の教職課程と教育実習

梶 田 宙

(北海学園大学工学部生命工学科4年)

### 1. はじめに

私は、北海学園大学工学部生命工学科で4年間教職課程を履修しました。また、北海道教員採用試験を中学校理科で受験しA登録をいただきました。

ここでは、教職課程の4年間、特に教育実習を中心に私の教職課程4年間についての振り返りをまとめます。少しでも参考になれば幸いです。

### 2. 4年間の教職課程

私は理科の教員免許を取るためにこの学科に入学しました。工学部生は2年生から、ほとんどの授業が山鼻キャンパスになるため、自身の為にも1年生で豊平キャンパスで履修できる教職科目をすべて履修する必要がありました。当時はかなり大変でした。正直4年生になった今、当時学習していたことが抜けている箇所もあります。教員採用試験では1年生で学習した教職法規や教育心理学なども出題されるため、改めて学習し直しました。

2年生からは理科教育法が始まり、理科教育で大切なことや指導法などを学習しました。また、教職総合演習では今日の教職現場での課題点、問題点について議論し、改めて教育について考える機会がありました。これらで得た知識は、後述する教育実習でとても役に立ちました。

### 3. 教員採用試験

私は大学院への進学も考えていたため、前倒し試験は受けずに院進に向けて4月まで勉強をしていました。紆余曲折あり、教員採用試験を受けることにし5月から6月15日まで毎日指導要領を読み込みました。6月9日から6月14日までの一週間は1日8時間近く勉強していた記憶があります。私は一般・教職教養もあり大変でしたが、市販の一問一答などを活用し無事一次試験を通過しました。

二次試験はほとんどを面接対策に費やしました。先生との面接練習の他に、友人にお願いをし何度も面接練習をしました。一人の時間では、面接で聞かれる100個以上の項目用紙を眺め、回答を頭で考えたり口に出してみたりしました。筆記は過去問で傾向を掴み、適切に指導案の穴を埋められるか一度試しました。

### 4. 教育実習

私は母校の中学校に3週間行きました。担当学年は1年生で、3クラスありました。授業回数は5回の授業×3クラスで計15回行いました。

教育実習前は、約1ヶ月前に電話にて実習でお世話になることや事前打ち合わせの日程などを決めました。私は実習が始まる1週間前まで実習日誌や出勤簿が見つからなく、焦っていた記憶

があります。これを読んでいてこれから教育実習が控えている方は、今一度確認しておくことをおすすめします。

実習中、初週は座学、先生としての振る舞いを考えたり、教材研究をしたりしてあっという間に終わりました。また、緊張がなかなか抜けず終始堅苦しかったような気がします。2週目から授業をしました。導入で生徒に興味をもたせたり、授業をストーリー立てて進行したりするなど様々な工夫をしました。適時担当教員から指導を受け、同じ授業内容でも1クラス目と3クラス目では授業の出来が段違いでした。3週目では緊張をあまり感じず、生徒の名前もほとんど覚えていました。研究授業では、私が好感触だったものや生徒が楽しく参加してくれた学習法を取り入れようと思いました。実際、盛りだくさんにしすぎて授業内容が終わらなかつたり、一部指導案から変えたりしました。ただ生徒を楽しませながら授業するのではなく、適切な授業配分を考える大切さも学ぶ事ができました。

私は部活動も3週間参加させていただきました。ここはまだ部活動の外部委託を行っていない学校でした。また、3年生が既に引退していたため、1、2年生での活動でした。新体制かつ経験者の教師が居ないなかでの部活動で、生徒も日々試行錯誤しながら練習している様子が見受けられました。私は中学校・高校と6年間その競技をやっていたため、教えられる範囲で生徒に指導もさせていただくことができました。私はもともと、教員になっても部活動の顧問はやりたくないと思っていました。しかし、教育実習で生徒に指導していく中で生徒の上達を近くで見られたり、教室では見せないような一面を部活動では見せてくれたりして、そういった生徒を見られるなら顧問も悪くないと思うようになりました。

教育実習の3週間は短くあっという間なものでした。私はもともと人前で発表することが苦手でした。しかし、教育実習を通して人前で話すことや発表することが得意になりました。また、3週間で教員の仕事のやりがいを感じることができました。こういった意味で、私の人生が変わった期間になりました。

## 5. 最後に

教員を目指して入学し、教職課程を履修し、無事に課程を修了できたことに安堵しています。教職課程の先生方の手厚いご指導や助言に支えられ、この4年間が充実したものに、特に教員採用試験に合格することができました。この場をお借りして感謝を申し上げます。

これを読んでいるみなさんは、これから教育実習や教員採用試験が控えているかと思います。その時に私たちの体験記なども参考にしたいと思います。使えるものはたくさん使ってください。頼れる人にはたくさん質問してください。教職課程の先生はみんな頼れる先生です。

最後になりますが、私は北海学園大学出身の教員としてみなさんよりひと足早く働きます。教育現場に限らず、教職課程を履修した者同士としてどこかで再開できたら嬉しく思います。みなさんが無事に、充実した4年間だったと思えるような学生生活にしてほしいと思います。応援しています。

〈合格体験記〉

## 北海道高等学校公民科政治経済を受験して

奥 山 結 衣

(北海学園大学法学部政治学科4年)

### 〇はじめに

私は北海道高等学校公民科政治経済で受験し、合格しました。今年の高校政治経済での登録は私含め6名と狭き門で、2次試験合格発表日が教育実習の研究授業と被ったため、緊張と合格した安心が交互にくる怒涛な1日だったことを覚えています。私の場合少し特殊で、教職大学院(道外)を受験し、来年春からは第1志望の教職大学院に進学予定です。教採の勉強と並行して大学院の受験対策も行なっていました。そのため、後述する内容に大学院受験対策の話が少し登場すると思います。予めご了承ください。

また、教採の具体的な勉強内容などは各種予備校のサイトや教職指導室などで確認できますし、勉強方法も大学受験や今まで受けてきた考査対策のやり方で問題ないと思っているため、ここで記載することはありません。3年生の方でこの体験記を読まれている方は、学内研修会でもらった対策本を読むと教採への理解が深まると思いますので、上記の内容はそちらで確認してください。

ここでは、教採全体を通して大切だと考える3つのことを取り上げます。高校公民科政治経済で受験しない方でも、ある程度は参考になるかと思います。

### 〇教採の対策をする上で大切なこと

①日頃から教育に関する情報をインプットし、自分の言葉でアウトプットできるようにすること

先に2次試験について記述します。北海学園大学では2次試験の直前に学内模擬面接が開かれます。多くの方はこれを受講すると思うのですが、私は教職大学院の説明会と被ってしまい受講できませんでした。そのため、面接練習は個別面接練習の2回のみで挑みました。個別の練習で酷評だったこともなく、実際の面接も高得点とは流石になりませんでした。最低ラインは突破していました。2次試験を合格できた要因を考えると、1つは教科等指導法の学習指導案や単元計画を書くのが比較的得意だったこと、もう1つは日頃から教育に関して調べ考えていたことが挙げられると思います。

指導案などは書くのが苦手な方がいると思うのですが、教育的な時事(いじめ、ICT、不祥事等)は調べて自分だったらどうするかを考え、話せるようにすることは誰にでもできると思います。私は教職大学院の受験対策として、時事を扱っている書籍を繰り返し読んだり、ネットで記事を探したりということを2025年の1月頃からは行っていたので、それが結果的に教採にも役に立ちました。

②過去問の傾向を鵜呑みにせず、満遍なく範囲を勉強すること

ここからは1次試験について記述します。過去問をすでに解いた方もいると思います。教採の

過去問には傾向が記載されている表があるのですが、その表はあまり当てにしない方が良いでしょう。例を挙げると、専門教養試験で、学習指導要領の問題が2問出題されました。ここまでは傾向と同じなのですが、前年まで公共と政治経済、公共と倫理のどちらかが出題されていたのですが、今年は政治経済と倫理での出題で公共は出題されませんでした。過去問を鵜呑みにして、公共と私の専門の政治経済のみ確認していたら痛い目にあったと思います。

また、他の社会科で受験した友人も過去問の傾向から出題されないと考えていた分野が出題され、答えられなかったと言っている人が多かったです。ここ数年は傾向が揺れ動きやすく、今まで出なかったものが出題されたりすることもあるため、満遍なく勉強することをお勧めします。

### ③早めから勉強・対策をすること（これが1番大切だと思います）

私が教採に合格できた1番の要因は早めから対策していたからだだと思います。私は、教職大学院の受験対策があること、倫理を高校生の時履修したことがなく独学で勉強しなければいけなかったこと、心配性も相まって約1年ほど勉強していました。（前倒し試験から2次試験までのトータル勉強期間）

実際、1次試験では倫理の方が若干点数が高いくらいのオーバーキルをしましたし、2次試験の教科等指導法の単元計画も事前にAB項目の単元計画を作成して丸暗記したため、試験時間の30分ほどあまり、評価もかなり良かったです。しかし早めから勉強したほうが良いと書くと、大体2パターンのことを思う方がいると思います。

1つ目はバイトや考査の勉強などで忙しいから教採の勉強はまだしなくていいか、と思った方がいるのではないのでしょうか。その言い訳は通用しません。なぜならはみんな同じように忙しいからです。私も塾講師をしているので朝から晩まで授業をしていたこともありますし、3年生の時は考査もまだ多かったので勉強を両立するのは大変でしたし、普通に旅行に行ったりもしていました。その中でも時間を見つけてコツコツ勉強できるかが合否の分かれ目だと思います。1日10時間毎日勉強しなさいというわけではないため、1・2時間でもコツコツ勉強すると良いと思います。それに、特に面接対策を直前に詰め込むと絶対ボロが出るので早めに対策するのがお勧めです。

2つ目は、こんなに早くからやらなくても受かるでしょ、と思う方がいると思います。実際、数ヶ月前からの対策で合格する方もいると思います。ただ、かなり要領よくかつ効率的に勉強しなければいけません。②にもつながることですが、満遍なく勉強するには時間が必要です。時間がなければ傾向からヤマをはって勉強しなければなりません。そして何より、もし試験に不合格だった場合、なぜ不合格だったのかの分析がしにくいことが1番の問題です。勉強した上で不合格ならば、対策の仕方に問題があったのかなどの分析をして次に繋がります。しかし、勉強不足で不合格だった場合、もっと勉強しておけばと後悔が残り、反省が遅れます。早めから対策しておくだけで、自分に自信がつかますし、試験会場で勉強しておけばと考えることも、変に緊張することもなくなります。

何度も言いますが早めから勉強しましょう。試験日は決まっているため、勉強しなければ勉強しなかった日が増えるだけです。

### ○最後に

色々厳しいことを書いたと思います。ただ教採は年々倍率が悲しいことに下がっています。そ

のため正しい努力を積み重ねれば教採は合格できます。教員になれば毎日勉強しなければなりません。(他業種でも同じだと思いますが…) 教採の対策は教員になった時の予行練習になると思います。教採の勉強は自分の将来がかかっていることもあって、しんどい時や勉強したくない時もあると思います。そんな時は友達と一緒に勉強することがお勧めです。私は勉強会に誘ってもらい4人という小規模で行なっていました。勉強の進捗を確認したり、一緒に勉強したり、2次の対策をしたりとたくさんお世話になりました。この勉強会のおかげでモチベーションを維持できたので今でも感謝しています。一人での勉強が辛くなったら周りを頼ってみてください。日々の積み重ねを大切に。応援しています。頑張ってください。

## 〈合格体験記〉

# 教員を目指した4年間

高 木 幸 大

(北海学園大学工学部電子情報工学科4年)

### ・はじめに

私は北海道中学校数学科でA登録をいただきました。北海学園大学で教員を目指した4年間のことを記し、それが皆さんの参考になれば幸いです。

### ・教職や学部での勉強

教職課程での勉強について、私は工学部ということもあり、2年生になると山鼻校舎に行かなければなくなりました。そこで、1年生のうちに豊平校舎で開講されている教職教養に関する教科を多くとる必要がありました。なので、4年生になった時、ほとんどのことを忘れてしまい、教育心理学が好きだったこともあり「パブロフの犬」しか覚えていないということがありました。ただ、授業一つ一つで自分が教員になった時のことを想像し、どのように生かすか、どれを自分のなかの教員の柱としてとどめておくか考えながら受けていたと思います。また、2年生以降の専門教科に関する授業ではICTを使用した授業づくりを行ったことを鮮明に覚えています。私たちが受けてきた授業よりも一段と理解が促されるような授業が展開できると確信しました。

私は高校生の時、GIGAスクール構想がでていたということもあり、それに生かせるようなことを学びたいと思い、工学部電子情報工学科を志望しました。この学部では、数学に関することや、電気に関すること、プログラミングなどを学びました。特にプログラミングに関しては今後、学校教育でも重要になってくるのではないかと考え、より勉強し、数学を教える中でどのように使えるだろうかと考えました。結果として、私は中学生のころ確率が本当に特定の値に収束するのか疑問だったので、確率の値がどのようになるか、プログラムによる結果を生徒に見せ、理解を促すことができるのではと考えました。

そのように、私の大学生活4年間は学校内外すべてにおいて、「自分が教員になったら」を考えていたと思います。そのおかげで、後々の教員採用試験で自分の返答など自信をもってできたのではないかと思います。

### ・教員採用試験

1次試験については2024年10月から勉強を始めました。まず始めたことは過去問を確認し、一般教養や教職教養、専門教科の問題がどのように出題されるのか把握することから始めました。過去問における一般教養・教職教養は4対6程度の割合で出題されていたと思いますが、前倒し試験では5対5程度の割合で出題され、一般教養が多くなったように記憶しています。私は一般教養の出題範囲は非常に広いので、数学と理科だけ勉強して臨みました。本番では理科について出題されたので、勉強した甲斐がありました。教職教養に関しては、忘れていたことも多かつ

たので、参考書を購入し、2周ほど読みました。そのようなことを行い、前倒し試験に無事合格することができました。

専門教科については、過去問では中学校は指導要領からほとんど出題され、数学の問題はあまり出題されないという傾向がありました。なので、対策としてはとにかく指導要領を読み込むことと、「指導と評価の一体化」を読み込むことが中心となりました。時間があるときには必ず見るようにしていました。数学の問題については問題を解くこと以上の対策はないと思います。北海道・札幌の問題集を解いたり、全国版の教員採用試験の問題集を解いたりしました。高校については指導要領からの出題はあまりなく、数学の問題がほとんどで難易度もやや高いように記憶しています。

ここからは2次試験について記していきます。2次試験は教科指導法と面接Ⅰ・Ⅱがありました。2次試験の対策は1次試験が終了してから始めました。

教科指導法については、まず、先生から配られた過去問を解くことから始めました。すると、出題のされ方や答え方、どのように対策していけばよいか把握することができました。対策についてはとにかく指導要領と指導と評価の一体化を読むことだと思います。指導要領にはそれぞれの単元についてどういった資質能力を生徒たちに身に付けさせるか、それをどのように身に付けさせていくかが書かれているので、問題を解く際の参考になります。また、指導と評価の一体化は指導要領よりもしっかりと読んでおくことを推奨します。特に第3編は一文字一文字を覚えるくらい読むべきです。指導と評価の一体化の第3編は試験と同じような形で学習評価について書かれています。そこからどのように解答すればよいか把握できると思います。さらに、私が受けた試験では第3編「一次関数」から同様の内容の問題が出題されました。

面接については面接ⅠとⅡがあり、どちらが先にあるかは人によるので注意が必要です。面接対策はとにかく練習です。一次試験が終わり次第練習が始まります。最初は最大3回教職指導室の先生と練習することができ、助言をいただくことができます。この面接練習は練習したい日を提出し、日程を決めていきます。なので、面接について不安のある人は積極的に早い日に練習日程を組んでいただき、最大3回できる機会を生かすべきだと思います。私は面接練習開始日に日程を組んでいただき、3回の機会をすべて生かしました。また、参加は任意になりますが、面接本番の1週間前に学外からいらっしゃる方と練習する機会もあります。ここでは教科指導室の先生方よりも厳しく質問されますが、自分の見落とししていたところなどに気付くことができたので、参加してよかったと感じています。また、意識して行っていたことにメモとアウトプットがあります。先生のアドバイスや自分の考えをメモにのこしたり、質問に対する回答を作成しキーワードを選出して、それを覚え、話すという練習を行ったりしました。記述した通り、面接練習にしっかり参加し、準備をしたことで私は程よい緊張感と自信で面接に臨むことができました。皆さんも練習頑張ってください。

#### ・教育実習

教職課程の集大成として教育実習があります。私は5月末から6月頭に母校で行いました。

教育実習では、一週目は授業見学と生徒指導や特別支援についてなど学校に係る事柄について指導を受けました。また、生徒と初めて会うということでお互い緊張していたため、あまり交流できなかったと記憶しています。二週目から実際に授業を教えることを行いました。毎回の授業で反省会を行い、改善をしていきました。私は週の初めに一週間分の授業を作成していたの

ですが、反省から次の日の授業を毎回改善していたので寝る時間があまりありませんでした。それでも改善したことで生徒が納得したような反応をしてくれた時は改善した甲斐があったと安堵しました。生徒たちとの交流は2週目以降活発になったと感じました。昼休みに一緒に遊んだり、総合の時間では生徒から自分の考えを教えてくれるようになったりしました。一週目から積極的に生徒に話しかけたり、生徒を観察し、良い行いをしていた生徒には声をかけたり感謝を伝えたりしていたことが関係構築に役立ったと感じています。

研究授業については詳しくは書きませんが、先生方から言われたことの一つとして「生徒同士もっと話し合わせるように」というものがありました。最近ではアクティブラーニングが求められていますし、数学では「数学的な表現を用いて説明する力」が求められています。私もこのことを意識しながら授業を作成しなければならないと改めて感じました。

最後に、皆さんも教育実習にあたって不安なことはあると思いますが、とにかく積極的に生徒と関わってってください。そうすれば、生徒たちは協力的に授業に参加してくれます。実りのある教育実習になることを期待しています。

〈合格体験記〉

## 遠回りしながら進んだ，教員への四年間

渡 会 絢 音

(北海学園大学経営学部経営情報学科4年)

はじめに

私は北海道教員採用試験に合格し，高等学校「情報」で登録をいただきました。ここでは，教職課程に在籍した4年間の学びを振り返りながら，教員採用試験や教育実習といった経験を通して得た気づきや成長についてまとめたいと思います。

### 教職課程の4年間

私は教員になることを志し，北海学園大学に入学しました。そのため，1年次に基礎科目を履修し，多くの授業やテスト，レポートに取り組む日々も，決して苦に感じることはありませんでした。目標に向かって努力している実感があり，やりがいを感じながら学修に取り組んでいました。しかし，2年次から模擬授業が始まり，実際に教壇に立って「教えること」を想定した授業が増えると，これまでの学びとは大きく性質が変わったように感じました。それまでは教員になるための知識を身につける期間でしたが，そこからは教員として不可欠な授業力を学び，磨いていく段階に入ったのだと思います。当初は思うように授業ができず，周囲と比べて「自分には教員としての素養がないのではないか」と感じることも多くありました。長年の目標であった教員という夢から，かえって遠ざかっているように感じ，苦しい時期もありました。それでも，2年次，3年次と根気強く指導してくださった先生方の支えを受け，4年次となった今，教員採用試験に合格した立場で振り返ると，当時とは異なる覚悟と自信をもって教壇に立てるようになったと感じています。

北海学園大学での教職課程の4年間は，決して楽なことばかりではありませんでした，ここで学びを深めることができたからこそ，教員としての第一歩を踏み出すことができた，今は心から思っています。

### 教員採用試験について

教員採用試験の対策は，私は3年次2学期が始まった10月頃から，前倒し試験に向けた学習を開始しました。入学当初から教員を志していたにもかかわらず，試験2か月前という時期からのスタートでしたが，勉強開始が遅れてしまった理由は，何から手を付ければよいのか分からず，結果として後回しにしてしまっていたからです。続く専門検査や2次試験についても，対策開始がぎりぎりになり，不安を抱えたまま試験に臨むことになりました。だからこそ，これから教員採用試験を受験する皆さんには，分からないことを後回しにせず，早めに相談し，まずは「始めてみる」ことを強く勧めたいです。

前倒し試験について，まずは昨年度までの過去問を教職指導室で過去7年分ほどいただき，とりあえず解いてみました。そこでどんな問題が出題されているかなどの傾向などを把握し，実際

に対策に取り組み始めました。私は時間がないこともあり一般教養は勉強せずに教職教養のみを対策しました。教職教養については、3冊ほどを一通り勉強し、空いている隙間時間にはアプリで一問一答形式のものを活用したりなどの対策を行いました。10月から学習を始めた結果、12月の前倒し試験では思うような成果を出すことができませんでした。圧倒的に勉強不足だったことを実感しました。そのため、翌年6月の専門検査も不安を抱えながらの受験となりましたが、専門検査では点数を伸ばすことができ、1次試験全体としては想像以上に良い結果で終わることができました。教科や倍率にもよる部分は大きいとは思いますが、前倒し試験で結果が振るわなくても、諦めずに次の試験に向けてスタートを切るとよいと思います。

2次試験については、1次試験の合否発表から約2週間後に実施されるため、私は合否を確認してからの2週間で本格的に対策を行いました。教科等指導法については、情報科は過去問の数が限られていたこともあり、過去問から傾向と対策を把握することに重点を置いて準備しました。本番では想定していなかった単元が出題されましたが、書く練習を重ねていたことで、何とか書き切ることができました。面接試験は、苦手意識をもっていました。筆記の教科等指導法の対策を優先してしまい、準備が後手に回ってしまいました。教職指導室での面接練習や学内の面接対策を活用しましたが、試験2日前の最後の練習までなかなか自信を持てずにいました。それを見かねた先生から最後の練習では特に厳しくご指導いただいたことで、自分の姿勢を見直すきっかけとなり、残り2日間で集中的に対策を行い、本番では過度に緊張せず臨むことができました。

こうして合格までたどり着くことができたのは、ぎりぎりの状況でも親身に指導して下さった先生方や、添削指導をして下さったOBの先輩方のおかげだと強く感じています。2次試験については自分ひとりじゃ対策できない部分が多いと思うので、一人で頑張りすぎず、対策に臨むのが良いかなと思います。

## 教育実習

私は4年次後期に教育実習に参加しました。情報科という特性もあり、それまでの模擬授業では2、3人の前で授業を行う経験しかなく、実際の教育現場に立つ機会も十分ではありませんでした。そのため、採用試験合格後ではありましたが、「ここで自分が教員に向いていないと気づいたらどうしよう」という不安を抱えながら実習に臨みました。

緊張の中で迎えた初日、指導教諭の先生から「研究授業がうまくいくかどうかは、生徒との関係性にも左右される」という言葉をいただきました。その言葉を受け、翌日からは自分から積極的に生徒に関心を持ち、関わることを意識して実習に取り組みました。高校での実習であったため、1週目から授業を担当しましたが、生徒たちは温かく迎え入れてくれ、授業にも前向きに取り組んでくれました。40人を相手に授業を行うのは初めての経験であり、模擬授業とは全く異なる難しさを実感しました。全員の理解を促すこと、興味・関心を引き出すこと、誰一人取り残さないための時間配分など、意識すべき点の多さに気づき、日頃それらを実践している先生方への尊敬の念を強く抱きました。

教員採用試験に合格し、教員になることが決まった状態での実習であったからこそ、将来の自分を具体的に想像しながら実習に臨むことができた点も、大変貴重な経験でした。2週間の教育実習を通して、授業だけでなく生徒との関わりの中で、改めて教員になりたいという思いが強まり、自身の目指す教員像もより明確になったと感じています。

### おわりに

教職課程の4年間、教員採用試験、そして教育実習を振り返る中で、私は「教員になる」という目標が、決して一直線に近づいていくものではないことを学びました。うまくいかない経験や不安、迷いを抱えながらも、周囲の支えを受け、自分なりに考え、行動し続けることで、少しずつ前に進んできた4年間だったと思います。

これから教員を目指し、教職課程や教員採用試験に向かう皆さんには、うまくいかないと感じる時期があっても、自分一人で抱え込まず、周囲を頼りながら一歩ずつ進んでほしいと思います。私自身、準備が遅れたり、自信を失ったりする場面が何度もありましたが、その都度、先生方や先輩方に支えられ、助言をいただきながら前に進んできました。分からないことをそのままにせず、まず聞いてみる、行動してみる、結果的に自分を大きく成長させてくれると実感しています。北海学園大学での4年間の学びは、そうした姿勢の大切さを教えてくれました。この経験を糧に、私も教育現場に立ってからも学び続ける教員でありたいと思います。皆さんがそれぞれのペースで教員への道を歩んでいくことを、心から応援しています。

〈合格体験記〉

## 教員採用試験と大学4年間

安 藤 凜 音

(北海学園大学工学部生命工学科4年)

はじめに

私は、北海道の中学校理科教員として採用をいただきました。これから教員採用試験に挑戦する大学生の方々に向けて、自身の経験をもとに、受験までの道のりや対策、そして大学生生活の過ごし方についてお伝えしたいと思います。

私が教員になりたいと強く思うようになったのは、中学生の頃の経験がきっかけです。中学3年生の時、胆振東部地震により被災しました。私の地元であるむかわ町は大きな被害を受け、日常生活そのものが大きく揺らぎました。学校も例外ではなく、授業の再開が見通せない状況が続き、普段の学校生活はもちろん、学校行事の中止・延期など、当たり前だと思っていた中学校生活が一変しました。

不安や戸惑いを抱える中で、先生方は常に私たち生徒を気にかけて、声をかけ、学びの場を守ろうと尽力してくださいました。限られた環境の中でも授業を工夫し、私たちが前を向けるように支えてくださった姿は、今でも強く心に残っています。その支えがあったからこそ、私は無事に卒業を迎えることができました。この経験を通して、人の人生の節目や困難な時期に寄り添い、支えることのできる教員という職業に強い憧れを抱くようになりました。

また、私は昔から理科が好きで、身の回りの現象を「なぜだろう」と考えることに楽しさを感じていました。しかし、クラスメイトの中には理科に苦手意識を持つ人も多く、「難しい」「よく分からない」という声をよく耳にしていました。そのたびに、理科の本来の面白さが十分に伝わっていないことをもどかしく感じていました。だからこそ、自分が教員となり、理科の楽しさや奥深さを中学生に伝えたいと考えるようになりました。

一次試験対策について

私は2024年12月に一般教養・教職教養、2025年6月に専門科目の一次試験を受験しました。現在は制度が変更され、3年生の夏にまとめて受験できる形になっています。

教職教養は、主に1・2年次に履修する教職科目の内容から出題されます。私は工学部に所属しており、2年次以降は山鼻キャンパスで専門科目を中心に履修していたため、1年生のうちに教職課程の必修科目をすべて履修しました。その結果、試験を受ける頃には内容を忘れてしまっている部分も多く、復習にはかなりの時間を要しました。

サークル活動やアルバイトも続けていたため、まとまった勉強時間を確保することは難しく、試験半年前からは通学時間や空きコマ、就寝前などの隙間時間を活用して、参考書を読むことから始めました。参考書を一通り読むだけでも記憶が徐々に戻ってくる感覚があり、本格的に問題演習を始めたのは試験3か月前ほどからです。過去問を解いて出題形式や問われ方に慣れた後は、参考書を繰り返し読み、頻出語句や重要な数字を重点的に暗記しました。

一般教養については、出題範囲が非常に広く、すべてを網羅するのは現実的ではないと感じました。そのため、自分の得意分野である理科と、ある程度対応できる数学に的を絞って勉強しました。北海道の教員採用試験では教職教養と一般教養は半々で出題されるため、一般教養よりもある程度範囲が絞れる教職教養を重視して対策することがいいと思いました。

専門科目である中学校理科については、学習指導要領からの出題が多かったと感じました。3年生の終わり頃から過去問に取り組み、特に学習指導要領を何度も読み込みました。文章の構成や表現に慣れることで、「次にどのような内容が来そうか」「どの語句が問われやすいか」といった感覚を掴むことができるようになります。基本的に4択問題であるため、完全に理解していなくても消去法や予測によって解答できる場面も多くありました。

理科は物理・化学・生物・地学の4分野がありますが、私は特に物理が苦手でした。そのため、高校入試用のテキストを購入し、基礎から学び直しました。中学生向けの教材を使うことで、自分の理解が曖昧な部分を明確に把握でき、どの分野を重点的に勉強すべきかを考える上で非常に役立ちました。また、付録として付いていた公式集の小冊子は、試験直前の見直しにも活用しました。

## 二次試験対策について

二次試験は8月上旬に実施されました。一次試験が6月中旬、結果発表が7月であるため、実質的に二次試験対策に使える時間はそれほど多くありません。そのため、一次試験が終わった直後から二次試験を意識した準備を進めることが重要だと感じました。

二次試験では、教科等指導法と面接が行われました。教科等指導法については、過去問を分析し、出題されやすい分野や設問の形式を把握することから始めました。理科の場合、4分野のうちどこか1つが重点的に問われる傾向があり、ある程度の予測を立てることが可能でした。明確な正解が示されていない問題も多いため、「空欄をすべて埋めること」「設問の意図から大きく外れないこと」を意識して解答しました。

面接対策については、とにかく場数を踏むことが大切だと思います。教職指導室での面接練習に加え、担当教員にお願いして個別に練習の時間を設けていただいたり、友人同士で模擬面接を行ったりしました。また、自己分析ノートを作成し、自分の長所や短所、これまでの経験、教員を志望する理由について何度も書き直しました。自分の考えを相手に分かりやすく伝える力は、一朝一夕で身につくものではないため、日頃から意見を言葉にする練習をしておくことが大切だと感じました。

## 大学4年間を振り返って

工学部ということもあり、1年次は履修しなければならない科目が多く、週5日大学に通う生活でした。一人暮らしをしながら、サークル活動やアルバイトも行っていたため、時間的にも精神的にも余裕がない時期もありました。課題や試験に追われる中で、「本当に教員を目指し続けられるのだろうか」と不安になることもあり、途中で進路を変えることを考えたこともあります。それでも、これまで支えてくれた先生方の姿や、自分が教員になりたいと思った原点を思い出すことで、最後まで諦めずに取り組むことができました。忙しい中で、いかに時間を作り、やるべきことに向き合うかを考え続けた4年間でした。教育実習では、実際の中学校で生徒と関わり、教壇に立つ経験をしましたが、授業を行える時間は想像していたよりも少なく、限られたコマ数

の中で準備から実践までを行う難しさを強く感じました。特に、授業の流れを考えたり、生徒の反応を見ながら臨機応変に対応したりすることは、事前の想定通りにはいかず、今でも自分の力不足を感じる部分です。そのため、正直なところ、授業力についてはまだ不安が残っています。一方で、教育実習は不安や課題だけでなく、非常に楽しく、やりがいを感じる時間でもありました。休み時間や清掃時間に生徒から声をかけてもらったり、授業後に質問に来てくれたりしたことは、大きな励みになりました。理科の内容について、生徒が「分かった」「楽しかった」と言ってくれた瞬間は、教員を目指してきて良かったと心から思える経験でした。この教育実習を通して、これからも学び続け、成長していきたいという思いがより一層強くなりました。

大学生活では勉強が最優先であることは間違いありませんが、履修計画を工夫することで、後の学年に余裕を持たせることも可能です。その時間を使ってアルバイトを増やしたり、友人と過ごしたり、さまざまな場所を訪れたりすることで、多くの経験を積むことができます。大学生の間にしかできない経験は、将来教員として生徒と向き合う際の話題や視野の広さにつながると感じています。

教員採用試験の対策はもちろん重要ですが、それと同時に、大学生活そのものを大切に、自分自身を成長させる時間を過ごしてほしいと思います。これから教員を目指す皆さんが、素敵な教員になれるよう心から応援しております。

〈合格体験記〉

## 教員採用試験について

五 井 彩 桜

(北海学園大学人文学部日本文化学科4年)

### 1. 一次試験について

私は大学三年生の十二月に、前倒しで教員採用試験を受験しました。試験内容は教職教養と一般教養で、準備期間はおよそ三か月でした。三年生ということもあり、大学の講義やアルバイト、部活動と並行して勉強を進めなければならず、時間のやりくりには苦勞しました。初めての教員採用試験であったため、自分の勉強法が本当に正しいのか分からず、不安になることも多かったのですが、同じく教職を志す仲間と励まし合いながら問題に取り組むことで、最後まで継続することができました。教職教養では、「教育原理」や「教育法規」からの出題が多く、主に東京アカデミーの『セサミノート』を使用して勉強しました。私は「書いて覚える」タイプなので、実際の試験はマークシート方式であるものの、語句を書きながら知識を整理できるこのテキストはとても自分に合っていました。理解と定着を意識して何周も繰り返し取り組んだことが、知識の土台づくりにつながったと感じています。同じように書くことで覚えやすい人には、特におすすめしたい教材です。一般教養は、国語や数学などの五教科だけでなく、音楽や美術といった分野からも幅広く出題されます。そのため、すべてを完璧に対策しようとする負担が大きくなります。個人的には、一般教養に時間をかけすぎよりも、配点や出題傾向を踏まえて教職教養に重点を置いて学習の方が、効率的だと感じました。

六月には専門科目である高校国語の試験を受けました。出題内容は現代文・古典・学習指導要領で、準備期間はおよそ二か月でした。私が受験した年は、現代文では小説、古典では漢文が出題されました。過去問を分析すると、古文と漢文が毎年交互に出題される傾向があったため、その年は漢文だと予想して重点的に勉強していました。結果的に予想が当たり、当日は落ち着いて解くことができました。ただし、必ずしも同じ傾向が続くとは限らないため、これから受験する人には山を張りすぎず、満遍なく学習することを勧めたいです。難易度としては共通テスト程度だと感じたため、高校生向けの共通テスト対策問題集を使って演習を重ねるのも有効だと思います。また、学習指導要領は毎年ある程度出題範囲が決まっているものの、来年も同じとは限りません。重要な部分を中心に、全体を見渡して理解しておくことが大切だと感じました。

### 2. 二次試験について

二次試験では、八月に面接Ⅰ・Ⅱと教科等指導法が行われました。筆記試験とは異なり、自分の考えや人柄を直接伝える必要があるため、早い段階から対策を意識して準備を進めました。面接対策としては、大学の先生方をお願いして三回の面接練習を行い、さらに学内で実施された模擬面接にも四回参加しました。加えて、周囲に就職活動をしている友人が多かったため、その友人たちにも協力してもらい、何度か面接練習を重ねました。多くの人に見てもらうことで、自分では気づかなかった話し方の癖や表情、内容の分かりにくさに気づくことができました。

面接Ⅰ・Ⅱでは、志望動機や自分の性格、ICTを用いて授業した経験、ストレス耐性、ボランティア活動など幅広く聞かれます。そして、練習時よりも遥かに深掘りされると想定しておいてください。特に重視されていると感じたのは、「ICTの活用について自分なりの考え」や「自分の経験が教師になったときどう活かされるか」という点であり、自分自身の経験と結びつけて具体的に語れるかどうかが大切だと思いました。そのため、これまでの実習経験や学びを振り返り、自分が大切にしたい教育観を言語化する作業を繰り返しました。

教科等指導法では、高校国語の授業を想定した指導について問われました。設問では、学習指導要領を踏まえた目標設定や、授業全体の流れ、生徒にどのような力を身につけさせたいのかといった点を意識して答えることが求められます。そのため、理想的には指導観や教育観を整理し、授業構想を丁寧に準備しておくことが大切だと思います。しかし、実際に過去問を受けてみて感じたのは、内容を完璧に構想すること以上に、「書くことに慣れておくこと」が非常に重要だということです。教科等指導法の問題は記述量が多く、限られた時間の中で自分の考えを文章としてまとめる力が求められます。そのため、どれだけ知識があっても、時間内に書ききれなければ十分に評価されない可能性があります。最初は時間内に書き終えることができず、内容もまとまりに欠けていましたが、回数を重ねるうちに、設問の意図を素早く読み取り、構成を考えながら書く力が少しずつ身についていくので、とにかく書くことを勧めたいです。

### 3. 最後に

私たちが教員採用試験の勉強を始める時期には、多くの学生がすでに就職活動を本格的に始めていると思います。教員採用試験も私たちにとっては就職活動の一つであることに変わりはありませんが、その進み方や見え方は一般企業の就活とは大きく異なります。周囲の友人たちがエントリーシートを何社も提出し、一次選考、二次選考と段階を踏みながら進み、早い人では内定をもらっている様子を見ると、どうしても気持ちが焦ってしまうことがありました。特に、友人から「内定をもらった」という報告を聞いたときには、自分だけが取り残されているような感覚になり、不安が強くなることもありました。周りの就活生は、インターンシップに参加したり、企業説明会に足を運んだり、何度も面接を経験したりと、行動の量が目に見えて分かります。それに比べて、教員採用試験を受ける私は、日々コツコツと勉強をし、面接練習を数回行うだけで、本番はたった一度きりです。その違いを意識するたびに、「この進み方で本当に大丈夫なのだろうか」「自分はちゃんと就職活動をしていると言えるのだろうか」と不安になることもありました。

しかし、振り返ってみると、教員採用試験は一般的な就職活動とは形が違うだけで、本質的には同じ「自分の将来を決めるための挑戦」なのだと思います。日々の勉強や面接練習は、決して目立たなくても、自分の力を積み重ねる大切な時間でした。特に、限られたチャンスの中で自分をどう表現するかを考え続けた経験は、自分自身と向き合う貴重な機会だったと感じています。また、周囲と比べて焦ってしまう気持ちは決して弱さではなく、それだけ真剣に将来を考えている証でもあると思います。周りの進度に惑わされそうになったときこそ、「自分は自分の道を進んでいる」という意識を持つことが大切だと実感しました。教員採用試験は回数も機会も限られており、不安になりやすい試験ですが、その分、一つ一つの経験が自分の力として確実に積み重なっていきます。

これから教員採用試験に挑戦する後輩の皆さんも、周囲と比べて焦ったり、不安になったりすることがあるかもしれません。しかし、歩む道やペースは人それぞれです。周りがどれだけ先に

進んでいるように見えても、自分が積み重ねてきた努力は決して無駄にはなりません。自分を信じて、目の前の勉強や準備に一つずつ向き合ってください。皆さんが自分らしく力を発揮できることを、心から応援しています。

〈合格体験記〉

## なんとかなるのが人生、 なんとかするのが自分、なんとかできるのが自分

西 村 結 衣

(北海学園大学人文学部日本文化学科4年)

この度、札幌市中学校国語科でA登録をいただきました。ここでは、面接対策の話と絡めながら、教授受験を控えている皆さんに伝えたいことを書いていこうと思います。本来であれば1次試験や2次試験の筆記試験に対する対策なども書くべきだろうなと思いますし、これを読んでいる皆さんもそこが一番気になるところなのかもしれません。ただ、私自身、皆さんにアドバイスをできるほど勉強をしたかと言われると、していないというのが正直なところ。筆記試験の対策に関してはいろいろな場面で先輩や先生方から話を聞く機会があると思いますので、その中から自分に合った勉強方法や参考書を見つけていってほしいなと思います。

面接を受けるうえで大切にしてほしいことが2つあります。

1つめは「教員としての自分の軸を持つこと」です。端的に言うと、「自分がどんな教員になりたいか、どんな教員でありたいか」ということです。この部分は自分自身の経験から形成されている人が多いと思います。

私は小学3年生から大学1年生までバスケットボールをしていました。高校生の頃、キャプテンとしてチームをまとめなければいけないなかで、怪我が続き、なかなか自分が思うようにいかず、全てが嫌になってしまった時期がありました。そんな時に手を差し伸べてくれたのが当時の顧問の先生でした。「誰が何と言おうと俺はお前の味方だから、自分の思うままにやればいいんだよ。」この言葉が、真っ暗闇の世界に1人ぼっちだと思っていた自分にも味方がいるんだ、分かってくれる人がいるんだと思わせてくれました。また、この顧問の先生は国語の教科担任でもあったのですが、「お前の文章は面白いね、読んでいて楽しい。」と行ってくださったことで、自分では気が付かなかった自分の良さに気づき、自信を得ることができました。そして国語がより一層好きになりました。こうした経験から、私は「生徒の可能性や良さに気づいて、前向きに背中を押してあげられる」教員になりたい、そんな教員でありたいと思っています。

面接では多種多様な質問がされます。その時にいかにこの軸をブラすことなく回答できるかが大切だと私は思っています。例えば、「不登校の生徒にどのような声かけをしますか。」という質問が出されたとします。生徒の可能性や良さに気づいて、前向きに背中を押してあげられる教員でありたいと言っているのに、「このままだと成績危ないから学校来た方がいいよ」なんて声かけはしないはず。自分の軸をしっかりと持っていれば自然に一貫性のある回答ができると思います。これは直前の対策でどうにかなるものではないと思うので、今のうちからこれまでの人生を振り返りながら教員としての自分の軸は何かを考えておくことをおすすめします。

2つめは自分に対して自信を持つということです。

私の座右の銘は「なんとかなるのが人生，なんとかするのが自分，なんとかできるのが自分」なのですが，よく「なんでそんなに自己肯定感が高いの，なんでそんなに自分に対して自信があるの」と言われます。結論としては，「今自分が生きているから」です。大変なことも悩むことも上手くいかないことも多いけれど，その都度なんとかしてきたからこそ生きています。そしてこれは皆さんにも言えることだと思います。教職課程は決して楽なものではなかったと思います。1限から7限まで授業を受けたり，膨大な課題をこなしたり，例をあげればキリがないほど体力的にも精神的にも大変だったと思います。途中でやめていく学生もいる中で，これを読んでいる皆さんはその大変な時期を乗り越えてきたということです。そんな自分に自信と誇りを持ってほしいと思います。

自信は表情に，言葉の力強さに，眼の光に自然と表れます。自信が無くてクヨクヨしている人よりも，自信に満ち溢れた人の方が魅力的です。本番はとても緊張するかとは思いますが，ここまで頑張ってきた自分なら大丈夫，絶対にやれるという強い自信を持って臨んでください。

最後に

札幌市に合格するという事は決して簡単なことではありません。倍率の高さに不安になることもあるかと思いますが。ですが覚えていてほしいのは，どんなに倍率が高くても可能性は0ではないということです。倍率10倍，10人に1人，その1人にあなたが入れればいい。ただそれだけの事です。敵は自分自身ですが，自分の1番の味方も自分であるということを忘れないでください。ここまで頑張ってきたあなたなら絶対に大丈夫。心から応援しています。

〈退職に寄せて〉

## 振り返り見る連山に思う事

上 野 直 幸  
(北海学園大学人文学部講師)

思えば、縁があって本学教職課程に勤務させていただき、何も分からぬまま目の前の山を見上げながら歩んできた8年間でした。専任教授の皆様、教務センターの皆様、同僚の先生方、そして何より素晴らしき学生たちに支えられた毎日でした。先ずはこれら全ての方々から心から感謝の言葉を申し上げたいと思います。

校長としての責任ある6年間を終え、ほっとする間もなくの大学勤務でした。国語担当の前任者はいなかったため、全てが一からのスタート。当時は2号棟という昭和の建物の一室が教職指導室でした。正直言って、ここで自分は何ができるのだろうという不安で一杯でした。幸いにも同室の先輩たちは、そんな不安を見透かしたように色々教えてくださいました。一年目の山を登ることができたのは、周りの人たちのお陰だと思っています。

二年目からは少し流れが分かり、学生たちと共に学び共に歩むことができるようになりました。本学の学生は素晴らしく、皆が学ぶ姿勢を持っていて、この学生たちのためにもっと教員の魅力を伝えねばと心に念じました。学生たちとの出会いは、私の人生をより豊かなものにしてくれました。がむしゃらに学生と語り合った二年目でした。

ようやく教職課程の指導内容が定着してきたのが、三年目ぐらいからだったように思います。しかし、この頃コロナが流行し、授業が対面からオンライン授業へと移行していきました。せっかくの学生たちとの交流の機会も減り、少し元気がなくなった時期でもありました。それでも学生たちは課題をしっかりこなし、教職への意欲を切らさなかったことにも感動しました。

後半の三年間は、教員採用試験の合格率を徐々に伸ばし、教員として全道全国へ学生たちが数多く旅立っていきました。教員という仕事の大変さが言われる中でも、その仕事に覚悟をもって向き合い、努力する学生たちの姿を見てきました。それは、私にとっての幸せでもありました。これからの教育にとっても、この学生たちは大きな力になってくれることでしょう。微力ながら、学生たちと共により良い授業を目指して語り合った思い出が心に刻まれています。振り返り、見上げる八つの山。一つ一つの山に学生たちの顔と思い出が見えます。

最後に現役生・卒業生に向けて、私が大学生だった頃の思い出と、成功する人についての話を、引用文をもとに書きたいと思います。

教職課程を目指す本学の学生に比べ、私は大学時代、真面目でもなく、さして目標もなく日々を過ごしていたように思います。そのような生活の中で、太宰治の「人間失格」を読み衝撃を受けました。極めて暗い小説でしたが、その中に挿入されていた詩が自分の生活を変えていきました。フランスの詩人、ギンシャルル・クロオの「世間のある人人には……」の一節です。

してその翌日（あくるひ）も同じ事を繰返して、  
昨日（きのう）に異（かわ）らぬ慣例（しきたり）に従えばよい。  
即ち荒っぽい大きな歓楽（よろこび）を避（よ）けてさえいけば、

自然また大きな悲哀（かなしみ）もやって来（こ）ないのだ。

ゆくてを塞（ふさ）ぐ邪魔な石を

蟾蜍（ひきがえる）は廻って通る。

この後一念発起し、指導員として「少年の船」で子供たちと触れ合ったり、「難民キャンプ訪問」でカンボジアの子供たちに古着を配ったり、私なりの挑戦が始まりました。大変なこともありましたが、その中で大きな喜びを得ることができ、卒業後教員になるという次の目標へとつながりました。大学生活は何かには挑戦することで、自分が何をすべきかが見えてきます。勇気をもって挑戦してください。

次に成功する人について、私が共感した次の文を紹介します。

さて、「社会における成功とは何でしょう」「どんな人が成功するのでしょうか」アメリカの投資家で大成功した、ジム・ロジャーズ氏のインタビューの一部を紹介します。「人生でもっとも重要なことは忍耐を学ぶことではないでしょうか。世界は、十分教育を受けたのに成功していない人であふれています。頭がよくても、才能があっても、世の中には成功していない人がたくさんいるのです。私はイエール大学とオックスフォード大学という二つの有名な大学に行きました。でも、私と同じ大学に行った人たちはそれほど成功していません。欧米には『成績上位の学生が、成績下位の学生の会社で働く』という言葉があります。これはつまり、社長の方が学生時代は成績が悪かったということです。良い大学に行けば成功なのかというと、必ずしもそうではありません。では、成功する人はどんな人なのか。それは、あきらめない人。忍耐強い人です。成功する人は何があってもやめません。それは大学で学ぶことではなく、人生で学ぶことです。人生で成功するのに何よりも重要なことは、忍耐を学ぶこと。そして、失敗したとしてもそこから多くのことを学び、諦めずに続けること。それが成功する人の条件です。」

教職課程を学ぶ学生の中には、「私に教員なんかできるのだろうか」「人前で話すの苦手なんだよな」という声を聞きます。教員として成功する人は？という問いにも、私は上記の話のように、あきらめない人。忍耐強い人だと答えます。教職の免許を取得するために、他の人より多くの授業を受けようと決意した時の気持ちを忘れないでください。教員に必要な資質は授業力、生徒への愛情、高い人間性などといいます。もちろんそれらは必要な資質ではありますが、やはり私は我慢強くあきらめない心を持ち続けることが一番だと思います。それは教師になってからも同じです。私はこの仕事から離れますが、これからも卒業生や現役生を見守り応援していきたいと思っています。「念ずれば花開く。」私の好きな言葉です。振り返り見る連山には、様々な多くの花が咲き誇っています。その花たちを見ながら、感謝の気持ちをそこに置いて下山します。ありがとうございました。

〈退職に寄せて〉

## 教職に想う

板 東 眞 一

(専門学校北海道リハビリテーション大学校講師)

昨年3月末に退職して間もなく1年が過ぎようとしています。月日が経つのは早いもので、ときおり過ぎ去った教員生活や教職課程での出会いなどを思い返しながら毎日を過ごしています。縁あって思いもよらず北海学園大学教職課程に身を置き、教員養成に8年間携わることができたことはこの上ない幸せでありました。教職課程専任の先生方をはじめ教務センターのみなさん、所属した人文学部の先生方、学部事務のみなさん、そして仕事を共にした教職指導室の先生方にこの場をお借りして感謝申し上げます。

私が担当したのは英語科教育法Ⅰ・Ⅱ・Ⅳと教職総合演習、そして教職実践演習でした。勤務日は教職指導室で執務し、来訪した学生との雑談や時には相談に乗ったり助言をしたりしていました。講義やゼミの準備をしながらで時間に追われることもありましたが、学生たちの話に耳を傾け、思いを共有する時間はとても楽しく、気持も若返るような感覚を覚えました。

今回、教職課程年報に一文を掲載する機会を得ましたので、教職を目指す学生たちには是非伝えたいと思い大切にしてきたことなどを書き留めてみたいと思います。

### できることと教えること

「授業は英語で行うことを基本とする」は今では当然のように言われています。今からおよそ半世紀前、大学生の私は教授から授業は英語でやりなさいとの指導を受け、学習指導案を英文タイプで作成し、模擬授業はすべて英語で行っていました。これを初任校で当然のこととして授業で実践しました。私の初任校は町立の農業高校で、当時は全日制の1年生と定時制の2年生以上の生徒が在籍していました。その1年生の最初の授業で、当たり前顔をして英語であいさつして英語で板書しながら自己紹介を始めたところ、きょとんとした顔の生徒たちから「何言ってるかわかんねえ」「何書いてるかわかんねえ」の声が返ってきました。大失敗です。何と独りよがりな授業でしょうか。教員失格です。

英語科教員が英語を使える、英語ができるのは当たり前のことです。授業では教室英語をはじめ授業展開に応じてさまざまな英語を使います。でも英語を使う前提は生徒が理解できることです。教員が使う英語は、意図的・系統的に計画され十分に検討されたステップを踏んで指導し、徐々に理解できる語彙や表現を増やすなど生徒とのコミュニケーションを図るための配慮が必要です。教員が英語を使うのは、生徒の英語運用能力を高めるためでなければなりません。

教員に英語力は必要ですが、教員が英語ができるからといって、生徒に英語を教えることができるかというとは言い切れないのです。自らの英語力を高めるための努力とともに、指導理論や指導方法への理解を深め、そして指導技術を磨くための研鑽が大切です。

わかる、できる、おもしろい

「中学校・高校で受けた英語の授業体験から最高の授業と最低の授業を教えてください」

英語科教育法Ⅰの最初の講義で8年間問い続けました。学生たちは授業の記憶をたどりながらその授業内容の詳細と最高または最低と結論付けた理由をまとめてレポートを提出します。一人一人にコメントを書き加えて返却するのですが、もちろん中学校・高校の英語科教員を批評したりはしません。英語科教員を目指す学生たちに、自らの授業体験を良き教材とし、これから大学で学び研究していく教授法や指導理論、指導技術などを根拠として振り返るきっかけを提供したかったのです。英語学習をとおして生徒が何を身に付けるために、教員は何をどのように指導するのか。その答えは必ずしも一つではありません。最高や最低と評価した授業を英語科教育法での学びと研究をとおして理論的に考察し、問題点を発見し改善して自らの授業に活かす視点を養ってほしいと思いました。

そこで授業です。「あなたの授業で大切にしたいことは何ですか」と私が質問します。学生たちはしばし考え、やがてそれぞれの考えを述べ始めます。いろいろな大切があってももちろん良いのです。みな同じ必要はありません。でも生徒にとって授業が理解できない、問題が解けない、英語で自分を表現できない、つまらないものだとしたら、この授業にいったいどんな価値があるのでしょうか。学生たちには「わかる、できる、おもしろい」授業実践ができるようしっかり勉強してほしいと思いました。

ただ見るにあらざ

「医者診る 看護師は看る ただ見るにあらざ」

新聞のコラムに載っていたあるクリニックの壁に貼ってあった言葉です。医療の専門家としての気概が伝わってきます。では、教育の専門家ならどの漢字をあてるでしょうか。生徒あつての教員ですから見る対象は生徒です。何となく注意力散漫ではいけません。見て見ぬふりなどもつてのほかです。授業で教える生徒、HRの生徒、部活動の生徒などさまざまな場面で関わる生徒が大勢います。しっかりと生徒と向き合う姿勢と行動が必要です。やはり「観る」でしょうか。生徒は教員の心を察し人物を観ます。教員は教育の専門家としての心を持ち生徒を観たいものです。「教員は観る ただ見るにあらざ」です。

さて現在、私は医療の専門家を目指し国家試験合格に向け励んでいる専門学校生の英語を担当して8年目を迎えようとしています。「先生の授業は癒しですから」と言われ、私にとっては最高の誉め言葉でありがたいことです。教職課程の学生たちに話してきた言葉を噛みしめながら毎回授業に臨んでいます。記憶力と体力に若干の衰えを感じますが、知識・技術技能のアップデートを図りながら、これからも「英語が楽しい」と実感してもらえよう教育の専門家の一人として励んでいこうと思います。

〈業務報告〉

# 2025年度 教職準備研修会（学外研修）報告

元 紺 谷 尊 広

（北海学園大学経営学部講師）

（2025年度担当：後藤 聡・元紺谷尊広・田中弥栄子）

## 1 はじめに

本学教職課程の教職準備研修会の一環として専門高等学校及び中学校の視察研修を実施してきた。この内容で実施している理由としては、本学で学ぶ学生のほとんどが普通高等学校の出身者であるため、「北海道の高等学校を知る」「地域の中学校での実践を学ぶ」ことに重点を置いているためである。

また、学外研修の目標として、将来、教員として採用された場合には、特に高等学校の場合は専門高等学校や定時制課程の高等学校に勤務するケースが多く、中学校での採用も都市部よりも地域での採用が目立っているためである。

近年はコロナ禍の影響により中止あるいは1日日程での実施であったが、昨年度からコロナ禍以前の1泊2日日程で実施をしている。今年度の研修は北海道岩見沢農業高等学校と旭川市立緑が丘中学校の2校で実施し、宿泊先では同じ志を持つ者同士の交流が盛んに行われていた。

## 2 学外研修の目的

### (1) 学校現場を知る

将来教員となった場合には、専門高校に勤務する場合もある。したがって、専門学科の理解を深めるとともに、学校現場を学生の立場で見て、今後の学びを深めさせる。

### (2) 教職課程で学ぶ仲間の連帯を図る

コミュニケーション不足が指摘されている。そのため、教職課程で学ぶ学生同士が宿泊研修を通してコミュニケーションを図りたい。

参加者による交流も計画し、積極的な気持ちで交流を図り情報を共有し教職への意識を高めさせたい。

また、教員として宿泊研修の引率をしなければならないことも考え、引率者としての自覚を養う。

## 3 2025年度 教職準備研修会（学外研修）実施要項

本研修は教職課程が主催し、教職課程3年生を対象として、道内において先進的な教育活動を実践している中学校・高校を訪問し、研修をとおして学校教育への知見を深めるとともに、教職を志すものとしての資質の向上を図ることを目的としています。

- 1 対 象 教職課程3年生
- 2 期 日 2025年9月18日(木)・19日(金)
- 3 訪 問 先 北海道岩見沢農業高等学校  
旭川市立緑が丘中学校
- 4 宿 泊 先 国立大雪青少年交流の家(上川郡美瑛町白銀温泉 ☎0166-94-3121)
- 5 日 程

9月18日(木)

- 9:00 教務センター前ホール集合
- 9:15 出発(貸切バス)
- 10:15 北海道岩見沢農業高校 到着  
学校概要の説明・農業実習見学等
- 12:15 北海道岩見沢農業高校 出発
- 12:30 イオンスーパーセンター三笠店 到着(昼食・休憩)
- 13:30 イオンスーパーセンター三笠店 出発
- 16:00 大雪青少年交流の家 到着(泊)  
交流会

9月19日(金)

- 9:00 大雪青少年交流の家 出発
- 10:00 旭川市立緑が丘中学校 到着  
学校概要の説明・授業参観等
- 12:00 旭川市立緑が丘中学校 出発
- 12:30 イオンモール旭川西店 到着(昼食・休憩)
- 13:30 イオンモール旭川西店 出発
- 15:30 大学 到着

- 6 参加申込 フォームに入力する。(※参加定員44名)  
<https://forms.gle/SNdXeWUWyiCNwhKc6>



- 7 申込期間 6月30日(月)~7月11日(金)  
※定員になりしだい申込みは締め切ります。
- 8 参加費 3,000円(宿泊費・食費・交流会費) ※昼食代は各自負担  
※参加費を納める期間は7月14日(月)~18日(金) ※納入時は釣銭のないように。  
①上野ゼミ, 小形ゼミ, 田中ゼミ, 元紺谷ゼミの学生はゼミ担当教諭に納める。  
②その他のゼミ生及びゼミを履修していない学生は教職指導室(1号館2階)に来室し直接納めてください。(期間は7月14日(月)~18日(金)の13:00~15:30 この期間に都合がつかない学生は元紺谷までメールで相談してください。)  
メールアドレス(元紺谷): motokon@hgu.jp
- 9 ガイダンス 各参加者にガイダンス資料をメール送付します。動画を視聴してもらいます。
- 10 学生実行委員の募集(数名) 交流会の企画・準備・運営等を担当

## 4 学外研修報告

①

### 学外研修の成果

経済学部経済学科3年

村田陽菜

今回の学外研修では、北海道岩見沢農業高等学校と旭川市立緑が丘中学校の2校を訪問しました。

1日目に訪れた岩見沢農業高等学校では、農業高校ならではの取り組みを学ぶことができました。例えば、農家がコストパフォーマンスを重視するあまり生産しないような作物を学校で育て、その栽培方法を研究することで、地元の農家とその結果を情報共有している取り組みです。また、北海道では生産が難しいとされるお茶の栽培に挑戦する研究も行われており、一次産業を支える若者が減少している中で、このような活動を通じて地域の活性化や地元産業を継承する人材を育てる農業高校の魅力を強く感じました。

2日目に訪れた旭川市立緑が丘中学校では、ICTを積極的に活用している学校として、実際に授業を見学させていただき、ICTを効果的に授業で活用するために意識すべきポイントを学びました。複数の教科の授業を見学する中で、教科や先生ごとにICTの使用方法が異なることに気づき、大変勉強になりました。また、自分も将来、ICTを使って効率的な授業を行う必要があると強く感じました。

2日間の学外研修を通じて、教師になるという思いが一層強まりましたが、同時に模擬授業や教育実習に向けて、ICTを上手に活用した授業づくりのスキルをさらに磨く必要があると痛感しました。

②

学外研修の成果

経済学部経済学科3年

奥山孔太

今回の学外研修では、一日目に北海道岩見沢農業高校へ、二日目には旭川市立緑が丘中学校へ訪れた。この二日間を通しての学びや気付きはとても貴重な体験となった。

一日目の北海道岩見沢農業高校では、普通校とは違う農業高校特有の取組みが行われていた。具体的には、野菜や果物、コメなどの栽培や、豚や牛などの飼育されている様子を見学させてもらうことができた。敷地が普通校とは比べ物にならないほど広く、北海道で栽培できるほとんどの種類の野菜や果物が栽培されているとのことだった。コメへの農薬をまくためにドローンを使用しており、手作業で農薬をまいているという自分の先入観が覆されることとなった。この学校を訪れることで農業高校がここまで農業に関して専門的な体験ができるような学校だと知ることができた。

一日目の夜に国立大雪青少年交流の家で宿泊した。名前に青少年交流とあるように、宿泊者同士での距離が近い印象を持った。そこでは、教職課程をとっている者同士で教職関係や学校、プライベートなどの話をし、親交を深めることができた。また、教職課程の講義の先生とも話すことができ、とても貴重な体験となった。

二日目の旭川市立緑が丘中学校では、主に授業見学をした。教育実習生の授業も見ることができ、楽しい体験となった。ICT利用に力を入れている学校ということで、一人一人端末所持していることが当たり前のように、自分が中学生のころとは学び方が大きく違うと実感した。また、ICTを利用することにより、人前で発表することが苦手な生徒でも積極的に授業に参加できているという印象だった。

この二日間では数多くの貴重な体験をすることができた。教育現場の現状を知ることができたので、自分が教育実習をする際に役立てたいと思った。

③

学外研修の成果

経済学部経済学科3年

三 国 大 輝

私は今回の学外研修で北海道岩見沢農業高校、旭川市立緑が丘中学校に行きました。どちらの学校も自分が通ってきた学校とは違う姿があり、新しい学校に出会ったかのような衝撃がありました。まず岩見沢農業高校では主に設備の見学をして回りました。肉、野菜、果物、米などを育てる環境が整っていて、命の大切さを一番近くで感じられることや、自分たちで育てるからこそ特別感を感じられる教育が詰まっているなど思いました。また農家さんとのつながりや生産したものを販売するなど地域の人とのつながりも大切にしていることにも感心しました。

旭川市立緑が丘中学校では社会科の授業を中心に授業を見学しました。自分が中学生、高校生の時には、ICTの活用はなく、模擬授業でICTを使っても実際どうなのだろうという不安もあったので現場に行って授業を見ることでICTの活用方法や授業の展開の仕方など今後の授業作りに参考になることがたくさんありました。また実習生の授業を見学できたことで来年自分が実習に行くことのイメージが少しできたので、貴重な体験になりました。

二日間の研修の中で、普段会わない学科の仲間と寝食をともにしたことにより教職を頑張ろうと思えたり、これからもこの繋がりを大切にしていきたいと思いました。

④

学外研修の成果

経済学部経済学科3年

小島 琉斗

今回の学外研修で私は岩見沢農業高校と旭川緑が丘中学校を訪問した。まだ中学校を卒業して10年も経っていないが、私の覚えていた中学校の学習環境とは大きく変わっていた。

まず初日は岩見沢農業高校を訪問した。特に私が印象に残ったのはドローンに関する授業だった。岩見沢農業高校は高校在学中にドローンの免許を取れる授業プログラムが組まれており、免許を取った学生が実際にドローンを操作し、農作物に水を与えていた。農家の作業量の負担軽減や人手不足の解消、そしてICT化が進む現代でこのような取り組みは今後の日本の農業問題を解決するのに不可欠だと考える。

2日目は旭川緑が丘中学校を訪問した。旭川緑が丘は文科省からDX推進指定校として登録されており、ICTを活用した様々な授業を見ることができた。生徒一人一人にiPadが支給されており、見学した授業では授業中に生徒がiPadを見ながら授業に参加している姿が見られた。数学では関数を入力するとグラフが表示され、そのグラフを基に、生徒が関数の性質を理解していた。英語では、ポスターをiPad内にダウンロードされている編集アプリで作っていた。また、理科では実験の前に実験のやり方を紹介する動画を見せ、すぐ実験を行えるようにするなど、ICTを活用した新しい授業が見られた。

私は今回の2校を訪問して、全く新しい授業を見た。今回の訪問から私はICT化が進む中で、時代に合わせた授業が求められていると感じた。

⑤

学外研修の成果

経済学部経済学科3年

澤田 瑠 凧

9月18日から19日にかけて教職課程履修者の学外研修を行った。非常に学びと仲間との距離が縮まった研修であった。

初日は、岩見沢農業高校へ訪問し、農業高校ならではの授業内容や教室の施設などを見学した。敷地が非常に広く、学科も種類が豊富にあったため、学生一人一人目標ややりたいことができる学校、環境になっており将来の職業に直接つながるようなカリキュラムが組まれていたことが新たな発見になった。また、農業高校であっても普通科の高校生が受けている数学や理科の授業も開講されていることも驚きであり、文部科学省の学習指導要領の記載内容内で授業が行われているのだと思った。個人的に一番興味深かったのは、学生寮に入寮しなければいけないというルールがあったことである。家畜などを育てている農業高校は生徒が学校にいる時間以外にも世話をしなければいけなく、先生方も交代で教師の寮に住んでいるそうである。それもまた、農業高校ならではの、忙しそうであるが普通科の先生とは違った教師生活をおくっていると考えたらそれはそれで楽しそうだなと感じた。学校見学が終わると昼食をとり、美瑛の宿泊施設に向かった。普段話すことはない同じ目標を持った仲間と過ごすのは非常に楽しいものであった。また、お酒の場では先生方とも多く話す機会があり、教職関連の話はもちろん、関係のない話までできて、今後の教職関連で困ったことがあったときは相談しやすい関係性を作ることができたと思う。

二日目は旭川市立緑が丘中学校に訪問し、3時間目の授業を見学することができた。私は社会科教師を目指しているので社会の授業をメインに見学した。この学校ではICTを活用した授業が活発に取り入れられており、生徒に一人一台端末機器が与えられていて、Googleの機能を多く活用していた。私も授業で取り入れられるような授業づくりを考える必要があると感じた。また、実習生が授業を行っているところもあり、その時感じたのは板書の時の字であり、字をきれい書くというのは非常に大事だと思ったし、人に見られているので余計に黒板に書くという作業に慣れる必要があるとも思った。授業を見学できたことは今後の私たちの授業づくりにも参考になるし、実際の現場を見ることで生徒の反応も見ることができたので非常に良い経験となった。

全体を通して、この研修は私自身非常に学びの多い研修となった。研修に行く前は自分が教壇に立って授業を行うイメージが全くできなかつたが、実際に学校に訪問することで少しでも教壇に立って授業をするイメージを沸かせることができたと思う。来年の6月は教育実習があるのでまずはそこに向けて残りの模擬授業などで準備をして、将来教師として教壇に立てるようにより一層努力を惜しまないようにしようと思えた。

⑥

学外研修の成果

経済学部地域経済学科3年

大田結菜

私は今回の学外研修を通じて、勉強する環境という面で発見があった。

岩見沢農業高校では、各学科で専門的に学ぶことはもちろんであるが、座学だけでなく未来の産業の在り方についても考えさせられることばかりだった。

岩見沢農業高校では農業ドローンの資格取得や実習ができる。農業用ドローンは費用を抑えられ、高齢化が進む農業において今後ますます活用場面が増えると考えられる。その資格を高校生のうちから取得しておくことは、卒業後すぐに活用できる強みになると思った。また、他の農家とは違い高校であるため失敗ができるという点も新たな発見だった。正しく育てることも大切だが、新しい育て方や費用を抑える研究も今後の農業を発展させるために必要であり、それを迷わず挑戦できるのは大きな強みだと感じた。

さらに、全ての学科に専門的な機械があり、その多くは十数万から数百万円もする。そのため、実践的なことができるのだ。

一方、旭川緑が丘中学校では子供たちの学び方について発見があった。ICTを活用した学習を主に行っており、どの科目でも利用されていた。例えば数学では図形やグラフの作成や社会の穴埋め問題をテレビに映し、先生にとっては授業の効率化につながり、生徒にとっても見やすいというメリットがあった。

特に驚いたのは各教室や特別教室の工夫である。理科室は後方の生徒でも実験が見やすいようにテレビを複数台設置しており、技術室には道具の使い方を示すQRコードが貼られていて、使い方が分からなくなったときに読み込めば確認できる仕組みだった。ほかにも、みんなの前で発表するのは難しくても、チャットであれば質問しやすい生徒もいて欠席した生徒も授業をリアルタイムで見ることができ、学習の遅れを防ぐことができる。

今回の研修を通して、生徒にとっての学びやすさを実際に見て実感することができました。様々な授業形態を知ることは、授業の分かりやすさや効率にもつながるため、この経験を活かして今後の授業を考えていきたいと思いました。

⑦

## 学外研修の成果

経済学部地域経済学科3年

関口生祥

学外研修に参加し、将来教員になることにおいて多くの経験をし視野が広がったように感じた。一日目の研修では岩見沢農業高校に訪れた。農業高校には初めて訪れたのですが、農業高校の説明を受け農業高校の中に様々な学科があること、最新のテクノロジーを使った農法（ドローンなどを使用するなど）がある事を知った。農業高校のカタチというのを学んだ気がします。私は農業高校をあまり知らなかったのですが、学んだことで新たな経験をすることができました。二日目では旭川市の緑が丘中学校を訪れた。この中学校はICT教育の「実践研究指定校」に選ばれており、ICTの実践的な教育が実施されている。授業見学の最中には多くの授業でICT技術を多く使っている機会が多く生徒も当然のように扱っている姿にほんの少しの間にこれほど授業の姿が変わるのかと私が中学校の頃の授業の違いに驚きを覚えた。それだけでなく中学校の先生の授業から得られることが多くいい刺激をもらいました。

研修先では訪問だけでなく、教職を目指す仲間との交流がひじょうに思い出に残っている。いままで関わっていなかった仲間とも会話をすることで新たな友情や会話を楽しむことができとてもいい経験であり学外研修に参加してよかったと感じました。この経験や刺激を生かして、これからの生活や採用試験に向け励んでいきたい。

⑧

学外研修の成果

法学部法律学科3年

糟谷 柊太

2025年9月18日、19日の二日間にわたる学外研修は、これまで大学の講義で学んできた教育におけるICT活用の理論が、実際の教育現場でいかにダイナミックに実践されているかを目の当たりにする極めて貴重な機会となった。

岩見沢農業高校の教育実践の根底には、北海道農業が直面する「就業者の減少や高齢化」という避けては通れない深刻な社会課題が存在する。この課題への対応として、作業の機械化・省力化は喫緊のテーマであり、同校の教育は、この地域全体の危機に対する直接的かつ戦略的な応答として位置づけられている。つまり、同校におけるICT活用は、流行や単なる技術導入ではなく、地域の持続可能性を担う人材を育成するという明確な目的意識に裏打ちされたものなのである。同校が掲げる「スマート農業」とは、ロボット技術や情報通信技術（ICT）を活用し、農業の省力化、精密化、高品質生産を実現する新たな農業の形である。学校はこの最先端の概念を教育の中心に据え、生命、食、環境といった分野の高度で専門的な知識と、新たな農業技術を習得した人材の育成を目指している。授業や実習見学では、生徒たちが「スマート農業（ICT）が地域の課題解決に有効」という仮説を立て、稲作のDX化に向けた技術検証に主体的に取り組む姿が印象的であった。岩見沢農業高校のモデルは、従来の職業教育の枠組みを超えている。それは、単に産業界が必要とするスキルを持った労働者を供給するのではなく、学校自体が地域の課題解決と活性化を牽引する「エンジン」となる可能性を示している。生徒たちは、自分たちの学びが、自らの家族や地域社会が直面する高齢化や後継者不足といった現実の問題を解決に導く力になることを実感しながら学習に取り組んでいる。この「当事者意識」と「目的意識」こそが、学習への強い動機付けとなり、生徒たちを未来の地域社会を創造する主体へと成長させている。この教育モデルは、学習の意義と社会貢献を直結させる、極めて強力な教育的アプローチであると感銘を受けた。

岩見沢農業高校が地域課題を起点としていたのに対し、旭川市立緑が丘中学校の実践は、文部科学省のGIGAスクール構想という国の大きな教育政策を背景に持つ。同校は、全国のモデル校となる「リーディングDXスクール事業」の指定を受け、1人1台端末（iPad）とクラウド環境（Google Workspace）を最大限に活用した先進的な教育実践の創出と全国への展開という使命を担っている。その取り組みは、特定の教科に留まらず、教育活動のあらゆる側面に浸透していた。緑が丘中学校のICT活用の核心は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実という明確な教育哲学にある。ここで重要なのは、ICTの活用が目的化されているのではなく、あくまでこの教育哲学を実現するための「手段」として位置づけられている点である。同校のDXは、授業実践に留まらない。保護者からの欠席連絡をGoogleフォームで受け付けることで、朝の電話対応における教員の業務負担を軽減するなど、校務の効率化（校務DX）にも積極的に取り組んでいる。これは、教員がより教育活動そのものに集中できる環境を整備するという、学校全体の変革への強い意志の表れである。緑が丘中学校の一連の実践は、教員の役割そのものの変容を促している。従来の、知識を伝達する教員像から、生徒たちが自ら学びを構築していくプロセスを設計し、支援する教員像へと、その役割が大きくシフトしている。学習活動の中心が教員から

生徒へと移行することで、生徒の主体性が最大化され、コミュニケーション能力や情報活用能力といった、これからの時代に不可欠な資質・能力が育まれている。これは、教室における根源的な変化であり、教育の未来像を指し示すものだと強く感じた。

この二日間の学外研修は、私にとって「ICT教育」という言葉の解像度を劇的に高める経験となった。ICTの導入は、それ自体が目的ではなく、地域社会の未来を創造するため、あるいは学習者一人ひとりの主体性を最大限に引き出すためという、明確な教育的目標を達成するための強力な手段であることを、両校の実践が雄弁に物語っていた。この学びを単なる感想で終わらせることなく、今後の教育実習、そしてその先の教員人生における具体的な指針としていきたい。

⑨

学外研修の成果

法学部法律学科3年

川村心咲

9月18日、19日に行われた学外研修では、旭川緑が丘中学校と岩見沢農業高等学校へ訪問した。自分が通っていた中学校・高校とはすべてが異なっており、とても新鮮であった。

緑が丘中学校では廊下に貼られていた色とりどりの提示物を見て、生徒たちが意見を出し合いながら作ったことが伝わり、互いに協力する雰囲気と学校全体の温かさが感じられた。ICTを活用した授業を見学し、先生ごとに異なる工夫や多様な使い方があることを学んだ。しかし、特別支援学級の授業を拝見したことでICTの活用以上に、一人一人の生徒に合わせてわかりやすく授業を組み立てることの重要性を実感した。

農業高校では、普通高校には見られない多様な学科が設置されており、校舎の設備や授業内容も独自の特色を持っていた。なかでも心に残ったのは、環境造園科の生徒が自分の造園を作り上げている真剣な姿だった。高校のうちから専門分野を学ぶことは、将来の大きな強みになると感じた。

教育は常に変化するが、どのような変化の中でも生徒の声に真摯に耳を傾けることが大切だと今回の研修を通じて学んだ。教育実習ではこの学びを活かし、生徒と向き合いながら自分自身も成長したい。

⑩

学外研修の成果

法学部法律学科3年

伊藤綾音

今回の研修では、岩見沢農業高等学校、旭川市立緑が丘中学校を訪れた。

岩見沢農業高等学校は、文部科学省教育指定事業DXハイスクール採択校となっており、一般受験者より大幅に安い値段で資格を取得することができるという点から、ドローンを用いた農業の方法を学んでいた。また、トマトの栽培方法については、アプリと連携をすることにより、水分状況を遠隔から把握することができ、もしも水分が足りない時もアプリから水分を与えることができるということだった。

旭川市立緑が丘中学校は、文部科学省リーディングDXスクール事業を取り入れており、ICTを活用した授業が多く展開されていた。ICTを活用することにより、授業を休んだ生徒も同じ媒体を見ることができるといった利点がある。また、ICTを用いることで、生徒たちの主体的な学習につながるという点から、従来の授業の様に教師が一方的に授業をする形式ではないので、より机間巡視をしやすく、手の止まっている生徒などに積極的に声掛けをすることができるという利点もあるということだった。授業開始時に当授業時間の内容を記載したものを配布することにより、早く進んだ生徒はその内容に沿って、自ら進めることができ、遅れた生徒も次に何をしたらよいかわかりやすいという利点があった。

以上2校の視察から、現代の学校現場で働いている教師は、常に勉強をして最新技術や知識をアップデートしていく必要があるということを再認識する良いきっかけとなった。それに加え、使いこなせるようにしていくことも重要ということがわかったので、今後は、模擬授業などでも積極的に活用していきたい。

今回の研修では、普段同じ授業を履修していてもなかなか話すきっかけがなかった方などと交流を持つことができ、とても有意義な時間となった。お忙しい中、研修の準備、当日の運営等をしてくださった実行委員の皆さん、先生方、ありがとうございました。

⑪

学外研修の成果

法学部法律学科3年

馬場 胡 春

今回の学外研修では岩見沢農業高等学校と旭川市立緑が丘中学校を訪問しました。

1日目の岩見沢農業高校では、ドローンを用いた農業やDXの推進といった先端的な取り組みを行っていることを知ることができました。特に、生徒が実際にドローンを操作し、農地の様子を確認している姿が印象に残りました。従来の農業教育にとどまらず、デジタル技術を積極的に導入することで、生徒が未来の農業を担う人材として日々学んでいることがわかりました。

2日目の旭川市立緑が丘中学校では、タブレットを活用した授業を見学しました。生徒が調べ学習や発表にICTを活用することで主体的に学んでいる姿を見ることができました。ICTは単なる便利な道具ではなく、生徒の思考や表現を引き出す教育の手段として機能し、どのような教科でも積極的に活用されていることがわかりました。

今回の研修を通して、高校では専門性や職業につながる力を育成するために、また中学校では基礎学力の定着や主体的学びを促すために、それぞれICTが活用されていました。教育段階によって技術の使い方が工夫されていることを理解できました。

教員に求められるのは単に新しい技術を使うことではなく、それを教育の目的に結びつける力が必要なのだと感じました。今後はICTを使いこなすと同時に、生徒の学びを深められる授業や指導法を考えていきたいです。

⑫

## 学外研修の成果

法学部政治学科3年

小野木 華 花

9月18日～19日にかけて学外研修に参加しました。

1日目は北海道岩見沢農業高等学校を見学しました。この学校は7つの学科を有し、様々な資格を取ることが出来ます。スーパーサイエンスハイスクールに指定されており、授業で実際に使用される木材を切る機械や、アプリで状態を管理するビニールハウスなどを見せていただきました。また、日本庭園を造る授業やドローンを使って田畑を管理する授業を見学させていただき、学科によって多種多様な授業が行われていることに驚きました。普通科の高校とは全く違うカリキュラムで、地域の農家や企業と学校が連携しているため特別な体験ができるため、より将来につながる学校生活がおくれると感じました。

2日目は旭川市立緑が丘中学校を見学しました。こちらの学校はリーディングDXスクールに指定されており、ICTを積極的に授業に組み込んでいました。生徒に一台ずつiPadが支給され、数学の授業では二次関数の式を入力してコンピュータにグラフを表示させたり、英語の授業では好きなアプリを使用してポスターを作成したりしていました。私が中学生の頃はすべて手書きで行っていたものが、デジタル化し勉強の効率が上がっていると感じました。また、ICTを利用してクラス全員の意見を集約したり、課題を提出させたりすることが出来るので教員側も業務をスムーズに行うことが出来ていました。ただ、使い方を誤ってしまうと取り返しのつかない事態を招いてしまうこともあるため、常にネットリテラシーを意識させる指導が必要だと感じました。見学した授業でも、教員の話に耳を傾けず、iPadに夢中になっている生徒や答えを調べてしまう生徒が見受けられたので、工夫が必要だと思いました。

今回の研修は、実際にICTがどのように教育現場で利用されているのかを把握することができ、どうすればもっと授業が良くなるのかを考えるきっかけになりとても有意義なものになりました。これからの模擬授業や、来年の教育実習に活かしていきたいです。

⑬

## 学外研修の成果

法学部政治学科3年

山口 泰史

2025年9月18日、19日に、教職課程一泊二日の学外研修にて、岩見沢農業高校と旭川市立緑が丘中学校を訪問した。宿泊先は、国立大雪青少年交流の家である。

まず、一日目は、岩見沢農業高校（通称：岩農）を訪問した。岩農は、農業に特化した学校で、特に生徒の就職先の斡旋や地域や企業のつながり、農作物の栽培の研究に力を入れている。また、DXハイスクールとして、ドローン操縦士の養成をしている。実際に農業で活用しているドローンの飛行で、農薬を散布する様子を見た。電子制御されているが手慣れたように生徒がドローンを操縦していた。施設見学では見たことがない機械や重機などがあり、それを生徒が操縦・運転するという。

私が一番、驚いたのは環境造園科の庭園づくりで、生徒一人一人が区画されたスペースで作業を行っていた。完成形を見たが、クオリティがかなり高く、岩農の指導力と日本の技術力、さらには和の美しさを感じた。

岩農を出発し、三笠のイオンのガストにて、先生方とともに昼食をとった。ガストを選んだ理由は、レストランがガストしかなくロッセリアという気分ではなかったからだ。

そして、美瑛町の国立大雪青少年交流の家に到着した。その晩に、われら実行員会が中心となって教職課程を履修する者たちでの交流会を開催した。初めて酒を酌み交わす仲間や先生方と打ち解けることができ、そこには教員を目指す者たちの絆が生まれたと感じる。この仲間との繋がりは、将来の茨の教員人生において、お互いを助け合い励まし合い切磋琢磨することができるかと私は信じている。

二日目は、旭川市立緑が丘中学校を訪問した。旭川市立緑が丘中学校は、DXスクールの指定校でICT教育に力をいれている学校だ。各教室で、様々な教科の授業が行われていた。そこで共通していた点は、生徒と先生がICT機器（主にタブレット）を駆使していたことだ。例えば、美術ではタブレットに補助線を表示し正確な模写を生徒が描いていたことだ。私の時代の美術の授業とは、全く異なっていた。また、理科の授業では生徒の実験結果を自らタブレットに打ち込み、すぐに全員にその結果が共有されていた。

私が一番感心したのは、どの授業においても生徒自身が主体的に学習に取り組んでいた点だ。ICT機器を使うことによって、生徒の主体的な姿勢を促し、より授業に活気がでるのだなと感じた。

今回の学外研修を通して、今まであまり想像つかなかった未来の自分の姿が少し見えた気がする。そして、最先端に行く学校を見学できたことはとても私にとって貴重な経験だった。この経験を活かし日々精進していきたい。

最後に、今回、学外研修の準備、企画、案内等を行っていただいた、すべての人に感謝したい。みんなありがとう！

⑭

## 学外研修の成果

人文学部日本文化科3年

油谷 怜莉

今回の学外研修では、一日目に北海道岩見沢農業高等学校、二日目に旭川市立緑が丘中学校に訪問し、見学させていただいた。

一日目に見学を行った北海道岩見沢農業高等学校では7つの学科があり、学科ごとに使用する教室や実習室が異なる。それぞれの実習室で授業が行われるため、農業に関わる専門的な知識が深められる。この施設は普通科高校にあるような教室ではなく、例えば木工加工室や食肉加工室であったり、屋外であれば建築演習を行う土地や牛舎・鶏舎・豚舎、多くの作物を育てたりといった、学科の学習内容に沿って作られている。そのため学校内の敷地は広大であり、実際に歩いてみると敷地の広さと実習施設の豊富さに驚かされた。この土地の広さを生かしてのびのびとした学習が行えるのだろう。

現在の教育現場ではICTの積極的な利用が重視されているが、農業高校ではどのように取り入れられているのか疑問であった。「農業」と聞くとアナログ的な印象を受けてしまうが、現在の農業ではテクノロジーを活用していることを目の当たりにした。実際に作物を育てている水田や畑では、ドローンを使用して状態を観察するという実習が行われている。ドローンの操縦免許を取得することができるため、操縦も生徒が行っている。他にもソーラーパネルを取り入れているビニールハウスもあり、ここでもICTが使用されていた。一見アナログ的な作業が多いように思える農業にも、最新テクノロジーの導入が進んでいることが分かった。

二日目に見学を行った旭川市立緑が丘中学校は、リーディングDXスクール事業指定校としてICTの日常使いが行われている。ノートの代わりがタブレット端末になっていたり、生徒の発表がクラス全員の閲覧できるチャット上で行われていたり、当たり前のようにICT利用が学習に溶け込んでいた。特に印象的だったのは、ICT利用もあるが、見学した国語の授業内において生徒の学習の自由度が高い点であった。教科書音読の際は、生徒個人が読みたい箇所まで読んでから交代し、グループワークの際は教師側でグループを決めずに席周辺の生徒同士で話し始める。こういった教育も生徒の自発性に関与しているのだと新たな視点であった。筆者が小学・中学・高校生の頃はまだICTの導入がされておらず、自分が教育に関する学習を行う中で考えづらい部分であった。しかし本校を訪れたことにより細かな使用方法について学ぶことができた。教師の方々には生徒間の交友関係や個人の能力に関するデメリット面に注意しながらも、メリット面が大きいと考えて使用しているという。実際にICT利用するにはこの意見を意識して学習を進めていきたい。

⑮

学外研修の成果

人文学部日本文化学科3年  
天 池 亮 太

9月18日、私たちは学外研修の初日に岩見沢農業高校で学校見学を行いました。初めて農業高校の校舎へ入り、まず、敷地の広さに驚きました。そこでは様々な動物飼育や植物の栽培が行われており、広さ22ヘクタール(札幌ドーム5つ分)にも及ぶ広大な敷地で農業に関する実践的な学習が行われていました。そこで、私が特に関心を持ったのが日本庭園を一から作る授業です。聞いた話によると、1年生から3年生で作る工程が異なり、段階的に完成を目指していて、生徒の中には日本庭園の全国コンクールに出場するほどの腕をもつプロがいるそうです。他にも、ドローン操縦の授業を見学し、生徒さんが実際に作物に水を散布する様子を実演してくださいました。ドローンの操縦には免許が必要で、本来は免許取得に高額な金額がかかること、岩見沢農業高校の生徒は十分の一ほどの費用で取得が可能だということを聞いて、教育の支援が行き届いていることを感じました。

夜には、学外研修メンバーとの懇親会があり、普段関わることの少ない教職コースを履修している仲間との親睦を深めました。そこで私が驚いたのが、後片付けの時の団結力や、仲間を助け合う思いやりの力です。懇親会が終わった後、さっきまで和気藹々と楽しんでいたメンバーが、片付ける時間になった瞬間、お互いに作業を分担しておよそ10分で清掃が完了しました。私は実行委員だったため、清掃をしていたのですが、それ以外のメンバーも協力してくれて、教員になるにはこのようなチームワークが必要で、それを実行できる人が適任なのだと感心しました。また、仲間の一人が体調を崩した際には、2～3人が介助し助ける姿を見て、仲間を思いやる優しい心を見ました。今回の研修に参加したメンバーはとても良い教員になると思います。

研修二日目は、旭川市にある緑が丘中学校へ見学に行きました。そこではDX教育と呼ばれる、日本でも最先端の教育システムが導入されており、北海道の中学校では試験的に唯一当校が実践されていました。授業の様子を見学していると、その最先端の教育が顕著に表れており、生徒一人一人がPCを持っていて、それを活用した授業が行われていました。私が見学した国語科の授業では、作品を読んだ感想をPCに書き込み、デバイスを通じて全員分の感想共有しており、授業の効率化と視覚化が行われていました。自分たちが中学生のころにはそのような授業がなかったため、自分が教員になったときには、ICTを活用した授業を十分に行えるよう尽力しようと感じました。

今回の研修で、現在の中学校・高校の様子や授業の内容を学び、私たちが学生であった頃とは大きく異なっていることを知りました。これから教員を目指すにあたって、そのような時代の変化に則した教育を生徒に施せるように、教職コースを履修する生徒の一員として、日々精進していく所存です。

⑩

## 学外研修の成果

人文学部日本文化学科3年  
飯間蒼野

今回の学外研修では、北海道岩見沢農業高校と旭川市立緑が丘中学校を訪問した。

まずは一日目に訪問した北海道岩見沢農業高校は、7つの学科に分かれており、それぞれ専門的な知識を身につけるための工夫や施設が数多くあることが印象深かった。例えば、農業科学科であれば、食物・園芸作物の栽培などに関する学習を行い、将来は国際的な視野をもつ農業経営者としての力を育成することを目標としている。そのため、高校生の中にドローンをはじめとした取得可能な資格勉強にも力を入れていることを理解できた。また、広大な土地をもつ岩見沢農業高校だからこそ、農業や環境、食品や畜産など幅広くそして深い知識を体験的に身につけることができるのであったと考えた。

つぎに二日目に訪問した旭川市立緑が丘中学校は、DXスクールとしての授業が展開されていることが印象に残った。複数の教員が授業を行っている様子を、自分たちで教室を変えながら見学することができた。そこで、私は国語の授業を二つ見学に行ったのだが、一つは実習生の授業、もう一つは授業の中で情報端末を用いた授業であった。実習生の授業は、緊張している様子がなく、堂々と生徒に向き合っている姿が印象に残った。私も教育実習に向けて、授業研究をしていかなければならないと実感することができた。また、情報端末を駆使していた授業においては、情報端末と紙の使い分けが勉強になった。どちらか一方を使うのではなく、紙や黒板を用いることで、生徒の出した意見を反映しやすくしており、さらに情報交換の際には情報端末を用いることで、わかりやすくそして他者との比較や共有が簡単にできるという、それぞれのメリットを最大限生かしている授業であると感じた。これからの授業では、このような知識や能力は必要不可欠である。そのため、模擬授業や教育実習の際にも積極的に情報端末を活用していくことで、身につけていきたいと考える。

そして、学外研修だからこそその思い出を作ることができた。初対面の仲間や一緒に履修してきた仲間など、さまざまな人との交流ができたことが本研修の魅力であると感じた。そのため、学校訪問により新たな知識を得ることができる点のみならず、ともに教職課程を受講している人と交流でき仲を深めることができる点も、学外研修に参加する理由のひとつであると考えている。今後も、一瞬一瞬を大切に、充実した深みのある学習にしていきたい。

⑰

## 学外研修の成果

人文学部日本文化学科3年

瓜田琴音

9月18日と19日に行われた学外研修では、北海道岩見沢農業高等学校と旭川市立緑が丘中学校へ訪問し、校内を見学させていただきました。

北海道岩見沢農業高等学校での研修は、校長先生や教員の方から、学校の特徴や方針、取得できる資格等のお話を聞き、他校にはない魅力を知ることができました。特に印象的だったのは生徒自身がドローンを操縦し、農業を行っていたことや生徒のために整備された、豊かな学びの環境です。校内には様々な家畜や果樹園等があり、農業を学ぶ生徒にとって最適な環境であり、指導を行う教員の方々の知識や経験が生徒の学びを支えているのだと実感しました。

旭川市立緑が丘中学校での研修では、普段の授業で用いているICT機器やデジタル教材等のお話を聞かせていただきました。ICTを積極的に授業に取り入れ、生徒だけでなく教員のICT教育にも力を入れていると聞き、ICTを教育で活用することの重要性を再認識しました。授業見学では、「国語」の授業を中心に見学へ行き、ICTがどのように授業で活用されているのかを知ることができました。ICT機器を用いて生徒個人の感想や意見、質問を教員に送信し、送られてきた内容を教員が全体に共有しており、発言やグループワークの機会は少なく感じましたが、生徒が好きなように好きなタイミングで意見や質問をすることができるのは、生徒にとって学びやすく、表現がしやすくなると感じました。また、教員が板書をする負担を削減できたり、テンポよく授業を進めることができたりすることを知ることができました。

今回の学外研修を通して、北海道にある中学校や高等学校について無知であると再認識できたことや「ICT」というものについて考える機会になりました。教員を目指す上で、今回の学外研修で学んだことや感じたことを忘れず、「教育」と「ICT」について考えを深め続け、「ICT」を授業で効果的に利用できるよう努力します。

⑱

## 学外研修の成果

人文学部日本文化学科

鈴木 優 萌

今回の学外研修では、岩見沢農業高等学校と旭川市立緑が丘中学校を訪問しました。どちらもこれまでに経験したことのない学習環境であり、多くの学びを得ることができました。

岩見沢農業高等学校には普通科が無く、農業科や畜産科といった農業分野に特化した学科が設置されていました。校内にはこれまで目にしたことのない専門的な機械が数多く並んでおり、農業に関する知識や技術を実践的に学ぶ環境が整っていることを強く感じました。また、食品企業との連携や研究活動に加え、資格取得や就職を視野に入れた手厚い支援が行われている点も特徴的で、生徒が社会に出てから活躍できるような実践教育が展開されていました。特に印象に残ったのは、造園の実習やドローンを用いた実習に取り組んでいた姿です。生徒が自分の力で真剣に作業している姿は高校生とは思えないほど立派で、専門高校ならではの教育を実感しました。

旭川市立緑が丘中学校は、リーディングDXスクール事業指定校であり、生徒がタブレット端末を活用した授業が行われていました。見学の時間内は校内を自由に回ることができ、主に国語の授業を見学しました。そこでは、自分の意見をチャット機能で入力し、他の生徒の意見を気軽に閲覧できる仕組みが取り入れられており、スタンプを使って共感を示したり、意見を即座に共有できる点が非常に効率的で、従来の授業にはない新しい学び方だと感じました。また、小テストの点数をスプレッドシートに入力して管理するなど過去の授業データも整理できることで、授業の振り返りだけでなく、自分自身の考え方の変化や深まりを確認できる点も大きな特徴だと感じます。ICTを活用した教育は、単に便利だけでなく、生徒一人ひとりの学びを可視化し、主体的な学びを促進していることを実感しました。

どちらの学校にも共通していたのは、生徒が主体的に学びに取り組めるよう工夫されている点です。教員を目指す立場として、教育現場の多様な取り組みを知ることができたことは大きな収穫でした。今回の学外研修で得た経験や知識を、今後の教育実習や将来教員になった際に生かしていきたいと思いました。

⑱

## 学外研修の成果

人文学部日本文化学科3年  
町田 きら

今回の学外研修では、北海道岩見沢農業高等学校と旭川市立緑が丘中学校を訪問した。

1日目に訪問した岩見沢農業高校では、はじめに学校の概要について説明を受け、その後は農業高校ならではの施設を見学した。野菜を育てるビニールハウスや牛舎、ドローンの操縦なども見学し、その中で農業でもデジタル化が進んでいることを肌で感じ、農業DXについて理解を深めることができた。

農業高校の生徒は、就農するイメージが強かったが、農家になりたい生徒の方が少なく、進学と就職の割合は半々で、さまざまな進路選択ができることを学び、とても意外に感じた。また、さまざまな企業や農家と連携していることを学び、学校外とのつながりが多いことは、生徒にとっても魅力的だと考えた。

2日目に訪問した旭川市立緑が丘中学校では、はじめに学校の概要について説明を受け、その後自由に授業の参観をした。私は、はじめに教育実習生が行っていた2年生の国語の授業を参観した。授業の冒頭で行われた漢字の小テストでは、テストの結果を生徒がiPadに記録している様子が見られた。実際に同年代の教育実習生の授業を参観したこともとても貴重な経験になった。

次に、1年生の国語の授業を参観した。参観した授業は、模擬授業で扱った単元だったため、とても興味深く感じながら参観した。この授業では、登場人物の感情のグラフを作ったり、自分の考えをチャットに送信したり、それにリアクションしたりするなど、とても積極的にiPadを活用しており、それが主体的・対話的で深い学びになっていると考えた。教員は模範解答を示さず、チャットの中から生徒自身が良いと思う考えをワークシートに記入するよう指示しており、学校の概要で説明があったように、「子どもに学びを預ける」ということだと考えた。

今回の学外研修では、貴重な経験をし、多くの学びがあったため、このことを教育実習など今後に活かしていきたいと考えた。

⑳

## 学外研修の成果

人文学部日本文化学科3年

宮城 さら

私が学外研修一日目の農業高校で学んだことは、農業高校と普通科学校の類似点と相違点についてです。私は、岩見沢農業高校を見学するまで農業高校の生徒の多くは農家になるためだと思っていました。しかし、農業高校から大学へ進学する人や専門学校に進学する人がいると知り、農業という名がつく高校でも選択肢はたくさんあるということを知りました。さらに、本格的な実践指導を受けることでその分野への興味が増したり、より専門性を高めるために専門学校へ通いたいという意欲につながるかもしれないという点で、普通科と同じように進路に幅があるように感じました。しかし、農業高校の7つある学科の教材費や授業料に着目したところ、環境造園学科に一番教材費などがかかっていることがわかりました。これは実際に庭師などが使うはさみと同じようなものを使用している点、取り扱いが少ない点から高くなっていると教えていただきました。先生たちもどうにか安くする方法はないのかと検討しているとおっしゃっていました。さらに、私は自分の出身高校が免許取得禁止という校則があったことから、農業高校はどうか尋ねたところ、特別な理由がないと受け入れられなく、その特別な理由というものも卒業してすぐに自分の家の農業を継がなければならないといった場合などと、農業高校ならではの校則でした。

二日目には旭川市立緑が丘中学校に見学に行きました。この中学校では、多くの生徒がICTを使いこなしていて、タブレットで板書する子や小テストの結果をタブレットに打ち込む授業など生徒だけでなく先生も使いこなしていました。私が印象に残ったのは、教育実習生の授業と教育実習生の実習先に行く姿勢です。教育実習生は自分から中学校を志願して緑が丘中学校に実習に来ると聞いてすごく感心しました。さらに、教育実習生はICTに怖気づいている感じもなく授業を進めていたことが印象に残っています。

私はこの学外研修で教職課程を履修している仲間を目の当たりにすることができてよかったと思っています。私は2部学生なので1部の学生とかかわることが少なかったなのでこの場でみんなと仲良くなれてよかったです。さらに、普段話すことのない先生と話す機会も増え、とてもいい思い出になりました。自分が教師になったら生徒のことを思いやることのできる先生になりたいと思いました。ICTに関しても怖がらずこれからの模擬授業を行っていきたいです。

⑳

## 学外研修の成果

人文部英米文化学科3年  
上 家 優 空

今回の学外研修では、北海道岩見沢農業高等学校と旭川市立緑が丘中学校を見学させていただきました。

北海道岩見沢農業高等学校に到着して最初に学校の概要の説明を聞きました。この学校には7つの学科があるそうで、大学のように感じました。この学校の先生から、世間では生徒が皆農家を目指しているように考えられているが、決してそうではなく、色々な業界に就職したり、進学したりしていると説明を聞き、自分が農業高校に対して偏見を持っていたことに気づきました。そのあと、牛舎や畑、田んぼを見学しました。牛舎では、実際に牛のお世話をしている生徒がいて、当番は朝早くから世話をしていると聞いて、彼らの動物を育てる責任を感じ、感心しました。畑では様々な種類の野菜やワイン用の葡萄を見学して、特にカゴメの加工品用のトマトの畑が印象に残っています。高校生のうちから企業と協力して実習を行えるのは、農業高校の強みだと感じました。田んぼでは、農業用ドローンを操縦する資格を持った生徒が実際に操縦するところを見学しました。高校を卒業したら実家で農家になるという生徒が数人いて、将来のことを見据えて資格を取得していることに感服しました。

旭川市立緑が丘中学校はリーディングDXスクール事業に指定されている学校で、ICTを活用した授業を見学しました。国語の授業では、生徒が板書をICT端末で行っていて、黒板を写した後に自分で書き込みたいことを書いているのを見て、良いICTの使い方だと思いました。英語の授業では、絶滅危惧種について1人ずつポスターを作成していて、オンライン上で作成することで、修正や共有が簡単にできていたので、効率的に学習できているように感じました。Teamsのようなツールをただ使わせるだけでなく、不適切な使い方をしたときにしっかり指導をしているとお話があり、自分が教師になった時にも生徒たちが責任をもってICT端末を使えるような教育をしたいと思いました。

大学で授業を受けるだけでは分からない教育現場の実態を、実際に自分の目で見ることによって、自分なりにこのような授業をしたいという未来構想を明確にすることができました。2日間で学んだことを、この先の模擬授業や教育実習に役立たせることができるように努めていきます。

②

## 学外研修の成果

工学部社会環境工学科3年

畑 中 柊 哉

今回の学外研修では、岩見沢農業高校と旭川市立緑が丘中学校へ訪問した。

岩見沢農業高校では、ドローンを用いた農業を行っていて、ほかの高校にはないような授業がいくつもあった。中でも印象に残ったのは日本庭園を造る授業で、三年生が作っていた庭園は圧巻だった。また農業高校ならではの試みもあった。それが、農家は試すのに抵抗があるような新種の野菜を試作で作ってみて、もしうまくできるやり方を見つけた場合には農家にその方法を教えるというものだった。この方法を行うことで農家の広大な畑で試作することなくより確実に農業に取り組めるので画期的な考えだと感じた。

旭川市立緑が丘中学校では、全学年の様々な授業を自由に見学した。この学校は特にICT教育に力を入れていて、一人一台貸し出しのiPadを持って授業を受けていた。見学している中で、生徒がiPadを上手に使いこなしているなど感じた。また良い意味で自由度が高く、数学の授業の問題演習の時間では解き終わった生徒が自由に教室を歩き、解けていない生徒に教えている姿が見られた。人によっては生徒同士で教えあうほうが理解も高まる場合もあるのでこの制度は自分の授業でも取り入れることができるなど感じた。

今回の学外研修では、普通科の高校ではない特殊な授業を見学し、ICTの高レベルな活用法を身近で感じることでとても有意義な研修だった。普通科の教員になった場合もう農業校に関わることはないが、ICTの活用法は今後の教育で生かすことのできる分野なので、ICTとうまく関わっていきたい。

②③

## 学外研修の成果

工学部社会環境工科3年

渡 邊 颯 太

今回の研修での学校見学や授業参観、普段なかなか関わる事のない他の学部との交流を通し、新しい発見や自分自身の糧となるものが多く得られたと思う。

岩見沢農業高校では今まで知らなかった農業学校の実態を知ることができた。農業学校特有の畜産や食品、造園などの学びに加え、愛玩動物の犬の学習をしていることや普通学校と同様な英語などの通常の学習はもちろん、DX学習としてドローンを用いた稲作やその操縦の学習や資格の習得を目指すカリキュラムにとっても興味をひかれた。ただ農業などのことのみを学ぶわけではないということを知り農業学校の魅力を知ることが出来た。

旭川市立緑が丘中学校では、数学の授業のみならず様々な教科の授業を参観させていただいた。先生がICTを活用した授業を展開していたことは自分自身の勉強になり、面白く興味深い授業ばかりであったがそれ以上に生徒が難なくICTを使いこなしながら、数学ではグラフを作成したり、英語の授業ではポスターを作ったりするなど周りの生徒と協力しながら学習している姿がとても印象に残った。自分自身まだICTを活用した授業を作ったことがないがこれから授業をしていく上で必ず必要になっていくものだと思うので今回の参観で得た知識や技術を活かせるようにしていきたい。また、生徒と学んでいくという姿勢を大事にするということを教わった。

そして、今回の研修では多くの人と関わる事が出来たことをとても嬉しく思う。工学部である自分はなかなか他の学部の先生方や生徒と関わる事が無く、教科教育法や教職総合演習ではどのような授業を行っているのか、将来の教師像や教員になるために今どのような活動をしているか、必要なことなど様々なことを短い時間ではあったが交流会を通して話し、知ることが出来たことがとても有意義な時間を過ごせたと感じる大きな瞬間だった。

これから、さらに本格的に教員になるための勉強が始まっていくが自分以外の学部にもこれほど多くの生徒がともに頑張っていると思うと、自分もこれからもっと努力していかなければならないと感じる時間にもなり今まで以上に前向きな気持ちになった。

〈業務報告〉

## 2025 年度 教職準備研修会(学内研修)・教職課程研究会報告

小 形 秀 雄

(北海学園大学工学部講師)

(2025 年度担当：後藤 聡・上野直幸・小形秀雄)

本年度は11月29日(土)、8号館4階B41番教室にて午前に教職準備研修会(学内研修)、午後に教職課程研究会を開催した。以下に実施内容を報告する。

### 教職準備研修会(学内研修)

#### 1 時程・発表者・担当者

9:00 受付 実行委員 大垣太紅海, 前川 世梨, 渡邊 美結, 小田 恵也, 松本 優生,  
渡邊 颯太, 増田 太陽, 渡部 祥吾

9:30 開会式

司会：実行委員 前川 世梨, 渡邊 美結

挨拶：実行委員長 大垣太紅海

9:40 体験発表

① 教育実習 工学部 4年 梶田 宙 (中学校理科で実習)

② 教員採用検査 人文学部 4年 西村 結衣 (中・高 国語) 札幌市

五井 彩桜 (高校 国語)

経営学部 4年 椎名 瑠々 (中学 社会)

法学部 4年 奥山 結衣 (高校 地歴公民)

工学部 4年 高木 幸大 (中学 数学)

安藤 凜音 (中学 理科)

人文学部 4年 加賀 智早 (高校 英語)

経営学部 4年 渡会 絢音 (高校 情報)

11:00 採用検査について

① 採用検査全般について 北海道教育委員会

② 採用検査の概要 教職課程 田中弥栄子

12:15 終了

#### 2 参加状況

3年生 49名

経済 6名 地域経済 5名 経営 1名 経営情報 0名 法律 4名

政治 3名 日本文化 11名 英米文化 7名 社会環境工学 5名

建築 4名 電子情報工学 1名 生命工学 2名

4年生 8名

経済 0名 地域経済 0名 経営 1名 経営情報 0名 法律 0名

政治 1名 日本文化 2名 英米文化 1名 社会環境工学 0名

建築 0名 電子情報工学 1名 生命工学 2名

計57名

3 アンケートの集計結果 ※集計数 48名（3年生のみ）

(1) 時期について

ア 適切だった 41名

イ 遅すぎる 7名

希望する時期は 4月頃3名, 5月頃0名, 6月頃0名, 7月頃1名,  
8月頃0名, 9月頃2名, 10月頃1名

ウ 早すぎる 0名

(2) 「教育実習」体験発表について

ア 参考になった 48名

イ どちらとも言えない 0名

ウ 適切ではない 0名

(3) 「教員採用検査」体験発表について

ア 参考になった 47名

イ どちらとも言えない 1名

ウ 適切ではない 0名

(4) 「教員採用検査（道教委の説明含めて）」の説明について

ア 参考になった 46名

イ どちらとも言えない 2名

ウ 適切ではない 0名

(5) 教職準備研修会についての意見・要望・感想など

- ・北海道の中高教員だけでなく、私立教員や非常勤教員などの説明も少ししていただき良かった。
- ・実際の体験などを話して頂たり、文章にしてくれるのはとても助かりました。
- ・取り組んでいくべきことが明確になった気がしました。
- ・想定していたよりもちゃんとした会だと思いました。とても参考になりました。
- ・最初の1次試験や2次試験の日程や、どういう問題が出るのかは最初の人だけで良く、それ以降は対策のやり方だけで良いのではないかと思いました。
- ・非常に身になる内容でした。ありがとうございました。
- ・特にありません。すごく内容が濃くて、学びの多い時間でした。ありがとうございました。
- ・面接の対策や一次試験の対策など、とてもためになることを知ることができました。
- ・高校の5教科ではない専門を目指しているの、情報の方のお話も聞きたいと思った。
- ・不安なことが多かったが、その多くが今回の講話によって解消された。勉強の仕方、意識すべきこと、面接、実務における体験、教育実習など全て参考になった。

#### 4 まとめ

- ・採用検査の体験発表は合格者それぞれの立場からの有益な話が多かった。中学校と高校の発表者数が同程度であったことは、3年生にとっては有益だった。また、各教科の合格者から代表の発表にしているため、時間的に予定どおり進めることができた。
- ・アンケート結果からも、体験発表（教育実習、採用検査）だけでなく、採用検査の説明、対策についても例年通りおおむね好評であった。
- ・アンケート結果から時期的にもう少し早くてもよいのでは、という意見も多いが、4年生の教育実習が10～11月まで実施されている状況では厳しいと考えている。事実、今年も数人が教育実習で欠席であった。
- ・3年生の6月に教員採用試験の教養試験（前倒し試験）を受験できることから、2年生の参加も検討したい。

### 教職課程研究会

#### 1 時程・講演者・担当者

- 13:00 受付 実行委員
- 13:30 開会式  
司会：教職課程 荻原 克男・浅村 亮彦・五十嵐素子  
挨拶：教職課程委員会委員長 後藤 聡
- 13:45 現職教員講話（各30分）
- ① 市立札幌藻岩高等学校教諭 福田さとみ 様  
演題「伴走者としてのおとなを目指して」
  - ② 帯広市立西陵中学校教諭 山崎 風也 様  
演題「教員のやりがい」
- 15:05～15:15 休憩
- ③ 北海道稚内高等学校教諭 三浦 静也 様  
演題「教師になって～大学生の自分に伝えたいこと～」
  - ④ 市立札幌みなみの杜高等支援学校長 小山 学 様  
演題「あなたの「想い」が未来を創る」
- 16:30～17:00 豊陽会から連絡  
4ブロック（講師別）に分かれて質疑・応答
- 17:00 閉会

#### 2 参加状況

3年生 48名

経済 4名 地域経済 6名 経営 1名 経営情報 0名 法律 5名  
政治 3名 日本文化 9名 英米文化 6名 社会環境工学 5名  
建築 4名 電子情報工学 4名 生命工学 1名

4年生 83名

経済 6名 地域経済 6名 経営 5名 経営情報 0名 法律 11名

政治	9名	日本文化	16名	英米文化	11名	社会環境工学	2名
建築	4名	電子情報工学	4名	生命工学	9名		
科目等履修生	1名						
教員	大学教員（教職課程・非常勤講師）	8名					
	豊陽会事務局	4名					
	講師（卒業生）	4名					
	卒業生	27名	計	175名			

### 3 感想（アンケートに記載の主なもの）

- ・工学部生は半強制的に1年次に全て取りきれないといけないこと、7限に開校や山鼻での開講など、1年次に全て単位を取れるのはいいことではあるが、教採の頃にはもう忘れていて。かといって4年まで持ち越すと、卒業研究や卒業論文の作成などかぶり、それはそれで難しい。前倒しなどで勉強しなくてはいけない工学部の3・4年次にとってはかなり厳しい。
- ・実践的な科目が多く設置されていて、教育実習で役に立つことが多くありました。国語科の上野先生、地歴科の石黒先生には特にお世話になりました。卒業後、すぐに教員にはなりません。社会経験を積み、将来的には教員あるいは教育や青年に関わる仕事をしたいと思っています。教職課程に携わってくださる全ての先生方に感謝しています。ありがとうございます。
- ・入学当初は教員はただ教えるだけだと思っていたため、教職課程を履修して教員がどれだけ大変か知ることができました。自分は教職の道に進む予定は今のところないですが、教職課程で学んだことを今後社会に出ても活かしていきたいと思います。
- ・大変だったが履修してよかった。
- ・自分は教職の道に進まないが、学べることが多くてよかった。
- ・採用試験合格できて良かったです。
- ・一、二年生の時は、授業の内容がどのように現場で活かされるのかがうまく想像することができず、単位修得だけが目的となってしまう、効率よく学習することができなかった。
- ・国語の免許で必修になっている漢文学と上野先生のゼミの時間が被っていて、時間割の調整が大変でした。将来の選択肢を狭めないために履修した教職課程で、結果的に教職に就かない選択をしましたが、それでも決して無駄だと感じる時間や講義はなく、確実に自身の成長につながったと感じています。
- ・手厚い指導のおかげで教採にも合格し充実した学生生活を送ることができました。仲間たくさんできて楽しかったです。
- ・教員になるためのサポートをたくさん得られて良かった。
- ・模擬授業の機会が多くあったので、授業の簡単なイメージを掴むことが出来て教育実習でも役に立ったと思う。
- ・自分の大学生としての時間を充実したものにできた。
- ・自分の学科の勉強との両立がとても大変だったが、様々な学びを得ることができた。
- ・教員についてだけでなく、様々なことを学べたため良かった。
- ・先生方の手厚いサポートがあって、とても心強かった。北海学園大学でよかったなと思いました。

- ・教員になるための資質や能力を身につけることができた。
- ・とても良い経験になり、将来教員になってもならなくてもためになる授業ばかりでした。
- ・現職の先生たちのお話を聞いて、学校の内情を知れてよかった。先生方のマインドを参考に頑張りたいと思った。
- ・先生方のサポートが手厚く、学園で教職課程を履修して良かったと思います。
- ・自分の夢に近づくことができた。学びたいことを学ぶことができた。
- ・工学部生は1年生で全て単位を取得してしまうため学んだ内容をほぼ覚えている。
- ・相談に行ったら親身になっていただいた先生が多くて、安心感がありました。4年間ありがとうございました。
- ・教職課程を履修しなければ気づけないこと（教員側から見た学校の内側や教育の諸問題等）に気づくことができたので、履修して良かった。
- ・とても充実した課程だった。
- ・様々な方面への見聞を広めることができてとてもよかったです。
- ・一般科目と違い、出席することが義務付けられていることが多いため、単位の取得が難しかった。
- ・当時は実感できなかったが実習や教採対策を通して、教職で学んだ知識がたくさん活かされていることを実感し、ほんとに教職を取って良かったと思った。
- ・教職課程を通して、生徒との指導や関わり方だけでなく教育現場の実態や教員の働き方などを知ることができてよかったです。そういった知識は、教員にならなくても役立つ機会がくるのではと思いました。実際に、実習に行ったことで教師として働くことのイメージが鮮明になりました。
- ・教育に関して多くのことを学ぶことが出来ました。
- ・教員になる上での知識が付いたり実習で実体験が出来てとても今後の為になったのでよかった。
- ・教職を目指す人たちと切磋琢磨していくことで、自分の能力や世界が広まったと感じる。ただ、1年生の時に教職教養をとってしまい、せっかく学んだことを忘れてしまっていることが多いので、1年生の時の努力があまり報われないと感じた。
- ・教職課程を通して、教員以前に、一人の人間としてどうありたいのか、自分と向き合うことができました。どのような姿勢で社会と関わりたいのか、人と関わる上で何を大切にしたいのか等、これから生きていく上で自身の基盤となるものを築き上げることができました。このように、自己形成を進められた点が、教職課程を受講した成果だと感じています。
- ・初めから教員になる気はなかったが、教員という仕事に少し興味がわいた。
- ・教育の楽しさを感じ、大学生活において非常に良い経験になった。
- ・私は工学部であるため、1年目で豊平キャンパスで履修できる教職科目をすべて履修する必要があったため、とても大変だった。4年間の課程で将来教員として活かせるものが多々あるため、ぜひ活かしていきたい。
- ・自分は今の状態で教員になれないと潔く決心がついた。
- ・授業準備や教材作成の過程で計画性や工夫の大切さを学び、教師としての責任の重さも感じました。
- ・もっと授業実践をしたかった。三年次に教育実習に行きたかった。

- ・人との関わり方、特段、生徒との関わり方を学ぶことができたと思う。それはこれからの生活に必ず生きることだと思うし、学べて良かった。また、教職を志す仲間との出会いもいいものだと思う。もし、この先教員をやる場合、生きることだと思う。
- ・教員になりたくて教職課程を履修したため、色々な科目を通して教職について学ぶことができたので良かったです。
- ・大学生活が充実しました。ありがとうございました。
- ・学部の講義だけでは得られない実践的な学びや経験を積むことができた点が良かった。
- ・特に教育実習の経験が教員になるならない関係なくとても良い経験になったなと思った。教職課程を取ったおかげで仲間もできたしとっても良かったなと思った。
- ・北海学園大学の教職課程に携わっている先生方はとても熱心で、本当にここで学べて良かったと思った。
- ・一般科目や専門科目よりも為になる授業が多かった。今までの私たちに関わるものであり、これからの子供たちにも関わるものなので履修できてよかった。
- ・自分は工学部なので、1年生の間に教職教養の部分を全て履修してしまい、3年生で試験を受ける際にあまり覚えていなかったもので、2、3年生の時に工学部生が勉強できる環境があればもっといいなと思った。
- ・幼い頃から教員を目指していた私にとっては、北海学園大学の教職課程を履修して本当に良かったなと思います。
- ・合格できて良かったです。身になる授業や実習、いい仲間と先生方に出会えてかけがえのない時間となりました。もし教員にならなかつたとしても、学校のしくみを知ることができるので、面白かったと感じると思います。
- ・様々な事案について、色々な人とたくさん話し合いをすることが出来たと感じます。それは自分にとってとても有益でした。
- ・工学部のため1年生の時にほとんどの科目の単位をとらなければならない点が大変だった。四年、三年の試験で復習する際に思い出すのも苦労したため、気軽に豊平校舎の授業を山鼻キャンパスの生徒でも受けられるようにして欲しいと感じています。
- ・普段学ぶことができない内容ばかりだったためとても勉強になった。
- ・教師として学校で求められる資質や実際の職務について学ぶことができ、実習で視野を広げると同時に学んだ知識を実践することができたことで、宝物のような経験を得ることができました。ありがとうございました。
- ・時間割の都合で大変であったが充実していた。
- ・とても楽しく学ぶことができ、友人も増え、履修してよかったと心から思います！
- ・先生方に大変お世話になりました。ご指導いただきありがとうございました。
- ・教員としての資質・能力について学ぶことができました。本当にありがとうございました。
- ・親の勧めで履修した教職だったのでモチベーションが続かないことも多々ありましたが、先生方と仲間たちの存在に支えられて4年まで継続することができました。卒業後は民間に就職しますが、人生の選択肢として教員もとても魅力のある職業だということを学べた4年間でした。
- ・教員としての資質・能力について学ぶことができました。本当にありがとうございました。

#### 4 まとめ

- ・講師については、教員3名、管理職1名に委嘱したが、予定どおり4名の講演を実現できた。
- ・講師の学校種は中学校1名高校2名特別支援学校1名で、中学校、高等学校、特別支援学校の幅広い学校種の状況を聞くことができたのは、学生にとって有意義であったと思われる。4名の講師からのそれぞれの経験からの示唆に富む講話は好評であり、特に現実の学校の状況を知る上で貴重な話であった。
- ・これまで実施してきた60番教室から8号館4階B41番教室に変更しての実施であったが、受付場所や資料置き場等について十分広いスペースを確保できた。特に問題なく進めることができたので、次年度以降も引き続き今回の会場で実施することとしたい。
- ・感想からは教職課程を履修して得るものが多かったこと、不安が払しょくされたこと、大いに刺激を受けたこと、教師にはならないが教師という仕事に興味を持てたこと、などの言葉が多かった。
- ・「教職実践演習」の授業の一環としての実施が定着し、学生の受講態度や姿勢から大いに刺激を受けた様子が伺える。

〈業務報告〉

## 2025 年度 教職課程インターンシップ報告

元 紺 谷 尊 広

(北海学園大学経営学部講師)

(2025 年度担当者：五十嵐素子，元紺谷尊広)

本学教職課程では，教職に対して意欲ある学生が高校生への指導を経験する機会として，北海学園札幌高等学校との連携により，教職課程インターンシップを実施している。

このインターンシップは，2004 年度（平成 16 年度）から実施されている伝統的事業であり，学生が実際の学校で生の実践的研修を行うことを大きな目的としている。

具体的には，北海学園札幌高等学校が実施する，冬期学力補充講習のチューター，グローバルヴィレッジ（宿泊研修）と支笏湖遠足での援助・指導及び教員補助業務である。

一昨年度，昨年度は諸事情により，支笏湖遠足の援助・指導のみの実施となったが，今年度は支笏湖遠足がクマ出没の影響により中止となってしまったのでインターンシップが実施できなかった。

〈業務報告〉

# 2025年度 一般社団法人全国私立大学教職課程協会・ 北海道私立大学・短期大学教職課程研究連絡協議会 に関する活動報告

後 藤 聡

(北海学園大学法学部教授)

(2025年度担当：荻原克男，浅村亮彦，五十嵐素子，後藤 聡)

一般社団法人全国私立大学教職課程協会（以下「全私教協」と略記）は、2016年7月1日に設立された。その前身は、1980年5月に発足した任意団体の全国私立大学教職課程研究連絡協議会である。全私教協は、全国8地区（北海道，東北，関東，東海・北陸，京都，阪神，中国・四国，九州）の教職課程が設置されている私立大学（以下，短期大学を含む。）を会員とし，正会員399大学，準会員23短期大学・短期大学部，特別会員4大学で構成されている（2025年5月現在）。私立大学における「教師教育の社会的責務とその重要性に鑑み，相互に研究を深め，連携協力することによって，開放制教育職員免許制度の下における教師教育の充実と発展に寄与すること」を目的とし，教職課程運営や教員養成に関する研究および情報交流のため，定時社員総会および研究大会，教職課程運営に関する研究交流集会，会報『教師教育研究』の発行，研究委員会などの諸活動を行っている。役員は，各地区の加盟校から選出される。

北海道私立大学・短期大学教職課程研究連絡協議会（以下「道私教協」と略記）は，教職課程が設置されている北海道内の私立大学・短期大学・公立大学を会員とする組織であり，教職課程運営や教員養成に関する研究，その他情報交換などを目的として，定期総会，研究大会，会報発行などの活動を行っている。会員は27大学・短期大学である（2025年7月現在）。本学は幹事校として道私教協の運営に携わっている。

以上について，今年度は荻原克男，浅村亮彦，五十嵐素子，後藤 聡が担当した。

## 『2025年度の活動』

2025年5月17・18日	全私教協 2025年度定時社員総会・第44回研究大会	松山大学
2025年5月27日	道私教協 2025年度第1回幹事校会	オンライン開催
2025年7月5日	道私教協 2025年度定期総会・第44回研究大会	
		TKP ガーデンシティ PREMIUM 札幌大通
2025年11月15日	全私教協 2025年度教職課程運営に関する研究交流集会	千葉工業大学
2025年12月9日	道私教協 2025年度第2回幹事校会	オンライン開催
2026年2月24日	道私教協 2025年度第3回幹事校会	オンライン開催



# 資 料

〈資料〉

## 2025年度 ガイダンス等

開催日	開催時間	対象学年	対象学部	教室	担当教員
4月3日(木) 新入生ガイダンス	13:40~14:10	新入生	経済・経営・法	42	五十嵐
			人	41	荻原
	工		40	後藤	
	20:30~20:50		経済・経営・法・人	42	浅村
4月4日(金) 在学生ガイダンス	14:00~15:00	新2・3年生	経済・経営・法	32	元紺谷
			人	33	上野・田中
			工	34	小形
	17:30~18:30	新2・3年生	経済・経営・法	32	元紺谷
			人	33	上野・田中
4月4日(金) 履修登録相談日	14:00~16:00	全学年	全学部	D20	荻原・浅村・上野・小形・元紺谷・田中
	17:30~19:00				後藤・荻原・浅村・五十嵐・上野・小形・元紺谷・田中
4月5日(土) 介護体験実習ガイダンス	16:00~19:00	介護体験実習履修希望者	全学部	D20	後藤
4月7日(月) 履修登録相談日	14:00~16:00	全学年	全学部	D20	後藤・荻原・浅村・五十嵐・上野・小形・元紺谷・田中
	17:30~19:00				後藤・荻原・浅村・五十嵐・上野・小形・元紺谷・田中
4月10日(木) 教育実習直前ガイダンス	14:45~15:45	教育実習履修者	全学部	C31	小形
4月11日(金) 教育実習直前ガイダンス	18:00~19:00	教育実習履修者	全学部	C31	元紺谷

〈資料〉

## 2025 年度 会議実施状況

### 教職課程統括委員会

第1回 3月予定

### 教職課程運営委員会

第1回 4月4日

第2回 4月8日

第3回（メール審議） 6月17～20日

第4回（メール審議） 9月3～9日

第5回（メール審議） 9月29日～10月3日

第6回 11月5日

第7回 12月8日

第8回 3月上旬予定

第9回 3月下旬予定

### 教職課程委員会

第1回 5月1日

第2回（メール審議） 9月3～9日

第3回 3月上旬予定

〈資料〉

## 2025年度 実習実施状況

### 教育実習

実習人数 94人（中学校48名，高等学校46名）

実習先 81校（中学校43校，高等学校38校）

教員 萩原克男 後藤 聡 浅村亮彦 五十嵐素子 上野直幸  
小形秀雄 元紺谷尊広 田中弥栄子 浅妻 裕 上園昌武  
大屋定晴 鈴木雄大 佐藤 淳 上野誠治 片岡耕平  
郡司 淳 田中 綾 田中洋也 南 明世 森川慎也  
岡本浩一 加口 初穂 笹森崇行 菅原 滋晴 友池史明  
新沼 協 米田浩志

### 介護体験実習

実習人数 68人

実習先 特別支援学校：8校，社会福祉施設：45施設

〈資料〉

## 2025 年度 教育実習校訪問指導者一覧

	実習校名	実習教科	実習期間	実習開始日	実習終了日	訪問担当者	区分
1	市立札幌新川高等学校	地理	3週間	5月7日	5月27日	元紺谷尊広	市内
2	市立札幌藻岩高等学校	地理	3週間	5月7日	5月27日	小形 秀雄	市内
3		物理	3週間	5月7日	5月27日	小形 秀雄	市内
4	北海道札幌白石高等学校	日本史	3週間	5月7日	5月27日	浅村 亮彦	市内
5	北海道鹿追高等学校	数学	3週間	5月7日	5月23日	小形 秀雄	道内
6	釧路市立景雲中学校	社会	3週間	5月12日	5月30日	元紺谷尊広	道内
7	恵庭市立恵み野中学校	英語	3週間	5月12日	5月30日	田中弥栄子	近郊
8	市立札幌大通高等学校	政治経済	2週間	5月12日	5月23日	後藤 聡	市内
9	千歳市立千歳中学校	社会	3週間	5月12日	5月30日	元紺谷尊広	近郊
10	北海道旭川南高等学校	国語	3週間	5月12日	5月30日	後藤 聡	道内
11	北海道函館西高等学校	日本史	3週間	5月12日	5月30日	荻原 克男	道内
12	苫小牧市立啓明中学校	数学	3週間	5月19日	6月6日	小形 秀雄	近郊
13	函館市立桔梗中学校	英語	3週間	5月19日	6月6日	浅村 亮彦	道内
14	岩内町立岩内第二中学校	数学	3週間	5月26日	6月13日	小形 秀雄	近郊
15	池上学院高等学校	歴史総合	3週間	5月26日	6月13日	元紺谷尊広	市内
16	北海道羽幌高等学校	政治経済	2週間	5月26日	6月6日	元紺谷尊広	道内
17	北海道苫小牧工業高等学校	化学	3週間	5月26日	6月13日	小形 秀雄	近郊
18	小樽市立西陵中学校	英語	3週間	6月2日	6月20日	田中弥栄子	近郊
19	函館市立五稜郭中学校	国語	3週間	6月2日	6月20日	荻原 克男	道内
20	北海道札幌国際情報高等学校	公共	3週間	6月6日	6月26日	荻原 克男	市内
21	北海道滝川高等学校	日本史	3週間	6月6日	6月26日	後藤 聡	近郊
22		英語	3週間	6月6日	6月26日	後藤 聡	近郊
23	遠軽町立遠軽中学校	社会	3週間	6月9日	6月27日	元紺谷尊広	道内
24	市立札幌清田高等学校	日本史	3週間	6月9日	6月27日	元紺谷尊広	市内
25	北海学園札幌高等学校①	英語	3週間	6月9日	6月27日	田中弥栄子	市内
26	北海道教育大学附属釧路義務教育学校	数学	3週間	6月9日	6月27日	小形 秀雄	道内
27	北海道札幌厚別高等学校	地理	3週間	6月9日	6月30日	後藤 聡	市内
28	北海道札幌北陵高等学校	公共	2週間	6月9日	6月20日	元紺谷尊広	市内
29	清水町立清水中学校	英語	3週間	6月16日	7月4日	田中弥栄子	道内
30	東海大学付属札幌高等学校	国語	3週間	6月16日	7月5日	後藤 聡	市内
31	北海道札幌西陵高等学校	国語	3週間	6月16日	7月4日	上野 直幸	市内
32	北海道札幌東陵高等学校	地理	3週間	6月16日	7月4日	後藤 聡	市内
33	北海道石狩南高等学校	歴史総合	2週間	6月16日	6月27日	元紺谷尊広	近郊
34	北海道石狩南高等学校	地理	3週間	6月16日	7月4日	元紺谷尊広	近郊
35	北海道函館商業高等学校	英語	3週間	6月16日	7月4日	田中弥栄子	道内
36	札幌静修高等学校	日本史	2週間	6月23日	7月5日	五十嵐素子	市内
37	小美玉市立小川北義務教育学校	国語	3週間	6月23日	7月11日	道外の為対象外	道外
38	那須塩原市立塩原小中学校	社会	3週間	6月23日	7月11日	道外の為対象外	道外
39	七飯町立七飯中学校	理科	3週間	7月7日	7月25日	小形 秀雄	道内
40	北斗市立浜分中学校	社会	3週間	8月22日	9月11日	後藤 聡	道内
41	北斗市立茂辺地中学校	社会	3週間	8月22日	9月13日	後藤 聡	道内
42		国語	3週間	8月22日	9月13日	後藤 聡	道内
43	共和町立共和中学校	国語	3週間	8月25日	9月12日	荻原 克男	道内
44	札幌市立あいの里東中学校	国語	3週間	8月25日	9月12日	上野 直幸	市内
45	札幌市立稲積中学校	国語	3週間	8月25日	9月12日	片岡 耕平	市内
46	札幌市立栄中学校	社会	3週間	8月25日	9月12日	後藤 聡	市内
47		国語	3週間	8月25日	9月12日	後藤 聡	市内

北海学園大学教職課程年報 第18号 〈資料〉

	実習校名	実習教科	実習期間	実習開始日	実習終了日	訪問担当者	区分
48	札幌市立札幌北中学校	社会	3週間	8月25日	9月12日	佐藤 淳	市内
49	札幌市立篠路西中学校	数学	3週間	8月25日	9月12日	米田 浩志	市内
50		理科	3週間	8月25日	9月12日	小形 秀雄	市内
51	札幌市立手稲東中学校	社会	3週間	8月25日	9月12日	後藤 聡	市内
52		理科	3週間	8月25日	9月12日	小形 秀雄	市内
53	札幌市立新川西中学校	社会	3週間	8月25日	9月12日	浅村 亮彦	市内
54	札幌市立新陵中学校	社会	3週間	8月25日	9月12日	元紺谷尊広	市内
55	札幌市立真駒内中学校	数学	3週間	8月25日	9月12日	岡本 浩一	市内
56	札幌市立澄川中学校	数学	3週間	8月25日	9月12日	小形 秀雄	市内
57	札幌市立西岡北中学校	社会	3週間	8月25日	9月12日	後藤 聡	市内
58	札幌市立前田中学校	社会	3週間	8月25日	9月12日	浅村 亮彦	市内
59		国語	3週間	8月25日	9月12日	上野 直幸	市内
60	札幌市立藻岩中学校	数学	3週間	8月25日	9月12日	菅原 滋晴	市内
61	札幌市立中央中学校	数学	3週間	8月25日	9月12日	小形 秀雄	市内
62	札幌市立日章中学校	社会	3週間	8月25日	9月12日	上園 昌武	市内
63	札幌市立八軒東中学校	理科	3週間	8月25日	9月12日	友池 史明	市内
64	札幌市立美香保中学校	社会	3週間	8月25日	9月12日	元紺谷尊広	市内
65	札幌市立陵北中学校	社会	3週間	8月25日	9月12日	浅村 亮彦	市内
66	帯広市立帯広第八中学校	国語	3週間	8月25日	9月12日	南 明世	道内
67	札幌大谷中学校	社会	3週間	8月27日	9月18日	後藤 聡	市内
68	むかわ町立鷗川中学校	理科	3週間	9月1日	9月19日	新沼 協	近郊
69	鹿追町立鹿追中学校	国語	3週間	9月1日	9月19日	上野 直幸	道内
70	市立函館高等学校	日本史	2週間	9月5日	9月19日	鈴木 雄大	道内
71	帯広市立西陵中学校	理科	3週間	9月8日	9月26日	小形 秀雄	道内
72	北海道岩見沢東高等学校	国語	3週間	9月8日	9月30日	上野 直幸	近郊
73		政治経済	3週間	9月8日	9月30日	元紺谷尊広	近郊
74	英語	3週間	9月8日	9月30日	上野 誠治	近郊	
75	北海道苫小牧東高等学校	公共	2週間	9月8日	9月22日	元紺谷尊広	近郊
76	北広島市立西の里中学校	社会	3週間	9月8日	9月26日	元紺谷尊広	近郊
77	北海道滝川西高等学校	国語	3週間	9月11日	10月3日	田中 綾	近郊
78	北海道雄武高等学校	国語	3週間	9月18日	10月10日	上野 直幸	道内
79	北海道苫小牧南高等学校	政治経済	3週間	9月19日	10月10日	後藤 聡	近郊
80	札幌山の手高等学校	国語	3週間	9月22日	10月14日	郡司 淳	市内
81	北海高等学校	日本史	3週間	9月29日	10月20日	浅妻 裕	市内
82	札幌静修高等学校	国語	3週間	10月1日	10月22日	片岡 耕平	市内
83	北海道科学大学高等学校	数学	3週間	10月2日	10月24日	笹森 崇行	市内
84	北海道札幌国際情報高等学校	英語	3週間	10月2日	10月24日	田中 洋也	市内
85	遠別町立遠別中学校	英語	3週間	10月6日	10月24日	田中弥栄子	道内
86	北海学園札幌高等学校②	情報	2週間	10月6日	10月17日	浅村 亮彦	市内
87		英語	3週間	10月6日	10月24日	森川 慎也	市内
88		日本史	2週間	10月6日	10月17日	元紺谷尊広	市内
89	北海道根室高等学校	政治経済	3週間	10月6日	10月24日	元紺谷尊広	道内
90	酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校	国語	3週間	10月6日	10月28日	南 明世	近郊
91	北海道札幌東商業高等学校	商業	2週間	10月20日	10月31日	元紺谷尊広	市内
92	帯広大谷高等学校①	数学	3週間	10月31日	11月21日	カストロ ホワンホセ	道内
93	浦河町立浦河第一中学校	理科	3週間	11月4日	11月21日	小形 秀雄	道内
94	帯広大谷高等学校②	政治経済	2週間	11月10日	11月21日	大屋 定晴	道内

## 編集後記

本年報第18号は、本学教職課程にとって大きな転換点となる一冊です。前号でお知らせした通り、今年度より冊子体による郵送を廃止し、完全デジタル媒体としての発行へと移行いたしました。

これまでお手元に届くことを楽しみにされていた方々との繋がりが失われてしまうのではないかと、という懸念もありましたが、デジタル化は単なるコスト削減や環境配慮に留まるものではありません。デジタル媒体への移行によって、以下のような新たな価値が加わることになります。

一つ目は、閲覧性の向上です。検索機能により必要な情報へ即座にアクセスでき、スマートフォンやタブレットから場所を選ばず閲覧が可能になります。

二つ目は、アーカイブとしての安定化です。冊子体は保管場所を必要とし、歳月のなかで散逸してしまう恐れもあります。デジタルデータとして公開・保存されることで、本課程の歩みはより確実に次世代へと継承されることが期待できます。

三つ目は、情報の迅速かつ広範な共有です。これまでは卒業生や学外の皆様にとって、本学教職課程の具体的な取り組みに触れる機会は限られていましたが、今後は研究成果や最新の動向をより広く、迅速にお届けできるようになります。

このように、デジタルという大きな翼を得たことで、本年報がこれまで以上に多くの方々のお役に立てるよう、今後も継続的に内容をアップデートしていく所存です。

(文責：五十嵐)

---

北海学園大学教職課程年報  
第 18 号

2026 年 3 月 31 日

発 行 北海学園大学教職課程  
〒062-8605 札幌市豊平区旭町 4 丁目 1 番 40 号  
TEL 011-841-1161  
FAX 011-841-1165

印 刷 (株)アイワード

---